



IEHE Report 87
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第38回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [20] 報告書

国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来
— よりよい大学入試の実現を目指して —

令和 5 (2023) 年 11 月

東北大学高度教養教育・学生支援機構
国立大学アドミッションセンター連絡会議

第 38 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [20]）

国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来
——よりよい大学入試の実現を目指して——

- ◇ 日 時 : 令和 5 年 5 月 17 日（水）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール（及びオンライン配信）
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構
◇ 共 催 : 国立大学アドミッションセンター連絡会議

プログラム

司 会 香川大学人文社会科学系アドミッションセンター教授 竹内 正興 氏

開 会 の 辞 東北大学総長 大野 英男

会 長 挨拶 東北大学副理事／国立大学アドミッションセンター連絡会議会長 長濱 裕幸

来 賓 挨拶 文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室長 平野 博紀 氏

基調講演 1 国立大学アドミッションセンター連絡会議 20 年の歩みと今後の展望

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 倉元 直樹 氏

（休憩）

現状報告 1 私立大学における入試研究の課題——国公私を横断する入試研究への期待——

大正大学地域創生学部教授 福島 真司 氏

現状報告 2 高等学校から見た高大連携と大学入試

青森県立弘前中央高等学校校長 齋藤 郁子 氏

（休憩）

討 議

指定討論 山形大学理事・副学長 出口 毅 氏

討議司会 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 宮本 友弘

佐賀大学アドミッションセンター教授 西郡 大 氏

閉 会 の 辞 東北大学理事・副学長 滝澤 博胤

第 38 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [20]）

国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来 ——よりよい大学入試の実現を目指して——

目 次

第 38 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
会長挨拶	5
来賓挨拶	7
第Ⅰ部 基調講演	
基調講演者紹介	11
基調講演 1 : 国立大学アドミッションセンター連絡会議 20 年の歩みと今後の展望 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 倉元 直樹 氏	12
第Ⅱ部 現状報告	
現状報告者紹介	31
現状報告 1 : 私立大学における入試研究の課題 ——国公私を横断する入試研究への期待—— 大正大学地域創生学部教授 福島 真司 氏	33
資料	41
現状報告 2 : 高等学校から見た高大連携と大学入試 青森県立弘前中央高等学校校長 齋藤 郁子 氏	44
資料	49
第Ⅲ部 討 議 ——パネルディスカッション——	
指定討論者紹介	55
討議	56

閉会の辞	77
------	----

講評

講評 1： 第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して 青森県立弘前中央高等学校 寺山 明哲 教諭	79
講評 2： 第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して 岩手県立花巻北高等学校 八尾 晃一 教諭	82
講評 3： 第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して 宮城県仙台南高等学校 北村 孝之 主幹教諭	84
講評 4： より良い高大接続及び高等教育実現に向けての「目線合わせ」 秋田県立秋田高等学校 土門 高士 教諭 兼 教育専門監	89
講評 5： 入試研究を通して考える高大連携・高大接続の未来 山形県立山形東高等学校 棚村 好彦 教諭	92
講評 6： 第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して 福島県立橘高等学校 佐久間 裕之 教諭	96

アンケート・参加者統計

第 38 回東北大学高等教育フォーラムアンケート	101
アンケート自由記述	102
参加者統計	113

第 38 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



「国立大学アドミッションセンター連絡会議」は平成 15（2003）年 6 月 4 日の設立総会から今年で 20 周年を迎える。年に 1 度行われる全国大学入学者選抜研究連絡協議会の機会に総会を持ち、その時の課題に合わせて講演、事例発表、討論、シンポジウム等の活動を行ってきた。会員校は発足当初の 13 校から徐々に増加し、令和 4（2022）年 5 月現在で 41 大学 41 機関となっている。一方、現在に至るまで、国立大学における「アドミッションセンターとは何なのか？どうあるべきなのか？」という存立基盤にかかわる根本的な問いが投げかけられたことはなかった。その結果、それぞれの解釈に沿って各大学にアドミッションセンターに相当する組織が運営されて現在に至っている。大学入学者選抜制度が大きく揺れ動く中、幹事会の中では現状のままで果たして次の 10 年を無事に乗り切れるのか、という疑問が生じていた。

そこで、昨年 6 月に発足した 20 周年記念事業実行委員会では、記念事業の一環として非加盟大学を含む国立 82 大学（大学院大学を除く）に対し、アドミッションセンターの組織、業務、将来展望等に関する質問紙調査を実施することとし、75 大学から回答を得た（回収率 91.5%）。その結果から、組織の多様性とともに入試制度設計」「調査・分析」「高大連携（入試広報）」といったミッションにおける共通項も見えてきた。さらに将来に向けての人材育成機能が決定的に不足している実態が浮かび上がってきた。

20 周年記念シンポジウムでは、国立大学アドミッションセンター連絡会議の 20 年の歩みを振り返った上で、調査結果から見えてきた現状と将来に向けての課題に関する基調講演を行う。それを受けて、外部のステークホルダーである私立大学、高等学校関係者から見た「国立大学のアドミッションセンター」

に関わる現状報告を行う。休憩の後、近未来のよりよい大学入学者選抜制度に向けた「アドミッションセンターの将来像」に関して、フロアからの意見も交えたパネルディスカッションを予定している。高校および大学の先生方、関係する方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期待している。

なお、本企画は東北大学高度教養教育・学生支援機構との共催であり、「第38回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える[20]）」の企画として実施するものでもある。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラムに参加し、フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評、および、アンケート・参加者統計から成る。招待参加者は、東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ、各県1名ずつ選ばれた方々である。

本報告書は、録音から起こした原稿に対し、発言者が校正を加え、最終的に編集責任者が表現の修正を加えたものである。招待参加者の原稿については、体裁の統一に関わる部分を除いて、表現の修正は行っていない。

編集過程で生じた不具合に関しては、全て編集者の責任である。

（編集担当：東北大学 高度教養教育・学生
支援機構高等教育開発部門入試開発室
准教授 久保沙織）

開 会 の 辞

東北大学総長
大野 英男

竹内正興教授（司会）：

本日は、ご来場、オンラインのそれぞれで、全国から多数の皆様にご参加をいただき、誠にありがとうございます。

それでは、予定の時刻となりましたので、これより第 38 回東北大学高等教育フォーラム「国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来——よりよい大学入試の実現を目指して——」を始めさせていただきます。

ご案内のとおり、本フォーラムは東北大学と国立大学アドミッションセンター連絡会議の共催であり、当連絡会議の 20 周年記念企画シンポジウムとして実施するものであります。

本日は、国立大学アドミッションセンター連絡会議の 20 周年記念事業実行委員会より、私、香川大学の竹内が総合司会のほうを担当させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、主催者を代表し、大野英男東北大学総長よりご挨拶を申し上げます。残念ながら、本日、大野総長はほかの案件とスケジュールが重なってしまいまして、来場することができませんでした。そのため、ビデオメッセージをお預かりしております。それでは、大野総長からのご挨拶をご覧ください。

大野英男総長：

ご紹介いただきました東北大学総長の大野です。開会に当たり一言ご挨拶を申し上げます。

まず初めに、国立大学アドミッションセン



ター連絡会議設立 20 周年、誠におめでとうございます。2003 年に 13 機関でスタートした連絡会議は、高大接続や入学者選抜業務の改善と研究をミッションに、現在 41 機関が加盟する大学入試の専門家集団として発展を遂げています。この間、シンポジウムや講演会を通して、入試改革の動向や各大学での入試への取り組みについて情報共有を行い、高校や受験生への広報にも多大なご尽力をされてこられた関係者の皆様に深く敬意を表します。

また、本日、シンポジウムと共催の第 38 回東北大学高等教育フォーラムの開催に当たり、ご来賓としてご挨拶をいただきます文部科学省高等教育局の平野博紀大学入試室長をはじめ、ご登壇いただきます先生方に厚く御礼を申し上げます。

さて、年 2 回開催しておりますこのフォーラムも 20 年目になります。私も毎年参加をさせていただいて、大変勉強させていただいています。今回のテーマは、「国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来——よりよい大学入試の実現を目指して——」

です。

国立大学に入試関係専門の部署が設けられて、2000 年に AO 入試が導入されて以来、AO 入試は大学入学者選抜制度としてすっかり社会に定着しました。その一方で、実施大学と定員は着実に増えているものの、社会の変化に伴い、新たな課題が指摘されるなど、アドミッションセンターの担う役割も時代とともに変化していると感じています。

本日の基調講演を行う本学の倉元直樹教授は、長年にわたり東北大学の入試の構築と運営に努めてまいりました。このたび、連絡会議 20 周年記念事業の一つとして、全国の国立大学を対象に行った調査結果も踏まえながら、国立大学の入試の足跡と今後の展望についてお話をいたします。

現状報告としては、まず大学側を代表して大正大学の福島真司先生にご登壇いただきます。福島先生は国立大学でアドミッション関係の役職を歴任された経験もおありで、国立大学と私立大学双方の現状を熟知された広い視野から入試研究の課題についてお話を伺います。

続いて、青森県立弘前中央高等学校校長の齋藤郁子先生にご登壇いただきます。齋藤先生は、青森県の進路指導のエキスパートとして、高校並びに受験生側からの視点で、高大連携と大学入試についてお話をさせていただきます。

さらに、今回の討議では、山形大学教育・入学試験担当理事・副学長の出口毅先生に指定討論者をお務めいただきます。国立大学の入試責任者としての鋭いコメントもいただきながら、内容の濃い議論を進めていただけるものと期待しております。

国立大学は、6 年間の第 4 期中期目標・中期計画期間の 2 年目を迎えました。法人化から今に至るまでの取り組みを振り返るとともに、少子化が加速する日本において、国立大学は今後どのような貢献をすべきかが問われ

ています。たとえ厳しい環境にあっても、将来を担う優秀な人材を育成することは国立大学共通の責務であります。そのためにも、より充実した入学者選抜制度の整備は重要課題です。

参加の皆様におかれましては、本日のシンポジウムを通して、それぞれのお立場から大学入試の在り方とアドミッションセンターの果たすべき役割について改めてお考えいただくと同時に、高等教育全般の向上につながる活発な議論が展開されることを祈念いたしまして、私からの開会のご挨拶とさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

会 長 挨 拶

東北大学副理事／国立大学アドミッションセンター連絡会議会長

長濱 裕幸

竹内正興教授（司会）：

続きまして、同じく主催者を代表しまして、東北大学副理事、国立大学アドミッションセンター連絡会議会長、長濱裕幸からご挨拶を頂戴いたします。長濱先生、よろしくお願いいたします。

長濱裕幸会長：

ただいまご紹介にあずかりました国立大学アドミッションセンター連絡会議会長の長濱でございます。くしくも 20 周年の区切りの年に会長を務めさせていただいております関係から、一言ご挨拶させていただきます。

先ほど、東北大学大野総長のお言葉にありますように、平成 15 年に 13 大学で発足しました本連絡会議ですが、昨年の総会の時点で加盟大学が 41 大学を数えるほどになりました。発足以来、ほぼ毎年、大学入試センター事業として実施されております入研協、大学入学者選抜研究連絡協議会の初日に総会及び報告会議等の協議を実施しておりましたが、令和 2 年度から新型コロナウイルス感染の蔓延に伴いまして、入研協がオンラインでの実施に移行しており、そのことから運営のスタイルを継続することができなくなりました。

そのような折、令和 2 年 6 月に本学、東北大学で事務局をお引き受けすることになりました。それから、対面での交流機会の不足を補うために連絡会議はウェブサイトを作成し、年次総会を本学で高等教育フォーラムと共催の形で実施することになりました。本会の運営に携わってまいりましたが、大学入学者選抜を取り巻く環境の変化が激しく、従来の運



営方針には限界を感じているのも事実であります。

本連絡会議が 20 周年を迎えるにあたって、改めて国立大学におけるアドミッションセンターの現状を明らかにし、本連絡会議の存在意義を問い直すべく、20 周年記念事業実施委員会の下で全国立大学を対象にした調査が行われました。本日はその調査の結果を披露されるということで、私自身も楽しみにしております。国立大学のみならず、公立大学、私立大学を含めた大学関係者、また大学進学志望者への指導を行っておられます高等学校の先生方々、さらには広く社会に関心をお持ちいただける方々の協議を展開されることが期待されております。

本日は、会場にご来場の皆様方以外にも、多くの方がオンラインで参加くださっていると聞き及んでおります。貴重な時間を割いていただいて協力していただくことを、皆様方にとって実りのある時間になるよう、盛会を願っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）

来 賓 挨 拶

文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室長

平野 博紀 氏

竹内正興教授（司会）：

続きまして、来賓としてご出席いただいております、文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室、平野博紀室長からご挨拶を頂戴いたします。

では、平野室長、よろしくお願いいたしますします。

平野博紀室長：

ただいまご紹介にあずかりました文部科学省高等教育局大学教育・入試課大学入試室長の平野でございます。

本日は、このような形で東北大学高等教育フォーラム、また国立大学アドミッションセンター連絡会議の20周年記念企画シンポジウムが開催されますことにつきまして、まずお喜びを申し上げたいと思います。この開催にご尽力いただいた東北大学の関係者の皆様、また連絡会議の関係者の皆様のご尽力にも敬意を表したいと思います。

本日のシンポジウムの中では、アドミッションセンター連絡会議の20年の歩みと今後の展望、また、私立大学、高等学校などのステークホルダーからのご発表、関係する先生方の討論というのが予定されているというふうにお伺いしております。このような中で、各大学の入試改善につながる貴重な情報が得られるということを期待申し上げたいと思います。

さて、昨年度の大学入学者選抜については、一昨年度起りました不正行為の問題、また刺傷事件に対応する安全対策の問題、そしてコロナ禍での入試ということで大変ご苦労が



多い中で、各大学におかれましては入試業務の適正な執行にご尽力いただいたということについて感謝を申し上げたいと思います。不正対策、安全対策というものにつきましては、これは去年だけの課題ではなく、これからもずっと続いていく重大な課題でございます。引き続きご苦勞をおかけするところでございますけれども、ぜひ対応のほうをよろしくお願いいたしますと思います。

また、各大学の個別選抜というほうに目を転じてまいりますと、各大学の入試の改革というのも進んでまいりまして、多面的・総合的な評価、こういった丁寧な選抜というものも拡大してきていると、こういう状況でございます。

最近のトピックということでご紹介させていただきますと、理工系の女子をはじめとした多様な背景を有する学生の選抜、このようなものも進んでいるところでございます。このような選抜につきましては、単にその属性を持っている者が入学するということではなく、その属性を持っている方に一体どのような能力を発揮していただきたいのか。そのよ

うなことを具体的に定義した上で、それをしっかりと確認できるような選抜方法になっているかどうか。このようなところが社会的な理解を得る上でも極めて重要でございます。

また、各大学の好事例というものの共有も文部科学省として図ってまいりたいと思いますので、そのようなものも参考にしながらお取り組みを進めていただければありがたいと思っております。

最後に、また一つトピックということでございますけれども、昨年度、文部科学省の中央教育審議会のほうから「教学マネジメント指針」の追補ということで、大学入試に関する部分を出させていただきました。いわゆるディプロマ・ポリシーにおいて卒業時に身につけさせたい能力というものを具体的に定義し、その能力に達するために必要なカリキュラムというものをカリキュラム・ポリシーを中心に整備をしていく。そして、アドミッション・ポリシーというものについては、4年間という限られた時間の中で、どうすればカリキュラムを通じてゴールに達せられることができるかという観点から、最初のうちに備えてほしい能力、具体的には初年次の教育というものについていける能力というものをきちんと測ることができているか。このような観点でつくっていただくということなどを謳っております。

指針の中では、いわゆる学長先生のリーダーシップの下でしっかりガバナンスを確立し、アドミッションセンターもそうでありませうけれども、専門職員のしっかりとした活躍というものが期待されているところでございます。

このような指針でありますとか、本日のシンポジウムということを通じて大学入試の改善が進んでいくように、文部科学省としてもしっかりと後押しをしてまいりたいと思しますのでよろしくをお願いします。

それでは本日のシンポジウムが実り多いものになることを改めてお祈りして、私のご挨拶

とさせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)



竹内正興教授（司会）：

ありがとうございました。

ここでお知らせとお願いがございます。まず、本日の進行についてのお知らせです。来場参加の皆様はお手元の封筒に、それからオンライン参加の皆様は事前にメールにてご案内させていただいたオンライン参加者用ページに配付資料がございます。

配付資料のプログラムをご覧ください。先ほど、大野総長より本日の内容についてお話がありましたけれども、重なる部分がありますけれども、改めてご説明させていただきます。本日は3部構成となっております。第1部の基調講演では東北大学の倉元先生から60分程度お話をいただきます。第2部は、現状報告として、大正大学の福島先生、青森県立弘前中央高等学校の齋藤先生より、それぞれ20分程度お話をいただきます。その後、第3部では3名の先生方に再びご登壇いただき、基調講演、現状報告を踏まえての討議を行います。討議の指定討論は、山形大学の出口先生をお願いさせていただきました。第1部終了後に15分程度、それから第2部終了後に20分程度の休憩を挟む予定でございます。本フォーラムの終了は17時頃、午後5

時頃を予定しております。なお、ご登壇いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配付資料に含まれておりますので、ご覧いただければと思います。

次に、参加いただいております皆様方へのお願いになります。このたびのフォーラムでは、討議のための質問票及び事後アンケートをウェブ上でご記入いただくようご用意させていただきました。

まず、討議のための質問票についてご説明させていただきます。来場参加の皆様は、第38回東北大学高等教育フォーラム討議質問票という配付資料に記載されているQRコードを読み取り、当該ウェブページにアクセスをお願いいたします。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただきましたオンライン参加者用ページより「討議質問票へ」を選択してください。現在投影されているスライドの右下に表示されているQRコードからも質問票のウェブページへアクセスしていただくことができます。皆様方からの質問は第3部の討議に反映させていただきますので、ご記入は第2部終了後の3時25分までに行ってくださいようご協力のほどお願いいたします。なお、基調講演、現状報告に対するご質問やご意見は、3時25分までの間であればお一人の方につき複数回、何度でもご記入いただくことが可能でございます。二度目以降続けて入力する場合には、「別の回答を送信」と表示されることがありますけれども、そちらを選択していただいて構いません。また、大変恐れ入りますが、討議のためのご質問、ご意見の受付は、今回はウェブからのみとなりますので、ご理解のほどお願い申し上げます。

続いて、フォーラム終了後のアンケートへのご協力をお願いになります。来場参加の皆様は、QRコードを読み取りウェブ上でご回答いただく方法と、用紙に直接ご記入いただく方法のいずれかでお願いいたします。用紙

にご記入いただいた場合は、受付に回収箱を設置しておりますので、お手数ですがけれどもお帰りの際にご提出のほうをお願いいたします。オンライン参加の皆様は、事前にご案内させていただきましたオンライン参加者用ページより「アンケートへ」を選択してください。アンケートへのご回答は、フォーラム終了後をお願いいたします。

なお、今年度も参加された皆様方には、本フォーラムの内容等を記載した報告書を後日お送りさせていただく予定としております。皆様方のご協力のもと、本日は有意義な会となりますよう努めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

第 I 部 基調講演

基調講演者紹介

基調講演者

倉元 直樹（くらもと なおき）氏

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（テスト学，大学入試学）

〔主な著書，研究業績〕

日本テスト学会編（2007）．テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

倉元直樹編（2020）．「大学入試学」の誕生，東北大学大学入試研究シリーズ 第 1 巻，金子書房．

倉元直樹編（2020）．大学入試センター試験から大学入学共通テストへ，東北大学大学入試研究シリーズ 第 2 巻，金子書房．

倉元直樹・宮本友弘・久保沙織（2022）．コロナ禍の下での大学入学者選抜を振り返る——主として 2021（令和 3）年度入試に関連して——，高度教養教育・学生支援機構紀要，第 8 号，95-107．

倉元直樹監修（2022）．コロナ禍に挑む大学入試（1） 緊急対応編，東北大学大学入試研究シリーズ 第 6 巻，金子書房．

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会等

日本テスト学会理事（2005 年より）

〔その他の特記事項〕

全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会委員（2010 年 5 月より [継続中]）

日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞）受賞（第 27 号）（2007 年）

日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）（1995 年）

基調講演 1：国立大学アドミッションセンター連絡会議 20年の歩みと今後の展望

東北大学高度教養教育・学生支援機構
倉元 直樹 教授

【講師紹介】

竹内正興教授（司会）：

それでは、早速、第1部の基調講演に移らせていただきます。「国立大学アドミッションセンター連絡会議 20年の歩みと今後の展望」と題して、東北大学教授、国立大学アドミッションセンター連絡会議事務局長の倉元直樹先生よりご講演いただきます。倉元先生、よろしくお願いいたします。

倉元直樹教授：

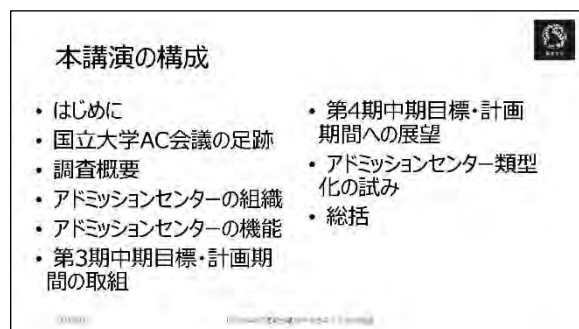
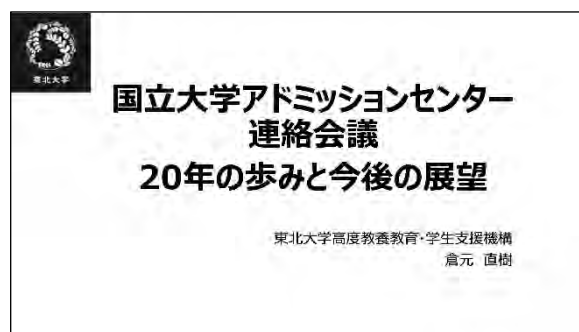
ただいまご紹介にあずかりました倉元でございます。



今日はたまたま仙台も非常に暑くなりました。お暑いです、お越しいただきましてありがとうございます。私も今年初めて半袖、上着の中は半袖を用意してまいりました。こんな中ですけれども、約1時間ぐらいですかね、私の話にお付き合いいただければと思います。

本日は、国立大学アドミッションセンター連絡会議の事務局長という立場でお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。「国立大学アドミッションセンター連絡会議 20年の歩みと今後の展望」というタイトルでございます。

本日の話の構成はこういう形になっております。周年行事ですので、通常は、今までこんな実績を積み重ねてきて、その結果こんなことができています、ということをお披露目するような、ちょっとお祭りっぽいような話を考えるところなんです、そういう形にはなっていません。その理由は講演の中でおおいおい明らかにしていきたいと思っております。



国立大学アドミッションセンター連絡会議

最初に、国立大学アドミッションセンター連絡会議という団体に関して、でございます。

国立大学の入試関連組織、これは入試課というような事務職員の組織ではなくて、いわゆる教員や専門職員が配置されている組織というのが本来の前提ですけれども、そういつ

た組織で構成される任意団体でございます。
3 年ぐらい前ですかね、「ミッション」という形で規程にあった内容を整理させていただきましたが、「高大接続関係の改善」「大学入学者選抜における業務の改善」「大学入学者選抜及び高大接続に関する研究と協議」「加盟機関相互の交流促進」ということを目的にした団体です。昨年度の段階で、大学院大学を除いて学部入試を実施しております国立 82 大学中、そのちょうど半分の 41 大学から構成されているという、そういった組織でございます。

20 周年を迎えるに当たって、20 周年記念事業をやらなければいけないというタイミングで、ある種の違和感と危機感を覚えました。これは個人的に、というよりも幹事会の中である程度共有させていただいた中身なんですけれども、まず、「アドミッションセンターって何なんだろう」ということです。実は、我々自身が分かっていない。それぞれの大学でそれぞれの解釈で運営をしているのですが、各大学におけるアドミッションセンターの大学内の位置づけがどうもはっきりしない。幹事会の中でも自分たちがどういう組織なのかということのコンセンサスがない。活動実態が不明である。実は、「1 人ポストが減らされる見込みだ」みたいな話もその中から出てきました。全体として加盟大学は増えているけれども、我々は整理縮小の対象になっているんじゃないか、というような疑念も湧いてきました。

そして「国立大学アドミッションセンター連絡会議」です。はっきり言えば、活動が非常に不活発。大学入試センターの行事である入研協にくっついて、その前に総会を行い、意見交換等を行ってきたんですけれども、入研協がオンラインになった途端に「これからどうするんだろう」というような感じになってしまった。この組織の存在意義、必要性というのがよく分からない。このままで 30 周

年迎えることはないだろうな、という話になりました。

はじめに (1)

- 国立大学アドミッションセンター連絡会議とは？
- **国立大学の入試関連組織**で構成される任意団体
 1. 高大接続関係の改善
 2. 大学入学者選抜における業務の改善
 3. 大学入学者選抜及び高大接続に関する研究と協議
 4. 加盟機関相互の交流促進
- 2022年度加盟大学数：国立82大学中**41大学**

はじめに (2)

- 20周年を迎えるにあたっての違和感と危機感
 1. アドミッションセンターについて
 - 各大学の位置づけ、活動実態が不明
 - 実は、全体として縮小傾向にあるのでは？
 2. 国立大学AC連絡会議について
 - 活動が不活発、存在意義や必要性が不明
 - 入研協（大学入学者選抜研究連絡協議会）がオンラインに
- このままでは**30周年は迎えられない？？？**

連絡会議の沿革

そもそも思い返してみますと、私ども東北大学はこの連絡会議のオリジナルメンバーなんです。13 大学で発足したので「オリジナル 13」になりますけれどもね。その一つなのですが、この組織ができたきっかけは、当時はもう退任されていた初代センター長から、中塚勝人先生という方でしたけれども、99 年にアドミッションセンター・・・と当時呼んでおりました・・・から、東北大学にもできたんだけれども、「これがいつまでも続くと思うなよ」と。いつか存亡の危機を迎えるかもしれない。そのときには単独の大学で頑張っても無理だから、「各大学が連携する母体を作っておかないといけない」というようなお話がありました。それが 3 年後、4 年後に実現したという形でできたのがこの組織だと私は理解しています。いよいよその時が来たのかな、と感じた次第でした。

はじめに (3)

- ・ 国立大学AC連絡会議創設のきっかけ（非公式）
 - ・ 東北大学アドミッションセンター（当時）初代センター長のごとき
 - ・ **存亡の危機を迎えたときに各大学が連携する母体**
→ そのときが来たのでは？
- ・ 幹事会を基軸に**20周年記念事業実行委員会**
- ・ **国立大学への調査** → 記念誌、記念シンポ

国立大学AC会議の足跡 (1)

- ・ 国立大学のアドミッションセンター
 - ・ 各大学に**入試研究の組織**を整備する
← 昭和40（1965）頃からの**文部省の方針**
 - ・ 国立大学が**AO入試を実施することによって実現**
(鳴野、2003 / 2020; 第32回フォーラム、2020)
→ アドミッションセンター ≡ **AO入試の実施組織**
- ・ 10周年記念誌（2013年6月）は、各大学のAO入試で入学した学生の特集

国立大学AC会議の足跡 (2)

- ・ 国立大学AC連絡会議の活動
- ・ **年1回の総会、それに合わせたイベント**
 - ・ 総会**は入研協当日の開始前に実施**という慣例
 - ・ 総会内容（次頁参照）
第1期（第1～11回）：非公開、内部行事中心
第2期（第12～18回）：一部、公開行事
第3期（第19回～）：公開行事

国立大学AC会議の足跡 (3)

年度	種別	会議内容	年度	種別	会議内容
2003年	第1回	設立総会	2015年	第2回	活動報告
2004年	第2回	シンポジウム	2016年	第3回	河津会（内部研修）
2005年	第3回	活動報告	2017年	第4回	活動報告
2006年	第4回	活動報告	2018年	第5回	活動報告
2007年	第5回	活動報告	2019年	第6回	講演会（外観連絡）
2008年	第6回	活動報告	2020年	第7回	シンポジウム
2009年	第7回	講演会（外部講師）	2021年	第8回	総会の幹事会協議
2010年	第8回	活動報告	2022年	第9回	シンポジウム（東北大フォーラムと共催）
2011年	第9回	シンポジウム（入研協に合催）	2023年	第10回	シンポジウム（東北大フォーラムと共催）
2012年	第10回	講演会（10周年記念特集）			
2013年	第11回	シンポジウム（10周年記念特集）			

幹事会を基軸に 20 周年記念事業実行委員会を作って、その際に何をするかを議論しました。国立大学全体に調査をして、それをもとに記念誌を作り、記念シンポジウムをやるのではないか、ということで始まった次第でございます。本日は、その調査結果に基づく記念シンポジウムという位置づけになります。

この連絡会議、どんな歩みをしてきたかということでございますが、もともとは当時の文部省の方針で、昭和 40 年頃から国立大学に入試を研究する組織が整備されました。最初は「研究委員会」という名称で各大学に入試を研究する委員会組織が作られていったという経緯がございます。鳴野英彦先生という、・・・この方は文部官僚だったんですけれども、身体を悪くされて、最後は大学入試センター研究開発部の教授になられたのですが、・・・その方が自分のそれまでの業績を振り返って手記、手記といいますか、論文を書かれた。そちらを、・・・カメラを切り替えるのはちょっと難しいですかね・・・こちらの本ですね。東北大学大学入試研究シリーズというシリーズ本の第 2 巻で、これは 2020 年に出したものですけれども、こちらの第 2 章に採録しております。ちなみに、シリーズは、現在、ほぼ 3 年間で 8 巻まで刊行されております。本日、出版社から担当が来られて、こちら販売されておりましたので、よろしかったら手に取ってご覧いただければと思います。

鳴野先生の論文によりますと、最終的にはこの入試研究の組織が常設のものとしてできたのは、いわゆる AO 入試ですね、国立大学が AO 入試を実施するということによって実現した、というふうに書かれておりました。確かに東北大学も、当時、アドミッションセンターと呼ばれておりましたけれども、その組織も AO 入試ですね、・・・現在の「総合型選抜」ですけれども、・・・その開始と同時に作っていただいております。

したがって、初期の頃は、アドミッションセンターというと AO 入試の実施組織というイメージが強かったと思います。私どももそう思っていましたし、実際に 10 周年記念誌が作られておりますけれども、そのときには各大学の AO 入試で入学した学生の特集というものが組まれています。

連絡会議は何をやっていたかということなんですが、先ほど簡単に触れました。年1回の総会ですね。そして、それに合わせたイベントということで、入研協当日の開始前に実施するという慣例でございました。勝手に「第1期」「第2期」「第3期」と分けましたが、「第1期」というのは10周年までですね。非公開で内部の行事が中心でございます。「第2期」に入った頃に高大接続改革があったということもありまして、ごく一部公開行事が取り入れられたこともあります。「第3期」としましたのは、私どもが事務局を引き受けてからということなんですけれども、公開行事ということで実施をしています。こんな感じです。

ニューズレターからひも解いたのですが、ずっと活動報告が中心でした。外部講師として、当時の文部科学省の大学入試室長が講演をしてくださったこともあったのですが、要は全部内部の行事です。2011年には東日本大震災がありまして、自分たちで事業するのはちょっと難しいということで、入研協のシンポジウムに合流をするという形になっています。太字になっている部分が公開行事ですが、これは自前ではなかった。「第2期」もずっと形は講演会だったり、活動報告だったりしているわけですが、このときに東京大学に当時おられました南風原朝和先生を外部講師に呼んで、一般公開の講演会というのが一度だけあります。コロナになった年は総会そのものが開けなかったということなんですが、ご覧いただいているとおり、実は、外に向かって発信というのがあまりなかった状況なんです。

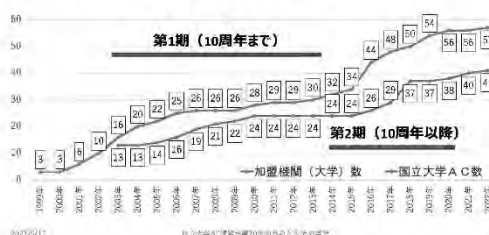
組織なんです。組織の変遷は次のページにスライドを用意していますけれども、脱退された大学は一例だけございます。オリジナルのところからほぼ保ってきたし、現在もこのところ、毎年加盟していただける大学がございまして、組織の規模は、・・・これは

調査によるものなので、正確かどうかというのは微妙な問題なのですが、・・・第1次の加盟増の時期がAO入試の導入期です、国立大学のAO入試。第2次加盟増はどうも高大接続改革の機会、その後の2年間ぐらいでバツと増えています。

国立大学AC会議の足跡 (4)

- ・アドミッションセンター組織の変遷（次頁参照）
 - ・ 廃止（組織から脱退）は1例のみ
 - ・ 現在も加盟機関（調査による独自集計）は**拡大基調**
 - ・ **高大接続改革**を機会に第2次設立ブーム
- ・ 国立大学AC会議事業の特徴
 - ・ **加盟校内部の情報交換中心** ← 特に第1期
 - ・ 非公開事業 → **活動を社会還元**する機会？

国立大学AC会議の足跡 (5)



国立大学AC会議の足跡 (6)

- ・ 国立大学AC連絡会議に与える環境条件の変化
 - ・ **大学改革** → 既存のアドミッションセンターの再編
 - ・ **高大接続改革** → 新興のアドミッションセンターの創設
 - ・ **新型コロナウイルス感染症**の蔓延 → 入研協のオンライン化
 - ・ 現在の非公開中心、入研協パラサイトモデルは**継続不可能**
- ・ 迫られる選択：30周年は来ない？（幹事会における議論）
 - ・ 発展の可能性：大学入試改善に必要な活動の方向性？
 - ・ 現状維持の可能性は？ **発展的解散の可能性も視野に**

国立大学AC会議の足跡 (7)

- ・ **20周年記念事業実行委員会**
 - ・ 第20回総会（R4.5.18開催）で承認
 - ・ 幹事会（6名の運営委員）に加え、佐賀大学、香川大学の運営委員、事務局（東北大学）から2名
- ・ 事業の構成（当初）
 - ・ 20周年記念シンポジウム（本日）
 - ・ 20周年記念誌の作成：シンポジウム終了後の総会
 - ・ 国立大学を対象とした調査

先ほど申しました事業の特徴として、中での情報交換はある程度やってきたんだけど、それを社会還元する機会が非常に乏しかったな、ということを感じます。これが国立大学でアドミッションセンターと呼ばれる組織の数の変遷です。なかなか難しいのは、調査に基づいているのでその回答次第になるのですが、後でもお話しします。私どもから見てちょっと変だなという部分もありまして、・・・というのは、多分、途中で、私どものところも組織改革があったんですけども、組織改革があって、最初の時点ではこうだったはずなのに、何でこうなっているんだろう、みたいな状況も結構あります。

加盟大学数はこんな感じです。一時期はずっと 24 大学ということがあったのですけれども、最近また増えてきています。明らかにこの時期とこの時期に国立大学にアドミッションセンターができるピークがございました。

連絡会議にとっての環境条件を見ますと、まず、大学改革で既存のアドミッションセンターが再編されている状況が読み取れます。特に、今回調査をやって一番おかしいなと思ったのは「設立年度」なんですよ。大学によっては、「設立年度はこの年です」と書いてきたより以前から、私どもの連絡会議に加盟しているじゃないか、という例がありました。おそらくそれは再編の年を設立というふうに答えていただいたんだろうなと思うんですよ。もう一つ、先ほど申し上げました高大接続改革、これをきっかけにアドミッションセンターを作る、というところが結構多かったんじゃないかな、と思います。

先ほど申しました新型コロナウイルスの関係で集まって開催というのがなかなか難しくなって、入研協がオンラインになると同時に開催の問題が表面化したわけです。現在のような非公開中心、入研協にパラサイトしていくモデルというのは、もう明らかに継続不可能ということで、選択が迫られていると思っ

ています。おそらく 30 周年は来ないでしょう。このままで行けば。

発展する可能性、これは大学入試改善に必要な活動と、これを洗い出して組織そのものを見直していくことにある。実は、事務局を引き受けたときに、正直、もう組織を畳んでしまおうかとも思ったのです。ただ考えてみたら、先ほど平野室長からご挨拶いただきましたように、毎年、大学入試室からどなたか来ていただいて挨拶をいただくような会なんです。これが自然消滅するということになると、国立大学全体の問題になってしまう。これは意地でも何とかしていくしかない。そう思ったので、ここまで一応頑張ってきました。ただ、「発展的解消」の可能性というのも視野に入れて考えなければいけないかな、というところが、少なくとも私だけではない幹事会の中の・・・全員ではないですが・・・多くの方々の意見の最大公約数というところですよ。

記念事業の実行委員会を作りました。幹事会の規程によって 6 名の運営委員がいるんですけれども、そこに加えて、先ほど司会をしていただいています香川大学の竹内先生、それから討議司会として登壇予定の佐賀大学の西郡先生、そして事務局東北大学から 2 名を加えて事業の構成を考えたということで、これは当初です。これにもう一つ加わっています。後でお話しします。

20 周年記念シンポジウムですね。シンポジウムの後に記念誌の作成をいたします。これは、この会が終わりました後、総会を開いて加盟大学に協力をお願いするという段取りです。そして、今回の講演のネタになっております国立大学を対象とした調査というところで、20 周年記念事業を考えた次第です。

調査概要

では、早速、調査概要にいきます。

調査概要 (1)

・目的

- ・ 国立大学における**アドミッションセンターの実情**解明
 1. 設置数、設置時期
 2. 組織（位置づけ、組織構成、規程、管理、専任教職員の立場・人数、人事権、決定への関与）
 3. 機能（調査研究、コンサル、入試広報・高大連携、実施、入試業務全般への関与、人材育成）
 4. 第3期中期目標期間総括、将来展望

調査概要 (2)

- ・ 調査対象、方法：**国立82大学**、質問紙調査
- ・ 調査時期：2022年11月～12月
- ・ 回収率：**76/82 (92%)**
 - ・ 加盟大学 41/42 (98%)、非加盟大学 35/41 (85%)
- ・ アドミッションセンター設置数
 - ・ 非加盟大学 20/35 (57%)
- ・ 組織、機能の**分析対象数は合計60大学**

国立大学におけるアドミッションセンターの実情解明ということで、最初に簡単な「設置の有無」だとか、「設置時期」だとかの質問がございします。

項目は大きく三つに分かれています。一つは「組織」です。大学の中での位置づけや「組織構成」「規程」「管理」「専任教職員」。「管理」というのは、「センター長」「副センター長」がどうなっているかというような話です。「専任教職員」の立場や人数、「人事権」、それから「意思決定への関与」。

もう一つは「機能」ですね。「職掌」と言ってもいいです。「調査研究」「コンサルタント業務」、これは大学内での、ですね。それから、「入試広報・高大連携」の事業、入試の「実施」「入試業務全般への関与」です。例えば、「入試業務」の例としては、私どものところでももうしばらくすると、・・・「選抜要項」と呼ばれていますけれども、・・・令和6年度入試の要約のようなものを受験生向けに発行します。それから「大学案内」だとか、そういったものを作っているかとか、あと、先ほど室長のお話にはなかったかと思

うのですが、毎年、「入試ミス」みたいなことが起こります。そういったときにどういふふうに関与するのか。そういったような話ですね。それから、「人材育成」の機能があるか。

もう一つは、「第3期中期目標期間」の総括及び「将来展望」、国立大学関係者以外にはなじみがないかもしれないので、後で簡単に触れます。

調査対象は非加盟大学も含む国立大学82大学、質問紙調査です。昨年末に行いました。非常にありがたいことに回収率92%でございます。加盟大学の中でお答えをいただけなかったのが1大学のみ、非加盟大学でも85%にご回答いただいております。

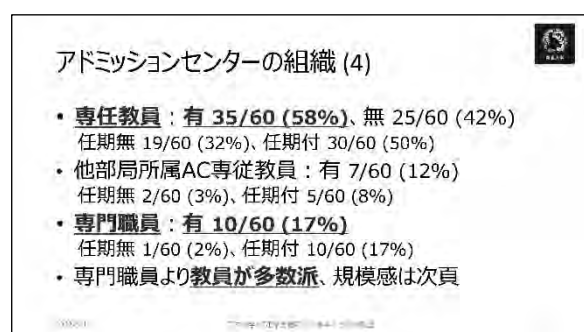
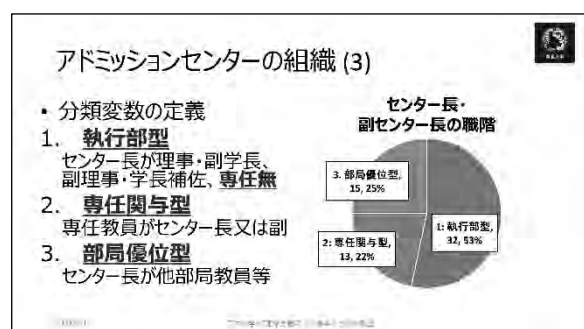
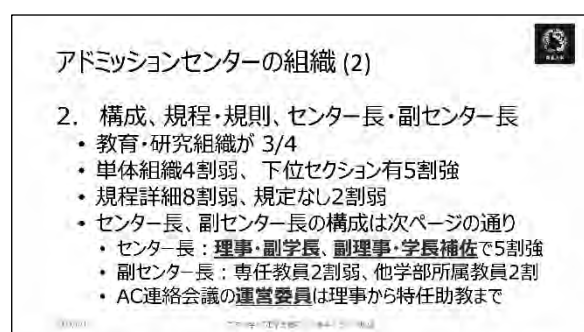
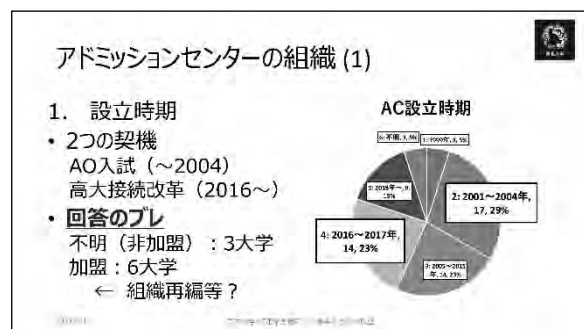
「組織」に関する調査結果

アドミッションセンターの「設置数」なのですが、非加盟大学のうち20大学は「そういったものに相当する組織がある」と答えてくださいましたので、分析対象数は、全部で60大学ということになりました。次の質問にいきます。

「組織」の中身です。「設立時期」、二つの時期に偏っていますね、3割、2割。「AO入試」の開始、それから「高大接続改革」という時期でございます。

ただ、ここで悩ましかったのは、先ほど申し上げたように回答にブレがございました。非加盟の大学で詰めきれなかったのが3大学あるのですが、加盟大学でも6大学が連絡会議への加盟時期と矛盾する回答をなさっていました。これは非常に気になるんですね。もともと、オリジナルでつくられたときと現在の状態が違うとすると、何があったんだろう、ということです。これらは、今回の調査では拾い切れなかったところなんです。後ほど、実は福島大学の、・・・失礼、山形大学の、失礼しました、・・・福島先生、ちょっとややこしいです（笑）、それから、出口先生にご登

壇いただきますが、山形大学も、実は、途中で組織が変わっている大学の一つでございます。



「構成」「規程・規則」「センター長・副センター長」についての結果です。4分の3が「運営組織」ではなくて「教育・研究組織」

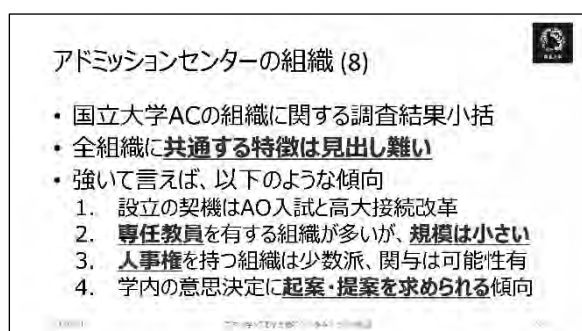
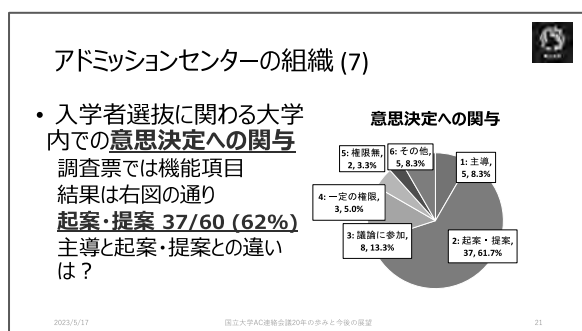
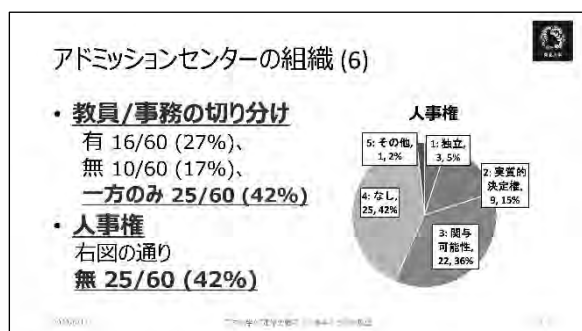
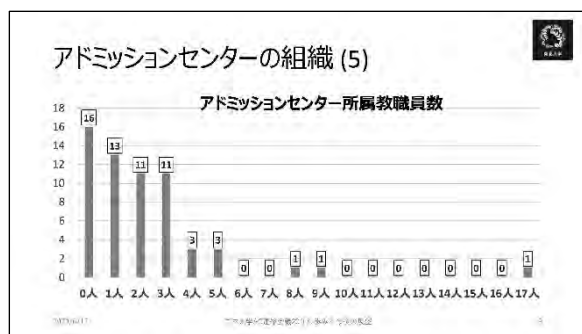
でした。「単体の組織」というのは 4 割弱、「下位セクションがある」のは 5 割強、「詳細な規程を持っている」のは 8 割弱ですね。私どものところは、東北大学入試センターの規程ってないんです。上位機関である高度教養教育・学生支援機構の中に「センターを置く」と書いてある。これもちょっと傾向が読み取れません。

「センター長・副センター長」の構成は、まとめたものは次のページなんですけど、「理事・副学長、副理事・学長補佐」というもので 5 割ぐらい。「副センター長」が「専任教員」だったり、「他部局所属」の先生。アドミッションセンター連絡会議には運営委員を各大学から出していただいているのですが、おそらく理事ではないかと思われる先生から特任助教までいます。解釈が非常にバラバラということですね。これを三つに整理しました。「専任教員」が関与しているかどうかに関心があったので「専任関与型」、センター長か副センター長というところで見ただけですけども、これは 22%ですね。専任がいない大学では「センター長」が「理事・副学長」というのが半数超えています。「執行部型」とつけました。「部局優位型」、「センター長」が執行部ではなくて部局の教員、というのは 4 分の 1 ぐらいです。組織もバラバラという感じです。

次に関心があるのが、「専任教員」「専門職員」がいるか、という話なんですけれども、6割はいるんですね。「任期無」が3分の1ぐらい、「任期付」が半分。他部局に所属して「アドミッションセンターに専従」の教員がいる、というのも少しありますし、この辺のパターンが大学によっていろいろだな、と思います。いわゆる「アメリカ型」というか、「専門職員」というのを置いているのは少数派です。教員が多数派になっています。

規模感なんですけど、アドミッションセンター所属の教職員を全部数えたところ、こんな

感じになりました。「0名」が16大学ですね。「1名」「2～3名」というところまでが通常の感じで、「4名以上」になると「大規模」というイメージです。ちなみにこちらが東北大学でございます。改めて集計してみて、ある意味、ぞっとしました。外れ値というやつですね、統計的には。



組織、教員と職員の協働という形がアドミッションセンターでは求められるわけですが、「教員/事務」の「切り分け」が「ある」のが4分の1ぐらい、「ない」のはそれより少ないんですけども、「教員」ないしは「事務職員」のみが所属しているのが4割ぐらいです。その中で、これは当事者としては非常に大事な話なんですけど、「人事権」がありますか？という質問です。4割は「人事権」が「ない」と答えています。「独立した人事権がある」というのは5%です。「実質的な決定権」、人事をアドミッションセンターの中でやっているわけじゃないんだけど「基本的に希望は聞いてもらえます」というのが15%です。自分たちのことなので「ある程度の関与の可能性があります」というのが36%ぐらい。ここでもいろいろ分かれてくるということです。

そして、これは実は「機能」の項目として聞いたのですが、「意思決定にどの程度関与できていますか？」という話ですね。入試に関する意思決定で一番多いのは、「起案・提案」する機能が「ある」というのが6割あります。「主導」しているというのは5大学ありまして9%、中には「権限なし」というところもあるんですね。「起案・提案」と「主導」というのは、実は、ちょっと違うんじゃないかなと思っています。「起案・提案」となると、やっぱり全学で、最終的には学部の意見を聞きながら意思決定すると思うのですが、「主導」となると、「これが決まりました、従ってください」という感じになると思います。

結論を言います。「組織」を見ていても分からない、ということが分かりました。共通する特徴は見出しがたいというのが実情でございます。強いて言えば、以下のような傾向があります。「設立の契機」としては「AO入試の開始」というところ、それと「高大接続改革」です。後でまた話に出しますが、ど

うしても 10 周年までは「AO 入試」で来たものですから、いまだにそれがアドミッションセンターだと思っているところもあるのですが、はっきり言えば、全体としてはそうではないですね。「専任教員」を有する組織は多いんだけど、規模は基本的に小さいです。「1 名」「2 名」というところが多いですね。「人事権」を持つ組織は少数派で、ただ「関与の可能性」までいくとかなりのところがある。そうでありながら、学内の意思決定には「起案・提案」を求められるという傾向がある、というところがまとめになります。

「機能」に関する調査結果

さて、次に参ります。次は、アドミッションセンターとは何をやっているところか、という話です。「機能」です。これは、実は、非常にはっきりしていました。「選抜方法の改善等」に関わる分析というのが 95%です。「入試広報・学生募集」に関わる調査というのは 93%、「入試結果・追跡調査の分析」が 87%、つまり、「調査研究・コンサルテーション」が基本的に求められている。そういう機能が一切ないというのは、実は、1 大学だけだったんですね。

そして、「入試広報・高大連携」ですね。これも「計画立案」「受験生、教員、保護者等への広報実施」、ここが 9 割を超えていますし、「高校訪問等」を行っているのは 85%、「OC」というのは「オープンキャンパス」ですね、75%です。「入試広報・高大連携」の機能がないという大学はないんです。「調査研究・コンサルテーション」それから「入試広報・学生募集・高大連携」というのは共通項になっています。

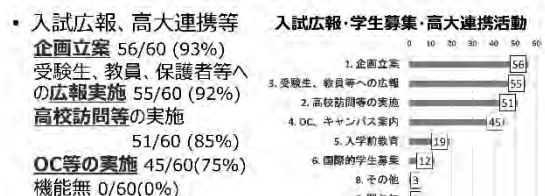
次です。これは私自身、びっくりしました。「選抜実施」はそれほどでもないのです。「一般選抜」で 6 割弱ですね。「総合型選抜」で 55%、これですよね。半分強ぐらいなんです。「学校推薦型選抜」になると 4 割で

す。すみません、文科省の新しいくくりにはちょっと沿ってなくて。多分、今だと「学校推薦型選抜」だとか「総合型選抜」に振り分けられると思うんですが、「その他の選抜」・・・例えば、私費外国人留学生入試だとか、社会人対象の入試だとか、専門高校みたいなものが入るんですけども、・・・これが 3 割ぐらい。「実施」に「関与しない」という回答も 3 分の 1 ぐらいあるんです。ということは、「入試を実施している組織」であるとは言い切れないという話になります。

アドミッションセンターの機能 (1)



アドミッションセンターの機能 (2)

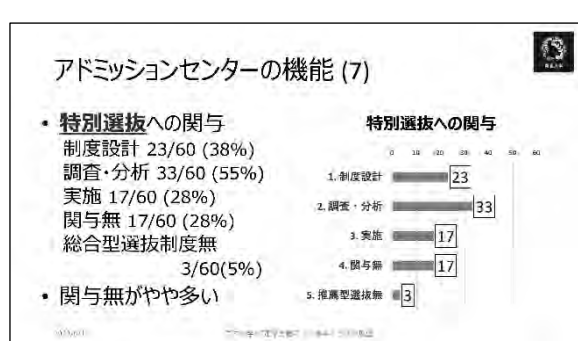
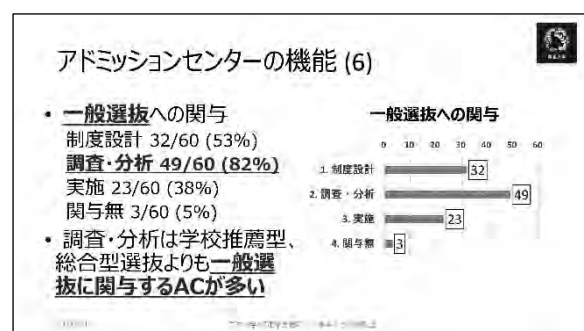
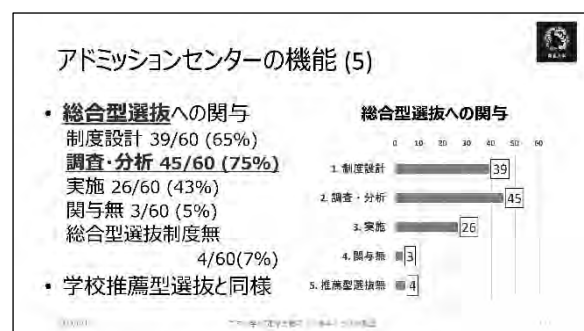
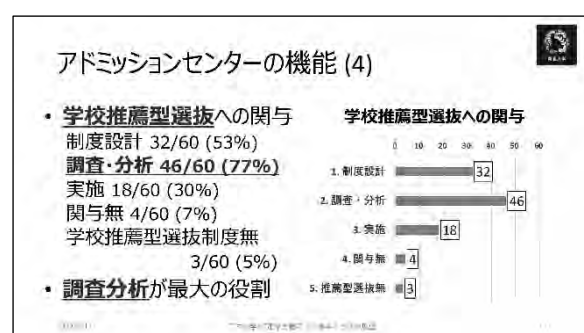


アドミッションセンターの機能 (3)

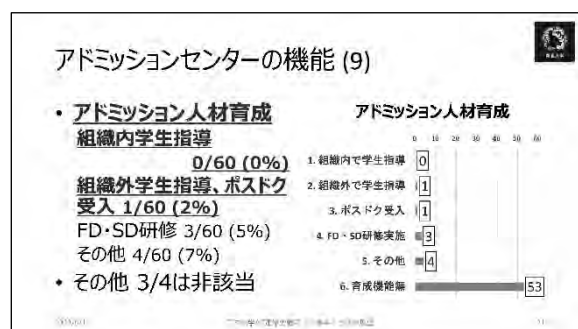
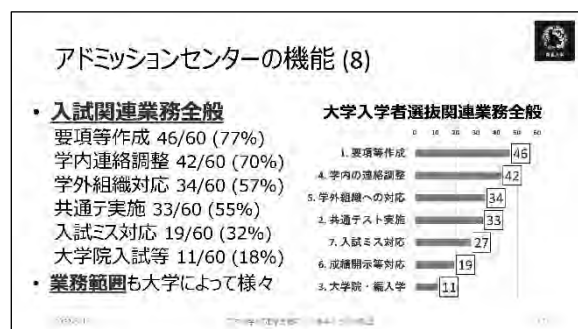


ここからはザクッといきますけれども、それぞれの選抜でどうか。「学校推薦型選抜」でも「調査・分析」が 8 割近くですね、最大

の役割になっています。ちなみに、本学はここに入ります。「学校推薦型選抜制度」「無」という3大学の中の一つです。「総合型選抜」、4分の3ぐらいが「調査・分析」です。「実施」は26大学ですから、4割強ですね。「学校推薦型選抜」と同様の感じです。じゃあ、「一般選抜」に関与していないのかというと、実は「調査・分析」では一番、若干、ですけども、他の選抜よりも多いという感じです。「特別選抜」は「ない」ところが多いかな。他と比べると、そういう感じですね。



そして、これはいわゆる入試課で実施しているような「入試関連業務全般」に関して見ると、いろいろです。要項等を作っているところは多いですが、しかし「共通テストの実施」になると半分ぐらいしか関与していないんですね。先ほど申し上げました「入試ミス等の対応」は3分の1です。「大学院入試」というのは、・・・ここまで来るとなかなか大変なんですけれども、・・・これでも2割近くあります。ここまでやっているのは、おそらく入試課の業務そのものだろうと思います。ということで、業務の範囲というのは、大学によって様々なんです。



アドミッションセンターの機能 (10)

- ・ 国立大学ACの機能に関する調査結果小括
- 1. ほとんどの大学に**共通する機能**
 - ・ 調査・入試結果分析、入試広報・高大連携
- 2. **一部の大学のみが担っている機能**
 - ・ 入試研究、制度設計、特定の選抜の実施
- 3. ほとんどの大学に付与されていない機能
 - ・ アドミッション人材の育成機能

ということで、「機能」の方をまとめます。失礼、もう一個ありました。大事な項目を飛ばすところだった。「アドミッション人材の育成機能」というところを聞きました。組織内で「学生指導」する仕組みがあります、という回答は一つもございません。「組織外」で「学生指導」をしたり、あるいは「ポスドク」を受け入れたりすることができる、というのは1大学。実は、これは東北大学です。討議司会を担当される宮本先生、それから西郡先生には、私が学位を出しています。どうも他にはない。「FD・SD研修」をやっているという回答はというのは3大学ありました。「その他」の回答も4大学あったんですけれども、そのうち三つは「人材育成」には該当しない。

まとめますと、ほとんどの大学に共通する機能というのが一つは見えてきました。「調査・入試結果分析」でございます。もう一つ、「入試広報・高大連携・学生募集」という活動はほとんどの大学で求められている。これは微妙に、というか相当違うんですが、一部の大学のみが担っている機能として「入試研究」「制度設計」がある。特定の選抜の「実施」がある。そして、ほとんどの大学に付与されていないのが「アドミッション人材の育成機能」ということになりました。

第3期中期目標・中期計画期間の位置付けと将来展望

これらを総合してどう見るかというのは、

話の最後に持っていくとして、それでは、「第3期中期目標・中期計画期間」にはどんな取り組みをやっていましたか、という話です。

第3期中期目標・中期計画期間の取組 (1)

- ・ 国立大学における中期目標・中期計画とは
 - ・ 法人化以来、文部科学大臣の下に
 - ・ **中期目標**：6年間に区切りとして「達成すべき業務運営に関する目標」を定め、公表
 - ・ **中期計画**：当該中期目標を達成するための計画、文部科学大臣から認可
 - ・ **年度計画**：年度ごとの事業計画、文部科学大臣に提出

第3期中期目標・中期計画期間の取組 (2)

- ・ 第1期：平成16年4月1日～平成22年3月31日
- ・ 第2期：平成22年4月1日～平成28年3月31日
- ・ **第3期**：平成28年4月1日～令和4年3月31日
- ・ **第4期**：令和4年4月1日～令和10年3月31日
 - ← 現在は第4期中期目標・中期計画期間の2年目
- ・ 以降の調査項目は回答を寄せた全75大学が対象

第3期中期目標・中期計画期間の取組 (3)

- ・ **財政支援 44/75 (59%)**
- ・ **分析対象は44大学**
- ・ **専任教員 31/44 (70%)**
- ・ **多面的評価 26/44 (59%)**
- ・ **調査・研究 25/44 (57%)**
- ・ **入試広報 24/44 (55%)**
- ・ **高大連携 23/44 (52%)**



第3期中期目標・中期計画期間の取組 (4)

- ・ 第3期入学者選抜に関する目標への貢献：有
- ・ **41/75 (55%)**
- ・ **全学的マネジメント 22/43 (52%)**
- ・ **部局支援 10/43 (23%)**
- ・ **実行組織 11/43 (26%)** (一部記述と合致しない)



国立大学の関係者には常識なんですが、ご存じない方に一応簡単に説明をさせていただ

きます。国立大学が法人化して以来、「中期目標」というのは、文部科学大臣の下に6年間で区切りとして達成すべき業務運営に関する目標を定めて公表する。それから「中期計画」、それを達成するための具体的な計画、これを提出して認可をいただく、ということになっています。そして、さらに、「年度計画」というのがあって、年度ごとに事業計画を出して文部科学大臣に提出する、という仕組みになっています。したがって、基本的に大学が大学として運営している事業は、この中期目標計画に従って実施しているという形になっています。これは、おそらく旧来の大学のイメージを持っておられる方々からすると、相当印象が違うのではないかなという気もいたします。

これを取り上げておりますのは、要は、「中期目標・中期計画」に入っているということ、大学の事業として視野に入っていることになります。そうじゃないとちょっと位置づけがはっきりしないかな、ということになります。「第1期」「第2期」とありまして、「第3期」というのが昨年の3月まで、今は「第4期」の2年目ということになります。ということで、これはアドミッションセンター組織の有無に関わらず国立大学であれば対象になる質問なので、回答を寄せていただいた75大学全てを対象とした調査になります。

この中で、やっぱり非常に大事な話です。何らかの形で「財政支援」がありましたか、という質問です。実はこれ、この時期、高大接続改革が進んでいたこともあって、文部科学省からも相当いろんな事業をいただいていた、ということがあったのです。それ以外に大学で独自に財政支援をしていたケースもあると思われます。6割が「あった」というのですね。そのうちの7割、31大学は「専任教員」に関する予算をいただいていた。あと多いのは、「多面的・総合的評価の開発」、そ

れから「調査・研究」「入試広報」「高大連携」と続きます。

この「目標に貢献しましたか？」という質問に対しては、「貢献していません」という大学はないんですけれども、「どういう立場ですか？」というのは、これはちょっと分かれました。半分が「全学的なマネジメント」をする立場で貢献しました、と。残りは半々なんですけれども、実施に際して「部局支援」しました、取り組みを実際に行うのは学部とか、そういった単位なんだけれども、その支援をした、という回答です。そうではなくて自分たちが「実行組織」でしたというのが26%、11大学ありました。これは実際に具体的に記述がなかったところで貢献だけ書いてきたところだとか、記述はあったんだけど具体的に書いていないところとかがあって、ちょっと数が合わないんですけれども、こういう結果です。

これを踏まえて、次は、今も含む「第4期」がどうなっていますか？ということですね。

「第4期」の中でアドミッションセンターの整備、入試改革等が「記述」されているというのが3分の1、特になんだけれども「計画や指針」がありますというのを合わせると6割弱ぐらいですか。「記述無」という大学が4割ちょっとあります。

その中で、どんな役割を期待されていますか、という質問です。これは5段階評定で「1」～「5」、 「5」が「最も期待されている」というところなんですけど、はっきり分かれま すね。この四つとそれ以外、これはほとんどのところが「5」ないしは「4」をつけたという話なんですけれども、「データ分析」「入試広報」「高大連携」、これは今まで担ってきた機能ですが、もう一つ「制度設計」というのが3番目に入っています。これらが期待されている機能ということになるのかなと思います。

第4期中期目標・中期計画期間への展望 (1)

- 第4期中期目標・中期計画期間等でのアドミッションセンター整備、入試改革の記述
記述有 24/72 (33%)
記述はないが計画や指針有 17/72 (24%)
記述無 31/72 (43%)

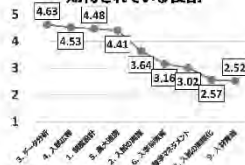
第4期目標等での記述



第4期中期目標・中期計画期間への展望 (2)

- 期待されている役割
- 5段階評価 (1~5)
- 期待が大きな機能
データ分析 4.63
入試広報 4.53
制度設計 4.48
高大連携 4.41

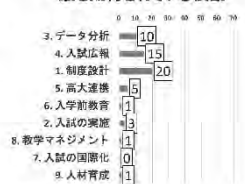
期待されている役割



第4期中期目標・中期計画期間への展望 (3)

- 最も期待される役割
制度設計 20/75 (27%)
入試広報 15/75 (20%)
データ分析 10/75 (13%)
- 制度設計が最多
← 5段階評価とは異なる
- 入試広報、データ分析も

最も期待されている役割



第4期中期目標・中期計画期間への展望 (4)

- 今後の展望
拡大 8/75 (11%)
機能拡大 10/75 (13%)
現状維持 33/75 (44%)
人員縮小 4/75 (5%)
その他 7/75 (9%)
無回答 13/75 (17%)
- 廃止、機能縮小は無

今後の展望



第4期中期目標・中期計画期間への展望 (5)

- 第3期中期目標・中期計画期間と今後の展望に関する小括
- 財政支援の最多は専任教員の配置
- 全学的マネジメントの貢献が半数、その他が半数
- 第4期に向けて記述有が6割弱
- 最も期待される機能は入学者選抜の制度設計、その他には入試広報、高大連携、データ分析
- 基本は現状維持、廃止や機能縮小はない

しつこいことに、その中で「最も期待されているものを一つだけ選んでください」という質問をしたら、ちょっと様相が変わります。3分の1弱、3割弱ですけれども、「制度設計」というのが、実は、一番多いのです。

「入試広報」、「データ分析」という、今までやってきたことも多い中に入ってはいます。

ということで、組織としての「今後の展望」について伺いました。そうすると、ある意味、安心なことに、「廃止予定」ですというところ、あるいは今の「機能縮小」されます、というところはなかったんですが、「現状維持」が4割強ですね。「拡大」していくという、景気がいいところは1割ぐらい。人員は変わらないけれども「機能は拡大」されるだろうという見込みを持っているのが13%、これはちょっと後で分析する話と絡んでくるかな、と思いますけれどもね。ただ、「無回答」が2割弱なんですね。これは多分答えにくい質問なんだろうと思うので、若干ここは額面どおり受け取っていいかなという心配をしているところでございます。

この部分に関しての総括です。財政支援の最多はやはり「専任教員」が欲しいというところが一番多かった。「第3期」の貢献は、「全学的な貢献」が半分、「その他」が半分ぐらいです。「第4期」に向けては入試に関する記述があるのは6割弱、その中で、実は、最も期待されている機能は「制度設計」ということが言えるんじゃないかなと思います。また、基本、「組織」の規模としては「現状維持」というところが主でございます。

「組織」に関する類型化（クラスター分析）

ということで、「機能」のところでは相当共通項が見えてきたんですけども、それ以外のところでやっぱりバラバラだ、という結果になってしまったので、何とかこれを類型化できないか、試みてみました。「組織」の変数、「機能」の変数でそれぞれ類型化をい

たしまして、その類型ごとに「第3期の総括」「将来展望の特徴」を抽出するというやり方です。太字になっている方が、これでもって似たものを集めてグループにしましたよ、ということです。こちらはそれには使っていない部分です。

アドミッションセンター類型化の試み (1)

- 多様な実情のアドミッションセンター → **類型化**？
 - 組織変数、機能変数**で類型化
 - 類型ごとに第3期総括、将来展望の特徴抽出
- 方法：クラスター分析
 - 約束：大学名の表示は幹事校のみ
→ 加盟校には後日**報告会**を行って通知
 - 欠点：特徴に合致しない大学、変数によって激変

アドミッションセンター類型化の試み (2)

- 組織のクラスター**
- 6類型
 - 第2類型：北大
 - 第3類型：九大
 - 第5類型：東北大、筑波大
 - 第6類型：岡山大、広島大
- 特徴は**75%基準**

アドミッションセンター類型化の試み (3)

類型	幹事校	大学数	特徴
第1類型 執行部主導型		11	AC非加盟、新設、 AC長が執行部 、小規模、人事権無
第2類型 小規模自律型	北海道	14	上位機関有、 小規模 、人事権無、 起案権有
第3類型 運営中心型	九州	7	一部運営組織 、起案権有
第4類型 後発型		9	新設 、専任有、中規模
第5類型 大規模自律型	東北・筑波	8	大規模、専任有、 人事権有
第6類型 大規模一体型	岡山・広島	11	大規模、専任有、 人事権無

アドミッションセンター類型化の試み (4)

類型	大学数	財政支援	第3期/第4期の特徴
第1類型 執行部主導型	11	6 (55%)	現状維持
第2類型 小規模自律型	14	9 (64%)	専任支援 、多面的評価支援、現状維持
第3類型 運営中心型	7	5 (71%)	高大連携支援、現状維持
第4類型 後発型	9	8 (89%)	専任支援、現状維持
第5類型 大規模自律型	8	7 (88%)	専任支援、広報支援、調査研究支援、 全学貢献 、第4期記述有、 拡大
第6類型 大規模一体型	11	8 (73%)	全学貢献、現状維持

方法は、私が心理学の出身ということもあって、心理学でよく使われている「クラスター分析」という手法を使ったのですが、これは大学名を入れてお知らせするのははばかれるところがあります。理由は二つです。クラスター分析というのは、何とか似たような特徴でまとめて、使った変数の特徴で命名をするんですね。でも、必ず例外が出てくるのです。その例外に該当する大学からは、「うち、ここに分類されているけれども、実際には違うよ」という話が必ず出てくる。それは申し訳ない。もう一つは、変数や分類手法を変えると、結構、分類結果が変わってしまうんですね。そういうデリケートな部分があるので、結果が独り歩きしても困るところがあります。ただ、今回、何とか意味づけができそうな結果が出たので、その結果だけはちょっと発表させていただく。ただ、何にもなかったら面白くないだろう、ということで、現在、今回の総会前までの幹事校のみ、大学名を使わせてもらうことになりました。なお、後ほど総会をいたします。幹事校も一部交代です。後日、報告会を行います。協力していただいた加盟校には、そこでは大学名を入れた結果をお知らせする、という予定です。残念ながら加盟していただけていない大学にはお知らせしません。申し訳ございません。

これは「デンドログラム」と言われる図なんですけど、こんな形です。「組織」は、おそらく、ここから見て六つぐらいに分類すると意味があって面白いかな、というところなんです。これは幹事校です。北大、九大、東北大、筑波大、岡山大、広島大とあるんですけども、まあ、そこそこばらけました。それぞれの類型でこんな特徴ですよ、という指標には一律75%という基準を設けまして、・・・つまり8大学分類されていたら、そのうちの六つに当てはまる特徴はこのクラスターの特徴だなという、そういう判断をしています。逆に

75%の大学までは該当しない場合は、この特徴はないんだな、という判断で分類をしています。

その結果がこんな感じです。「第1類型」は「執行部主導型」とつけました。該当する大学は11大学ありました。「執行部」が「アドミッションセンター長」になっているというところで、「連絡会議」には「非加盟」の大学が多く、「新設」というのは高大接続改革以降にできたところが多い。「小規模」です。この規模なんですが、「0」「1」「2～3」「4人以上」だったかな。元はそんな感じで分けていますが、「0」と「1」だと「小規模」になります。「人事権」はない。

「第2類型」の「小規模自律型」に北大が入っています。これがね、確認したんですよ。本当にこれでいいですか、と。実は、北大は「専任教員無」と答えてきています。我々とずっとお付き合いがある北大の先生方がいらして、彼らは北大の「アドミッションセンター」に所属していると思っていたのですが、学内的にはそうではないそうなんです。その辺がなかなか難しいです。ご回答いただいたのは入試課長さんだったのですが、連絡会議の運営委員の先生に確認したところ、「これで間違いない」ということでした。実は、北大も設立年度について「あれっ??」と思った大学でした。本当は老舗のはずなのに、何故こんな新しい年度がついているんだろう。これも、多分、改組があったんですよ。そのときにこんな感じの組織になった、ということだろうと思います。「小規模」で、「上位機関」があって、「人事権」がなくて、「起案権」がありというのは、「小規模自律型」です。

「第3類型」の「運営中心型」、これは九州大学がそうなんです。一部の大学が「教育・研究組織」ではなく、「運営組織」と答えている。「起案権」はあるという感じです。

「第4類型」は「後発型」、新設です。「専

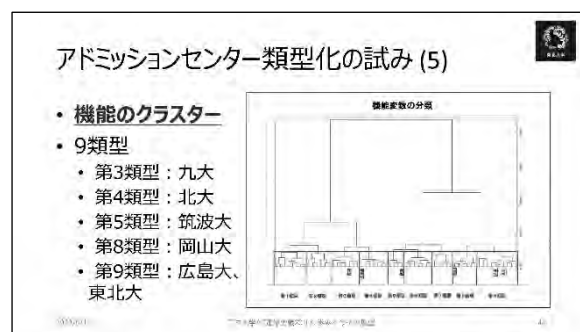
任教員」があるところが多くて、「小規模」と「大規模」が混在しているので「中規模」かな、と。

「第5類型」の「大規模自律型」と「第6類型」の「大規模一体型」というところに、筑波大、東北大、それから、岡山大、広島大が入りました。「大規模」で「専任教員」が「ある」ところは共通ですが、「人事権」の「ある」「なし」で分かれています。

これらが「第3期」「第4期」でどういう特徴が見られたかという、ざっと見ていただいたら、やっぱり「小規模自律型」というところは「専任教員」を支援するという手当てがあったというところが多いですね。「大規模自律型」はいろいろあるんですね。「専任教員」「入試広報」それから「調査研究」の支援。「全学」に貢献してきました。「第4期」にも記述があります。そして、「拡大」の傾向があります。明らかに二極化していくのかな、というイメージがここから見えます。

「機能」に関する類型化（クラスター分析）

次に、「機能」ですね。「機能」は、これはまた別な観点になります。先ほど申し上げたような機能で分けたところ、細かいんですけども、9類型ぐらいが適切かな、と。「第3類型」に九大、「第4類型」に北大、「第5類型」が筑波大、「第8類型」が岡山大で、今度は広島大と東北大が一緒になって「第9類型」となっています。それぞれの特徴を申し上げます。



アドミッションセンター類型化の試み (6)

類型	幹事校	大学数	特徴
第1類型	指示型	8	組織1・2、実施関与無、制度設計有、共通テス、等
第2類型	調査分析型（実施無）	6	組織1〜3、広報特化無、調査分析有、渉外無、等
第3類型	調査研究型（実施有）	九州	組織2〜4、研究有、実施関与有、内部調整有、等
第4類型	入試事務型	北海道	組織1・2、実施関与有、入試業務全般有、等
第5類型	総合型選抜中心型	筑波	組織4・5、総合型のみ実施関与有、調査分析有、等
第6類型	実施無型	7	組織2〜4、広報有、実施関与無、調査分析有、等
第7類型	広報特化型	5	組織3・4、広報以外全有、等
第8類型	調査研究型（実施無）	岡山	組織6、研究有、実施関与無、調査分析有、等
第9類型	実施中心型	東北・広島	組織5・6、広報有、実施関与有、内部調整有、等

アドミッションセンター類型化の試み (7)

	類型	大学数	財政支援	第3類/第4期の特徴
第1類型	指示型	8	4 (50%)	多面的評価支援、現状維持、等
第2類型	調査分析型（実施無）	6	4 (67%)	専任支援、多面的評価支援、広報支援、部局支援員貢献、現状維持、等
第3類型	調査研究型（実施有）	7	6 (86%)	専任支援、多面的評価支援、現状維持、等
第4類型	入試事務型	7	2 (29%)	専任支援無、専門職員支援、現状維持、等
第5類型	総合型選抜中心型	4	4 (100%)	専任支援、専門職員支援、広報支援、調査研究支援、全学貢献、第4期以降有、拡大、等
第6類型	実施無型	7	7 (100%)	専任支援有、機能のみ拡大
第7類型	広報特化型	5	4 (80%)	専任支援有、高大連携支援、現状維持、等
第8類型	調査研究型（実施無）	6	5 (83%)	多面的評価支援、全学貢献、現状維持、等
第9類型	実施中心型	10	7 (70%)	多面的評価支援、全学貢献、第4期以降有、等

「第1類型」は「指示型」です。「組織」では、・・・これはすみません、後でもしよかったですら資料、前ページまでの「組織」の類型のどこに位置づくかというのは、これは、結構、関係があるみたいなんですけれども、・・・「指示型」というのは「実施」がなくて「制度設計」をやっている。「共通テスト」には関係していない、等々の特徴があります。おそらく、執行部の先生方でアドミッションセンターを構成して全学に指示をしているのかな、というようなイメージです。

「第2類型」「調査分析型（実施無）」¹は、ふつうは「入試広報」で特徴が出るところが、このクラスターではない。「調査分析」はあります、というようなところです。

「第3類型」「調査研究型（実施有）」²には九州大学が入っていますね。「研究」というところにミッションがある、機能があると。「実施」には関与しています、ということで

す。

北大はここに入りました。「第4類型」「入試事務型」です。これは実質的には入試課そのものじゃないかな、というところです。

「実施」に関与していて、入試業務の全ての機能がある。

筑波大学、これは4大学のクラスターなんですけれども、「第5類型」「総合選抜中心型」です。これは、たぶん、旧来のオーソドックスなアドミッションセンターなんだと思います。「総合型選抜」のみの「実施」に関与して、「調査分析等」をやっている。

「第6類型」は「実施無型」³、「実施」がありません、というところです。

「第7類型」は「広報特化型」⁴、「広報」以外、全てない。「何やってるセンターだ？」と問われると、「入試広報だ」というところでしょうか。

「第8類型」は「調査研究型（実施無）」⁵ですね。「第2類型」とちょっとイメージがかぶるんですけども、「研究」という機能がついている。そして、「実施」の関与は「ない」というところです。ここには、実は、佐賀大学が入ってしまって・・・「実施」はすごくやっているそうです。こういうことが起こってしまうんです。だから、本当に申し訳ない。分類、これが独り歩きすると困るな、というところがあります。

「第9類型」の「実施中心型」、これはいろんな入試の「実施」に関与しています。それが私どものところと広島大学もそこに入っています。そういう特徴がございます。例えば、東北大は「学校推薦型」って区分自体を設けていないのですが、「実施関与」の中で「学校推薦型」「有」のほうに入っています。少数派なんです。そういうことがどうしても

¹ 後日、「調査分析型（制度設計無）」に変更。

² 後日、「調査研究型（実施重視）」に変更。

³ 後日、「分析特化型（実施無）」に変更。

⁴ 後日、「基本機能型」に変更。

⁵ 後日、「調査分析型（分析重視）」に変更。

起こってしまうということをお許してください。

これが「第3期」「第4期」にどうなるかという、やっぱり「専任教員」の支援があるかないか。「第4類型」の「入試事務型」のところはないですね。ここが特に勢いがいいですね。「専門職員」の支援があり、「第3期」で「全学」に貢献してきたし、「第4期」にも記述がある、そして拡大傾向というのが「第5類型」の「総合型選抜中心型」ですね。「第6類型」の「実施無型」というところは、「機能」は「拡大」です。そうだろうな、という気はします。「第7類型」の「広報特化型」、ますます広報特化でいくのかなという感じですね。「第9類型」の「実施中心型」、私どものところでは、「第4期」の記述があるといったような特徴が見られました。

繰り返しになるんですけども、これは類型化の方法の一つなので、変数や分類基準を変えてやってみると違ったものが見えてくるかもしれません。ただ、多様な国立大学のアドミッションセンターですが、何となく、グルーピングはできないわけではないのかな、ということです。

最後のまとめです。組織形態はとにかく多種多様です。「機能」は、「調査分析」、「入試広報・高大連携」というところが特徴です。ですので、もはや「総合型選抜の実施組織」ではないです。もちろんそれに当てはまる場所もあります。「研究」は一部のアドミッションセンター、「専任教員」へのニーズはあるんだけど、「育成機能」はほぼ皆無という課題がある。全体として「1,2名」の規模が多いです。

国立大学におけるアドミッションセンターの将来像

ということで、国立大学のアドミッションセンターの将来像をここから考えるということになりますが、求められているのは現状の役割に加えて「制度設計」ですね。わが国の

総括 (1)

- 国立大学ACの組織形態は多種多様
- 国立大学ACの機能は調査分析、入試広報・高大連携
- もはや、総合型選抜の実施組織とは言えない
- 入試研究の機能は一部のアドミッションセンターのみ
- 専任教員へのニーズはあるが、育成機能はほぼ皆無
- 全体として、1~2名規模が大半、3名以上は大規模？
← 国立大学アドミッションセンターの将来像は？

総括 (2)

- 求められる機能は現状の役割に加えて制度設計
• 背景：わが国の大学入学選抜は個別大学が主体
深刻な少子化の進行、入試制度の複雑化
→ 適切な大学入試設計は大学の生き残りの鍵
調査分析、高大連携は今後も求められる機能
• 疑問：調査分析の土台には入試研究が必要なのは？
- 各大学のアドミッションセンターに対するイメージは多様
• 調査結果は縮小傾向ではないが本当か？

総括 (3)

- 20周年記念事業実行委員会の追加ミッション
- 同委員会を母体の将来構想ワーキンググループの設置
← 本連絡会議の存廃を含めた議論
- 以下、個人的見解
• アドミッションセンターのイメージは大きく変化
• 大学にとって、アドミッションセンターが必要な組織であるには？
• 今後は複雑な状況での証拠に基づき意思決定が求められる
• AC専任教員の育成機能とキャリアパスを構築していくべきでは？

大学入学選抜は個別大学が主体なんです。今日、文部科学省の大学入試室から代表して平野様にお越しいただいてお話しいただきましたけれども、文科省が「こうやれ」と言ったから大学が「こうする」というものじゃない、ということは、事前の打合せのところでも改めて確認させていただいたところがございます。だから、大学自身で考えなきゃいけないんですよ。

現在、深刻な少子化が進行していて、入試制度は複雑化しています。それぞれの大学にとって適切に大学の入試設計をするということは、おそらく生き残りの鍵になるでしょう。「調査分析」「高大連携」というのは今後求められる機能なんです、この「調査分析」

の土台に、自律した「研究」ってなくていいんでしょうか、ということですね。各大学のアドミッションセンターに対するイメージは多様なんですが、調査結果は全体としては「縮小傾向」ではない、となりました。が、どうなのでしょう。つかみきれていないのが、いわゆる「組織改革」のところなんです。もともとあったセンターが、今、どうなっているのか。それはおそらく、それぞれ大学が組織に求めたもの、期待に応えられてきたかどうかということの答が、そこに出ているところがあるのかもしれないし、これから出てくるところもあるのかもしれない。ということで、20周年記念事業実行委員会で追加のミッションを行うことになりました。我々の委員会を母体にして「将来構想ワーキンググループ」を設置するということです。これを総会に諮ります。この連絡会議自体の存廃を含めた議論になってくると思います。

以下は、倉元の個人的な見解でございます。アドミッションセンターのイメージは、おそらく、当初のところから見ると大きく変化していると思います。各大学のアドミッションセンターが大学にとって必要な組織であるか、ということが、多分、大事になってくる。なぜかという、大学の事業計画の中に組み入れて、資金を提供して、ということは、大学が単位となつて行われることだからです。

今、大学入試を取り巻く複雑な状況があります。証拠に基づく意思決定が求められている。ということは、「何となく、こういうことになっているから、こうしましょう」では済まないんですね。各大学に専門家が必要になってくると思います。ということで、アドミッション専任教員というのは、おそらく、この「意思決定」に関わったり、いろんなことに関する「起案・提案」ができる人材、ということになるのだと思うのです。その育成機能、それから、キャリアパス、これは、今、まだ非常に基盤のない心許ない状況です。こ

れを構築していくことが、これからの課題になると思う、というところでまとめさせていただきます。

以上でございます。ご清聴ありがとうございます。

(拍手)

竹内正興教授（司会）：

倉元先生、ありがとうございました。ただいまの倉元先生のご講演についてのご質問等につきましては、先ほどご案内させていただきましたとおり、ウェブ上での入力をお願いいたします。

第Ⅱ部 現状報告

現状報告者紹介

現状報告者 1

福島 真司（ふくしま しんじ）氏

1967 年香川県生まれ

〔教員歴〕

山陽女子短期大学日本語日本文学科助教授（専任講師含め 9 年間）
宮崎国際大学比較文化学部比較文化学科助教授（2 年間）
鳥取大学入学センター准教授（4 年 3 カ月間）
山形大学エンrollment・マネジメント部教授（9 年 9 カ月間）
大正大学地域創生学部地域創生学科教授／エンrollment・マネジメント研究所所長
（7 年間、現在に至る）

〔主な研究歴〕

専門は教育社会学（大学マネジメント，マーケティング等の研究）

〔主な著書，研究業績〕

（著書）

『大学生の規範意識と社会性の発達—山形大学学生不祥事防止検討プロジェクトの取り組みから』，山形大学出版会，2014

（論文）

「定員管理の厳格化の入試倍率・偏差値・志願者動向への影響——東京に所在する私立大学におけるトリクルダウン現象の現在地——」，大学入試研究ジャーナル 32 号，2022

「入試改革の高等学校への影響——高等学校進路指導担当教員対象の 4 年間のヒアリング調査を通して——」，大学入試研究ジャーナル 31 号，2021

「追跡調査での外部テストの活用——『学力の 3 要素と学修成果の可視化』の可能性——」，大学入試研究ジャーナル 30 号，2020

「東日本大震災後の被災地高校進路指導部の声」，大学入試研究ジャーナル 27 号，2017

「『総合的学生情報データ分析システム』の構築——山形大学におけるエンrollment・マネジメントとインスティテューショナル・リサーチ——」，情報管理 2015 vol.58 no.1，2015

（その他）

「大学マーケティング新潮流」，日経産業新聞 20 回連載，2013-2014

〔学会活動等〕

一般社団法人大学 IR コンソーシアム・代表理事
EMIR 勉強会・主宰

〔その他の特記事項〕

大学設置・学校法人審議会 学校法人分科会 学生確保審査特別部会・専門委員（2013-現在に至る）

ノートルダム清心女子大学外部評価委員会・委員長（2020-現在に至る）

学校法人富澤学園・評議員（2022-現在に至る）

山形県 公立高等学校入学者選抜方法改善検討委員会・委員（2015-2016）

山形県 県立高校の将来の在り方検討委員会・委員長（2013-2014）

現状報告者 2

齋藤 郁子（さいとう いくこ）氏

1963 年北海道生まれ

〔教員歴〕

千葉県立銚子高等学校	教諭（4 年間）
青森県立五所川原高等学校	教諭（6 年間）
青森県立弘前南高等学校	教諭（10 年間）
青森県立黒石高等学校	教諭（4 年間）
青森県立青森高等学校	教諭（5 年間）
青森県立弘前中央高等学校	教頭（2 年間）
青森県立三沢高等学校	校長（3 年間）
青森県立弘前中央高等学校	校長（現職）（2 年目）

〔主な教育活動〕

青森県高等学校教育研究会	会長
青森県高等学校文化連盟	日本音楽部門部長 放送部門 副部長（教諭時代は長く放送部顧問を務める）

教諭時代 理科（化学）担当
学年主任，進路指導主事を経て管理職に

〔その他の特記事項〕

青森県 未来を紡ぐ教員勉強会 主催

現状報告 1：私立大学における入試研究の課題 ——国公私を横断する入試研究への期待——

大正大学地域創生学部
福島 真司 教授

【講師紹介】

竹内正興教授（司会）：

それでは、お時間になりましたので、これより第2部、現状報告に入らせていただきます。現状報告の1番目としまして、「私立大学における入試研究の課題——国公私を横断する入試研究への期待——」ということで、大正大学教授の福島真司先生、ご講演よろしくをお願いいたします。

福島真司教授：

大正大の福島でございます。せっかちなもので、司会の竹内先生から呼ばれる前に既に登壇しておりました。

本日は、今ご紹介にあずかりましたタイトルでお話をさせていただこうと思います。20分ぐらいですので、あっという間です。

私は、福島といいますが、今の所属大学は大正大学です。東京の巣鴨は、「おじいちゃん、おばあちゃんの前宿」、あっ、間違えました。「おばあちゃんの前宿」と言われています。そこにおじいちゃんが連れられてやってくるという構図の巣鴨地蔵通り商店街がございしますが、そのお膝元でございます。

前職の山形大学の時代は、アドミッションセンターという名前ではございませんでしたが、高校の先生方と大変接点を多く持つ仕事をやっておりました。また、高校生にも講演をしていました。国立大ですので、いろいろと呼んでいただき、もう何千人という、何千人じゃきかないのですが、多くの高校生の方とも、9年間の在職中にお付き合いさせていただきました。



高校生の方に山形大学の説明をし、「何を学ぶのか」などを話し終わったときには、「今日うまく話せたかな」というときには、高校生が集まってきてくれて、「先生、今日の話はよかったです。私はもう志望校決めました」と。「おお、そうか。どこに決めたの」と聞くと、「福島大学を受験します」と言うんですね。何せ山形大の福島ですので、「あ、そっちな」という話なんですけど、先ほど倉元先生からも「福島大学の」というご紹介をいただきましたが、そういうこともしょっちゅうでした。ただ、東北以外ではそんなに間違われることはなかったもので、山形と福島がややこしいんだろうと思います。

東北での私の経験は、先ほど申し上げましたが、所属が国立大でしたから、高校の先生方から非常にこう、何というのか、非常にいい扱いを受けました。国立大へのリスペクトがすごくある雰囲気の中で、大変良いお付き合いをさせていただきましたが、その前には、実は、鳥取大に在職していました。鳥取大でも、その前は私立単科大、その前は私立短大にいましたので、そのときと比べれば、高

校訪問とか、高校の先生方とのお付き合いでは非常に良い対応を頂いたのですが、鳥取大は関西マーケットですから、国立大も相当数あり、たくさんの私立大とも競合しています。ですので、それほど尊敬されていなかったと思うんですが、東北では本当に良い対応を受けました。同じ国立でもやはりエリアによっても見られ方というのは異なるわけです。

私の最初のキャリアである短大時代の話をしたいのですが、私はこの最初の短大時代の9年間で、大学人としての全てを学んだと思っています。短大バブルのときは、300人の入学定員に対し約2,000人受験生がいました。当時は夜中まで赤鉛筆で入試の採点をしていたわけですが、今考えたらとんでもないことですけれど、「どうせ落ちるのに、こんなに大勢受けに来なきゃいいのに、もう手が痛い」なんて冗談を言いながら採点していました。そういう時代から、あっという間に1,500人まで受験生が減り、翌年度は750人、300人を切ったら定員割れですが、あっという間に定員割れになり、それが続いて学科廃止となり、同僚の多くがクビになって辞めていったりとか、ボーナスも支払われないとか、そういう経験を30歳前後にしました。

そのときに考えたことは、「自分の大学は一体何なのためにあるのか」とか、「自分の仕事って一体何なのか」ということです。巷間のネットなんかでは、「偏差値が低い大学は潰ればいいのか」とか、「大学は多すぎる」とか、こんなことが言われていますが、同じ教育人の皆様方の中にはそう思われている方はいないと信じていますが。

学校法人の数は多いかもしれません。経営の安定性からすると、学校法人はもう少し統合されながら規模の経営をめざさないと、少子化を迎えた日本では危険だと思いますが、大学はまだまだ増えても良いと思っています。60%程度しか大学進学率がないわけですから、もし仮に大学を経験した全ての人た

ちが、あの4年間、短大の場合2年間、あるいは6年制は6年間ですが、「あの時代があったから今の自分があるんだ」と、「あの時代に鍛えてもらったから今の自分があるんだ」ということを言ってもらえるような大学であれば、日本に生まれた人は全員大学へ行って鍛えられ、一層社会で活躍すれば良いと思うのです。大学がそれを実現できていない場合、そこが最も大きな問題だと思いますが、私は、大学は決して多いとは思いません。

短大時代に学んだことは、どんなに教員が研究の力や授業の力を持っていたとしても、どんなに職員の方が企画力や学生の対応の力を持っていたとしても、私たちは目の前に学生がいなくて仕事にならないんです。よく、「たくさんの学生が毎日相談に来て、もう大変だ」などと不満が聞かれたりしますが、実は、それは幸せなんです。学生が減ってしまい、自分の目の前に、100人定員に対し15人しか1年生がいなくなるとなったときにどう思われるでしょうか。「学生が多くて大変だ」とか、そんなことを言っている場合じゃないですよ。この15人を1人も退学させずに、彼女らに自己実現してもらって、「先生、あの短大の2年間があったから今の私があるんです」と言わせないと、もう自分の職場や仕事はなくなるわけです。つまり、自分は食っていけません。もう自分のプライドも何もなく必死でやるだけと、そういうことを理解するための経験でした。

短大のバブルのときは、高校訪問に行くとお茶とケーキが出ました。「先生、おたくを受ける生徒が5人ぐらい集まっているんで、一言励ましてやってください」と言われても、こちらはバブル期の最中ですから、「いやいや、今日は忙しいんで、次の学校に行きますからさようなら」という態度を取っていました。高校訪問の際は「必ずアポ取りしろ」とか、「お忙しい高校の先生にご迷惑かけるな」などと言われたりしますが、定員割れが酷くな

った短大の場合、アポの電話をして「今年度も募集要項ができましたので、ご挨拶に」と言っても、「あっ、結構です。送っておいてください」と、誰も会ってくれません。アポなんか取っている場合じゃないですよ。とにかく高校の先生方のお忙しい間隙を縫って訪問して、先生方にとって面白いことを話さないといけな。面白いというのは教育に関してです。人育てについて、難しい学生をどうやって育てるかとか、現在の短大教育で苦労している点はどうだが高校の先生はどうかとか、やっぱりそういう真剣なやりとりをやってですね。最後は、「先生のところから来た生徒さんは今こうなっています」とか、「本学では学生がこう成長しています」とか、そういうことをやりとりに繋げていく。

高校生との出会いもそうですよね。高校生の方と会ったら、必ず、私立の場合は名簿を作りますので、それに対し、いろいろなお手紙を書いたりして、「進路決まりましたか?」、「サッカー頑張っていますか?」なんてことをやりとりしながら、高校の先生に対しても「こういう生徒さんが資料請求してくださって、相談会に来てくれました」などと示しながら、最後は、「おたくはいいや」と言われることも多いのですが、それを続けているうちに、「こういうケースなんだけれども、おたくでは引き受けてもらえるか」などと電話がかかってきたりすると、「今から飛んでいきます」、そして、「何とかしますので、ぜひ私に任せてほしい」、「私が2年間で卒業させて、必ず就職させます」とお伝えし、最後に、「じゃあ、先生に預けるわ」と言ってもらえる。難しいケースもあります。そういった経緯でお預かりした学生が退学になることもあります。すぐに高校の先生に電話をして、「これこれこういうケースであり、今からお伺いして説明します」と言う。高校の先生も高校時代からよくよく難しい事情をお分かりの場合は、「それは仕方なかったよね」と

言っていた場合もあれば、怒られることもあります。「あんたに任せたじゃないか」、「あんた、大丈夫だって言ったじゃないか。それなのにうちの卒業生を退学させたのか」というお怒りです。

高校の先生方とはそういうお付き合いをしながらこれまでやってきましたが、分かったことというのは、先ほど申し上げた、私たち教職員は学生がいなくなると仕事にならないということと、今、国立も高大接続や連携を進めています。これを国も良い教育的な接続をすべきと後押ししていますが、なぜ今でこういうことができるようになったかという、人口が減ったからです。1万人受験生がやって来て、その1万人に対して高大接続事業を提供するというのは大変難しいことです。今、これを国全体で取り組もうとしています、よほどの設計をしないとマッチングは難しいと思います。やはり少子化が長く続き、日本の国力がダウンしてきて、今後の日本はどのようなかとなったときに、初めて、難しさを乗り越えて、一気通貫で人を育てようと、地域の場合は、もう家庭から、小中高大、地域企業を突き抜いて人を育てていかないと、ふわっとやっている若人たちは外に出ていってしまい、地域には帰って来なくなると。

それから、大学がなくなる、これです。高校の統廃合の話は、高校の先生方はよくご存じと思いますが、15の春ですよ。高校がなくなると、その地域で高校に進みたい子は、みんな15歳で下宿を始めないといけなくなる。その地域から、若い人がどんどんいなくなるということです。これを防ぐためにも、どう地域で人を育てていくのかということも含めてだと思いますが、高大接続とか高大連携、学生募集、それから高校の先生方と学生募集を契機にお付き合いをすること、これらは全て教育の一環なんだということを、私は勉強させていただきました。

そういうふうに思いながら、職場を国立に

移しましたので、鳥取大学ときは、例えば高校の先生から電話がかかってきて「そろそろ募集要項はできましたか。200 ぐらい欲しいんですが」と言われると、「ダンボール 4 箱ですね。分かりました」と、私は、車を運転してすぐに高校に募集要項を持っていきますので、そうすると高校の先生は驚いて「えっ、国立の先生が募集要項を持ってきてくれるんですか」と言われますが、「ええ、呼んでいただければ、普通飛んで行きますよ」とお答えしました。厳しい私立はどれもそうですから。そんな感じでやっていると、大学に帰ったら入試課長に怒られて、「先生、困りますよ、うちは私立とは違うんですから。それでは公平性が保てないでしょう」、「先生、じゃあ、全部の高校に呼ばれたら全部に持っていくんですか」なんて言われてですね。でも、鳥取ですから、「全部で三十数校ですから、呼ばれたら公平に全部持っていきますよ」と言うと、「国立はそんなことする必要はないんですよ」とまた言われたり。当時のことですけれども。

そのような感じで、国立ではいろんなことを鳥取で最初にやりました。私立で学んだことを国立でやって、喜ばれたり、怒られたり、いろいろでしたが、今でも、山形の時もそういう気持ちで、高校の先生に呼ばれたら飛んで行って、とにかく先生の生徒さんをうちで預かりたいんだという気持ちで、ただこれまでの小さい私立とは違って学部・学科も大きいですから「全員私が面倒見ます」とはいきませんが、でも「何かあったら必ず私に電話してほしい」と私の名刺にはプライベートの携帯番号が入っていますので、先生のところにうちの学生である御校の卒業生が行って、「何か問題があったら、必ず私に電話してほしい。必ず私が何とか対応する」とやってきました。

今、東京の私立大学にいますが、国立・私立はやはり違います。加えて、東京は

私立高校も多いですし、私立大学も多いですから、地方とはさらに違います。東京の私立大学の立場で首都圏の高校訪問をして分かったことは、首都圏の高校の先生は、各大学の細かなことは知らないんです。「今年度は、入試において、この方式をこう変えました。去年まではこうでした」と説明しても、「ああ、そうですか」と。「この辺りの変更では大変ご迷惑をおかけして」などと言っても、「あっ、そんなことあったんですか」という感じです。東北では、鳥取でもそうでしたけれども、それは国立だったからかもしれませんが、入試のものすごい細かな機微も聞かれました。「うちの生徒は、こういう質問を面接で受けましたが、あれはどういう意図だったんですか」とかいろいろと聞かれ、高校の先生は「これは本当に手ごわい」というか、もうよくご存じで本当に熱心だと思いましたこの理由は、相手にする大学の数が違うんですね。関東の先生方は、200 とか 300 の進路先の情報を知っておかないといけないんです。なので、各大学のいちいちの細かな入試の変化は知らないんですが、一方で網羅的にたくさん大学のことを良くご存じです。人によってところはありますが、地方であれ、都市部であれ、スタイルは異なっても、本当に熱心に情報収集なさっているということは、当然感じます。

ただ、高校訪問の対応の良し悪しというのは、何と申しますか、これは同じですね。お互いの立場によって、対応は異なります。つまり、こちらが、先生方にとって入学させたい大学の場合は「先生、先生」と熱心に受け入れていただけますが、一方で、こちらが特に興味がない大学の場合は「ちょっと時間がないので今日はこの辺りでよろしいでしょうか」という感じです。訪問する側が、私という同じ人間であっても、私の所属大学が異なれば、対応は異なります。また、同じ短大でも、短大バブルのときはケーキが出ましたが、

一方で、同じ短大でも倒産の危機のときは電話しても会ってもくれないという対応です。加えて、エリアとか偏差値でも異なります。私は高校生向けのキャリア教育もずっと行ってきましたが、同じような話をしても、私にどの大学の冠がついているのかで、高校側の反応は違うわけです。

学生募集はそういうマーケットだから仕方ないということではあるのですが、高校の先生方のニーズと、私たちの大学側のニーズは一致しません。私たちが欲しい生徒は、私たちよりもっと上位の大学に行きたいと思っており、私たちが「うーん、どうかな」と、何とか受け入れたり、落としたりする生徒の場合、生徒側からはこちらに何とか受け入れてほしいわけですので、そもそもの大学にとっても、どの高校に対しても、成功するような高校訪問の知見というのは存在しないのです。どのエリア、どのポジション、どのようなリソースを持った大学なのかということと、どのエリアの、どのようなポジションの、どのような高校のニーズなのか、これらが複雑に重なり合って、成否が分かれるものですし、加えて、誰が高校訪問するのかということと、誰が高校訪問にご対応くださるのかということでも違ってきます。例えば、「いや、この春に本校に来たばかりでまだ何も知りません」という先生だと、どのようなことを話題として準備しても、やはり会話は難しくなります。

ただ、これは高校訪問に限ったことではなくて、入試制度にしても同じですよ。入試制度が非常に面白くてユニークなものを取り入れたとして、それを受けさせることを目的に、生徒を入試に送るということはないわけです。だから、いろいろなことは常にこういうお互いの相対の関係で異なってきますので、一つどうしても申し上げたいのは、入試研究というのは、かなり難しいジャンルなのだと思います。このような状態を米国の学生

募集の専門家は、「最も尊敬する顧客に、最も軽蔑されるビジネス」だと言いますが、欲しい学生からはそっぽを向かれて、「どうかな」という学生からは入れてくれと言われるという、そういうマーケットです。私は経験上、もうどんな学生でも引き受けますという気持ちではございますが。

学生募集の研究には、高校訪問以外にもいろいろなものがあるんですが、マーケティングにフレームワークはあっても、長期に持続する成功パターンというのはないというのが実感です。というのは、戦術はすぐコモディティ化しますので、いい方法があったらすぐに他大学に真似られます。最後はみんな同じ戦術をとるようになりますので、全体に受験生に対するサービスの段階が上がったということで、それはそれでいいことなんですけど、それでは、差別化は図れません。

入研協などの入試研究の場でも、多様な現場を知らない方というのは、高校訪問にはこういう成功パターンがありますとか、高大接続はこのやり方がベストです、のような話をしますが、これはある同質の大学群が、ある同質の高校群に対して普遍的に実施する施策であれば、一般化は可能かも知れません。ですが、国立であっても同質という判断は結構難しいです。なかなか同じタイプの大学のグルーピングには、簡単ではないところがあります。

大学同士が競合関係にある場合、私立はそうかもしれませんが、ある大学がいい方法を考えて高大接続をやって評判になったということを、事例研究として開示して、それを他大学に真似されると困るということがあるかも知れません。だから、自学の好事例を研究結果として公表する意味はあるのかという議論もあるでしょう。ですが、そうすることで、私立大学の高大接続全体の質を上げることに寄与するのであれば、これは業界全体の信頼性のアップに繋がるわけですから、必要なの

ではないかと私は思っています。同質の大学というのはあまり考えられませんので、やはりケースがたくさん共有されて、こんなケースもあって、実はこういうことも起こっているのかなど、こういうことをお互いに勉強することができます。

そのうちどの大学も、18歳人口が減少することで選抜性は下がってくるに決まっています。今後は私立と公立、あるいは私立と国立の合併も行われるでしょう。現在、大都市圏の大学に対し、定員の厳格化や、東京23区の大学は、ある専攻しか学生数を増やせないなどの制限がかかっていますが、では、その期間が明ければ無尽蔵にまた学生を増加させられるのかかということ、そうではないでしょう。恐らく地方大とか地方の教育に対してしっかりと向き合って、そこに協力してやってくれるような大学に対しては、定員増加が許されるのではないかと思います。現在進みつつある大学M&Aの議論にも重なりますが、そのときに、そんな私立短大の経験が、国立大学の何の役に立つのかと思われるかも知れませんが、私がそうであったように、十分に役に立つと思います。いろいろな面について、志願者が減少すれば、次に何が起きますよ、学力層が変われば、次に何が来ますよ、次にこういうことを注意したほうがいいですよなどなど、こういう知見を、今から、今問題がない大学であっても、交換することは必要であると思います。

この図は、全国大学入学者選抜研究連絡協議会、入試では一番大きな集まりかもしれませんが、そこで発表された研究テーマのカテゴリのトレンドですが、このような感じになっています。例えば、「AO入試」とか「推薦入試」というカテゴリは、近年なくなっています。これは名前がなくなったから当然ですが、これに関する研究は、「入試制度」「入試方式」とか、そちらのカテゴリに吸収されていっています。

それから、「センター試験」というカテゴリについては、センター試験のデータは大学入試センターの研究者しか扱えませんので、なかなか「センター試験」の研究はやりにくいのです。ですので、このカテゴリの研究発表数は少ないのですが、共通テストに切り替わるときは、各大学の選抜において、共通テストをどのように扱うのかという研究が少し増えたり、制度変更に合わせて研究のトレンドが変化します。ただし、大体は、高大接続を含めた広い意味での学生募集か、入試制度とか入試の在り方や実施に関するものに大別されます。この両者は、大体6対4ぐらいの割合で推移しています。

2021年度辺りは、この比率が異なるのですが、コロナ禍の影響があった年度なので、オンラインでオープンキャンパスをやりましたとか、コロナ禍に対応した学生募集方策に関する研究発表がぐっと増えたことが理由です。

次に、発表する入試研究者の属性を見ると、ここで発表している研究者は、ほとんど国立、あるいは入試センターの方です。私立大学の研究者は、本調査期間中10%ぐらいしかいないんですね。

次に、第1著者の属性を見ると、全論文中、第1著者が国立以外というのは3割ぐらいです。ただし、これには入試センターの方も結構含まれますので、第1著者が私立のケースは10%ぐらいしかありません。しかも、私立大学の入試をテーマにした論文は、もう10%切って、こんな小さな割合にしかありません。これでいいんでしょうか、ということです。

この図は、設置区分ごとの大学の偏差値と校数の関係を、文系だけを取り上げて表したものです。この「大学全体の偏差値」というのは怪しい数値で、「どう計算したんだ」と突っ込みどころはありますが、各募集単位を合算して平均したところ、このように、国立

であっても、実は既にボーダーフリーの大学は存在しています。また、私立は、偏差値が下がるほど校数が増えています。私立の方が校数が多いので、日本全体の傾向には、当然ながら私立大学の傾向が色濃く反映されることとなっています。

一方、生徒さんの偏差値というのは、当たり前ですけれども正規分布になります。大学の偏差値帯ごとの校数の関係のグラフと重ねると、本当は単純に重ねてはいけなくて、校数に学生数を掛けて、大学の偏差値帯ごとの募集人員と高校生の偏差値分布との重ね合わせをすればよかったんですが、無理に重ねて見た結果、お分かりになるとおり、偏差値ごとの高校生の人数と、大学の偏差値帯ごとの募集人員には、ボリュームゾーンの辺りに大きなギャップが見られます。なお、ボリュームゾーンがどこにあるかというのは、これを見れば、どなたにも分かりますよね。

この図の国立と私立の差は、私立の定員の大きさを表しており、約300万人弱の学生のうち、60万人が国立、15万人が公立、あとは全部私立です。だから、偏差値50前後とか、その下辺とか、ボリュームゾーンの生徒たちの動向というのは、私立大学の研究が少ないことから、実は研究があんまり進んでいないということがわかります。これでいいんでしょうか、ということです。このボリュームゾーンの生徒たちの動向は、私立にとって重要であるのみならず、国立にとっても、これは今後訪れる将来を考える上でも、この辺りの層の研究をやっておかないといけないはずです。

現在、大学入試センターの研究プロジェクトの一環として、「入学定員管理の厳格化の影響の多角的検討」という研究プロジェクトを3年間、今年度3年目なんですが、採択をいただいて行っています。お時間の関係で本日はこの内容にまでは触れられないんですが、本日会場にお越しの代ゼミさんなど複数の専

門企業の方、高校の先生方、大学、センターの先生方と、この時期に行われた政策で何が起こったのかという研究を行っています。詳しく説明するお時間はありませんが、大量データを定量的に分析すると、高校のランク、高校のランクにはいろいろな出し方があるんですが、ある企業さんがつくったランクを追っていくと、定員厳格化以降、都市部の高校の偏差値ランクは上がっているが、一方で、地方の高校は下がっているという結果も見られました。

この分析には機械学習を用いていますので、どのようなデータを使って、何をバイアスとして考えて除去するのかなどで、結果は変わってくる可能性がありますから、あくまで分析の結果の一つとして出てきたものではありませんが、仮に、この結果が支持される場合、地方創生をめざした定員厳格化政策が、実は予想しなかった影響を地方に生んでいるのではないかということにつながります。こういう私立大学のボリュームゾーンを扱った研究はあまりありませんので、ぜひ高校の先生がご覧になっていらっしゃるなら、今、全国高校等を対象としたアンケート調査をお願いしていますので、ぜひお答えいただきたいと存じます。

最後に、私たちが大学入試研究でめざすものというスライドをご覧頂くと、ここには、国立大学ACへの期待もありますし、大学入試センターへの期待などありますが、私たちが行う入試研究は、高等教育機関の入学者選抜や、それを含む高等教育機関の教育の質の向上や信頼性の向上のために行っています。そのためのお互いの知見の共有と、切磋琢磨は当然必要です。それを国立という大学の中の一部だけでとどめていいんでしょうか。

国立大学のアドミッションセンターは、今、増えている状況にありますが、将来的にどうなるのかと考えると、先の倉元先生のご講演では危機感をお伝えいただきました。私たち

は、国立、私立と設置形態は異なってもライバルではなくて、実は同じ業界の信頼性とか、質を向上させるために協働する仲間です。そういう意味では、私が短大で経験したこととか、私立で経験したことなど、私立大学の知と国立大学の知を合わせると、地域によっては、これはさらに有用な知になり得るわけです。こういった知の重ね合わせが今後必要ではないか、これを実現することの社会的責務は大きいのではないかと考えています。

最後に、短大時代の経験でこういうことがありました。所属していた短大が大変厳しい状況を迎えたときに、理事長が雇ったコンサルタントがやってきて、「教員は考えが甘いんだ」、「いいですか、先生。ライバル短大が潰れれば、おたくはもう 10 年もつんだよ。これはどちらがサバイバルするか、戦争なんだ」と檄を入れ、当時は私も若かったので、「そんなものか」と思って頑張った結果、見事に近所のライバル短大が 1 校潰れました。そして、何が起こったのか。広島中の短大が、生き残ったにもかかわらず、志願者を減らすことになりました。なぜか。「広島の中大は潰れる」と、忌避されるようになってしまったからです。代わりにどこに受験者が集まったのかというと、四大併設の短大に集中しました。そこなら「短大が潰れても、何とか救ってもらえる」とマーケットは考えたのです。

同じことが言えます。私立であれ、設置形態が何であれ、エリアの大学がいくつか潰れると、そのエリアの高等教育はまずいと思われれます。日本全体でも同じです。「私立大学は多すぎる。もっと減らせ。偏差値が低い大学は潰れるだけ潰れろ」といってどんどんと日本の大学が潰れていくと、世界の大学入学希望者からは「日本の大学は危ないな」「これは、日本の大学に留学しても意味がないな」という評価を受けることに繋がるだけです。こういうことなのです。

日本のような急激な人口減少下では、高校

の先生方も、中学や小学校の先生方も、家庭の親御さんも、大学も、地域企業も一緒になって、地域ぐるみ、国ぐるみで接続しながら人を育てなければならない時代になりつつありますので、そのときのためにも、国立、私立の垣根を越えた研究が必要です。このまま放っておくと、私立の入試研究者もいなくなってしまい、国立の入試研究者もどんどん数が減って、いずれはいなくなってしまうのです。そのときに入試研究はどうなってしまうのでしょうか。この研究を、私たち自身が重要だと思うのであれば、永続可能な形に持っていく必要があります。そのためには、伏してお願ひしたいことが、国立大学アドミッションセンターにあるということです。

雑駁な話になりました。以上で私の報告を終わります。ありがとうございました。

(拍手)

竹内正興教授（司会）：

福島先生、ありがとうございました。ただいまの福島先生のご講演についての質問等につきましては、ウェブ上での入力をお願いいたします。

第38回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える[20]）

国立大学アドミッションセンター連絡会議20周年記念企画シンポジウム
国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来 — よりよい大学入試の実現を目指して —

現状報告 1
私立大学における入試研究の課題
— 国公私を横断する入試研究への期待 —

大正大学
エンロールメント・マネジメント研究所
所長 教授 福島 真司
s_fukushima@mail.tais.ac.jp

2023年5月17日

EMIR

自己紹介

これまで5つの大学・短期大学（国立2校、私立3校）で職務経験を持ち、それぞれの大学等で教鞭を執りながらも、学長や副学長直下の組織において、主に、大学マーケティングやIRに関する業務を行う。特に、前職の山形大学では、日本の大学における最初のエンロールメント・マネジメント（以下、EM）に関する専任組織の教授職、現職の大正大学では、日本の大学における最初のEMやIRに関する大学附置研究所の研究所長を拝命。

2011年からEMIR勉強会を主宰し、これまで16回開催、また、EMやIRに関連したテーマにおける全国大学、大学団体、企業等主催の招待講演は140回を超える。

主な専門は、大学マネジメント、大学マーケティング、大学入学者選抜等。修士（教育学）、修士（大学アドミニストレーション）、経営管理修士（専門職）。

文部科学省大学設置・学校法人審議会（学校法人分科会）・専門委員*、文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）委員会・フォローアップ部会委員、文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）・ペーパーレフェリー、一般社団法人大学IRコンソーシアム・代表理事*、学校法人高澤学園評議員*、ノートルダム清心女子大学外部評価委員会・委員長*、山形県県立高校の将来の在り方検討委員会・委員長、山形県公立高等学校入学者選抜方法改善検討会・委員、宮崎市教育委員会コミュニティスクール推進委員会・委員、学校経営コンサルティング合同会社・執行役員*、その他、大学マーケティングやコンサルタント、ICT企業、NPO等の顧問、外部アドバイザー等を歴任（*は、現職）。

2

EMIR

高校訪問から得た知見 ～学生募集・選抜と格闘した30年の経験から～

① 地方地域（少子化を迎えていない地域を除く）
都市地域に比較して、**少ない**生徒数
都市地域に比較して、**少ない**進路先学校数
都市地域に比較して、**少ない**外部リソース（予備校・塾・教育系YouTuber等）
結果として、都市地域に比較して、
少数の進路先大学等に関する深い知識
（進路状況による差異が当然ながら存在する）

両者の相違点

② 都市地域
地方地域に比較して、**多い**生徒数
地方地域に比較して、**多い**進路先学校数
地方地域に比較して、**多い**外部リソース（予備校・塾・教育系YouTuber等）
結果として、地方地域に比較して、
多数の進路先大学等に関する幅広い知識
（進路状況による差異が当然ながら存在する）

EMIR

高校訪問から得た知見 ～学生募集・選抜と格闘した30年の経験から～

① 地方地域（少子化を迎えていない地域を除く）
進路指導を丁寧に行う
生徒を**面倒見よく育ててくれるのか**に関心が高い
（以上、先生によるのは当然なのでここでは触れない）
受け入れは、高等学校・大学との**関係性による**
（お互いのニーズは一致しない場合が多い）

両者の類似点

② 都市地域
進路指導を丁寧に行う
生徒を**面倒見よく育ててくれるのか**に関心が高い
（以上、先生によるのは当然なのでここでは触れない）
受け入れは、高等学校・大学との**関係性による**
（お互いのニーズは一致しない場合が多い）

4

EMIR

高校訪問から得た知見 ～学生募集・選抜と格闘した30年の経験から～

そもそもどの大学に対しても、どの高等学校に対しても、
“成功する”ような高校訪問の知見は存在しない

【重要なポイント】
どのようなエリアの、どのようなポジションの、どのようなリソースの大学か
×
どのようなエリアの、どのようなポジションの、どのようなニーズの高校か
組み合わせは、**数多く存在する**
さらに、お互いに「誰が」行うのかも、大きな影響を与える
・・・これは高校訪問だけに限ったことではない
入試制度を含めた、全ての募集方法にも同様に当てはまる

5

EMIR

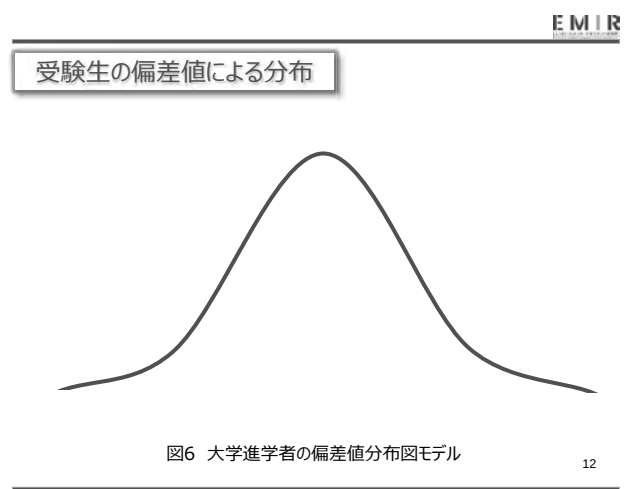
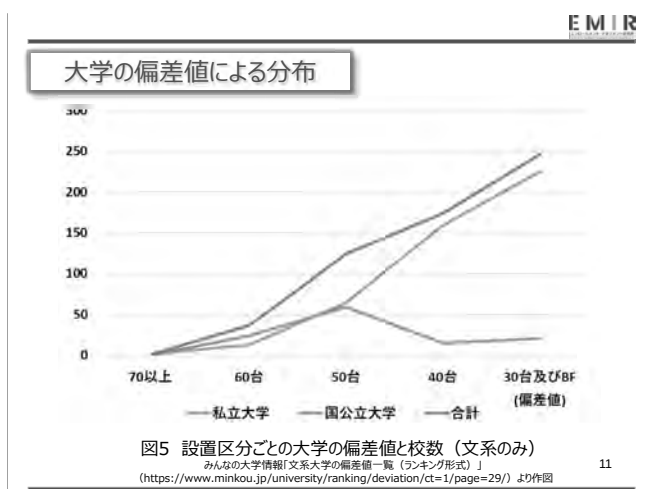
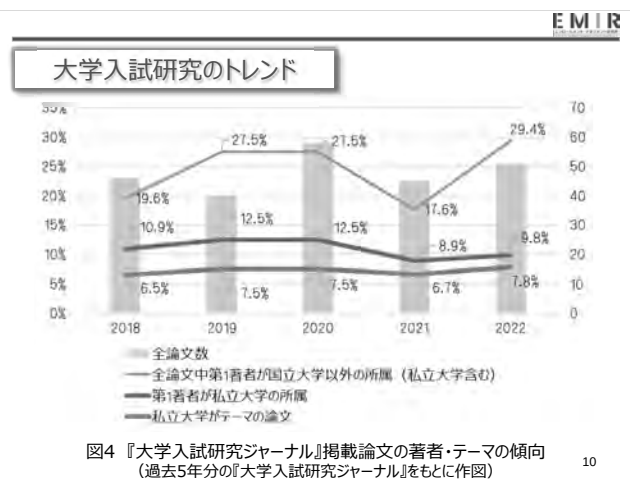
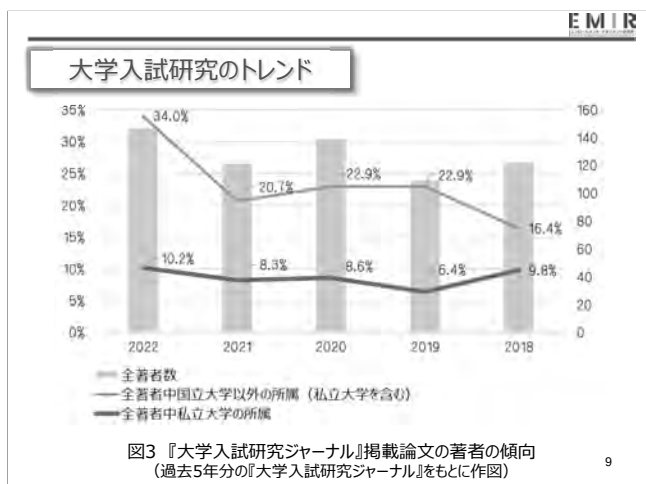
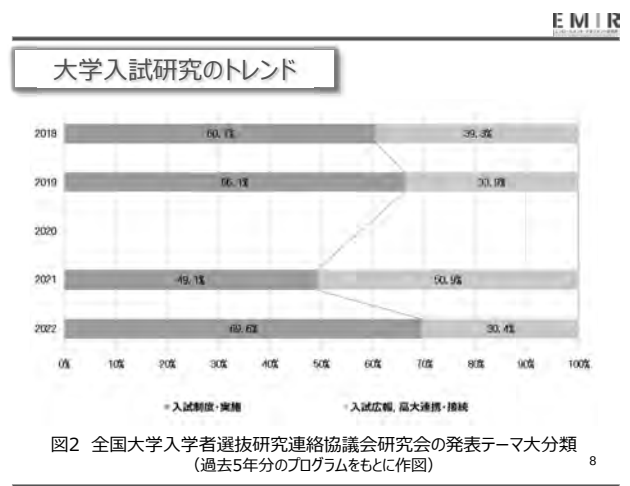
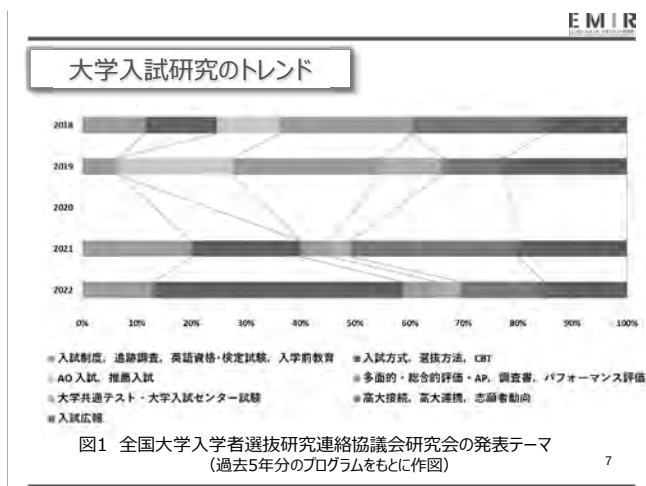
高校訪問から得た知見 ～学生募集・選抜と格闘した30年の経験から～

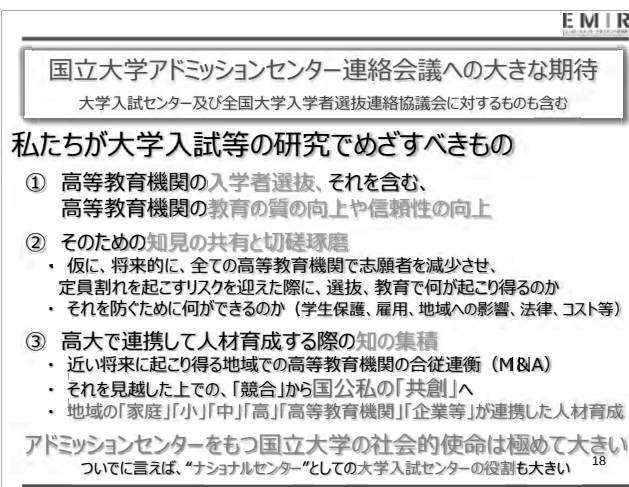
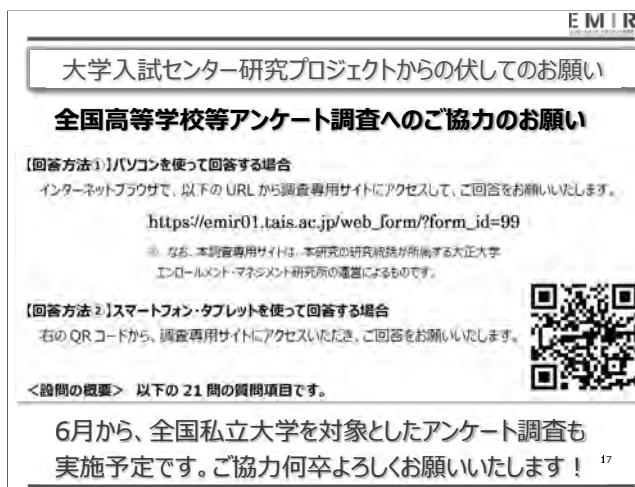
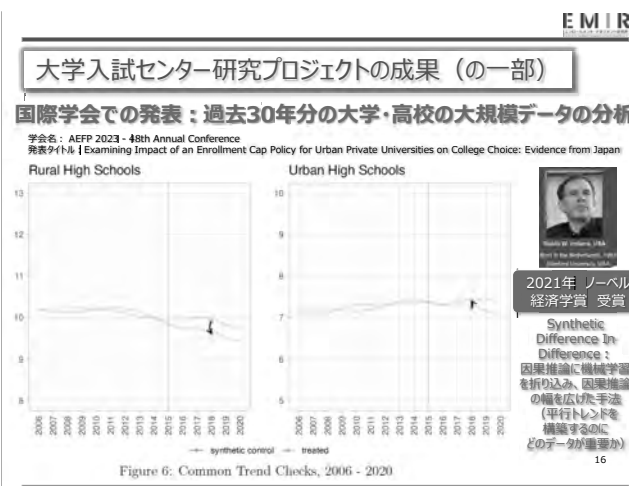
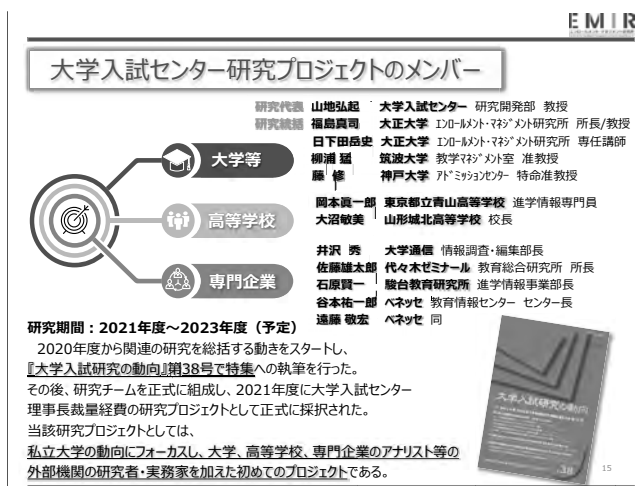
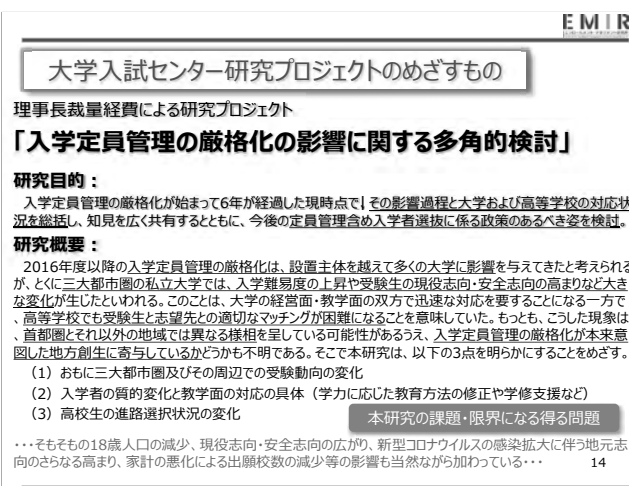
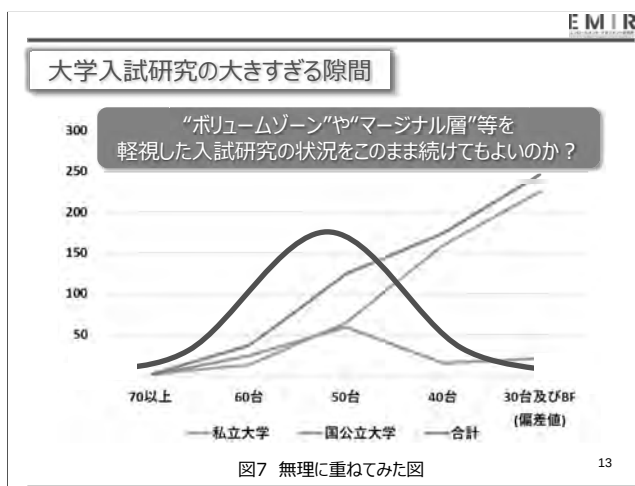
米国の学生募集の専門家談
「最も尊敬する顧客に最も軽蔑されるビジネス」！？

マーケティングにフレームワークはあっても、
長期に持続する成功パターンは存在しない
戦術はすぐにコモディティ化する
他の追随を許さない圧倒的な手法以外！レッドオーシャンを引き起こして終わる

多様な現場を知らない一般化の話聞かされるとちょっと寒い
同質集団であれば、一般化は可能かも知れない
ただし、競合関係にある場合、公表する意味はあるのか
全体の質の向上が図れるテーマなら、共通の利益につながる
同質でない場合は、ケースの多様性が重要になる
多様なケースから、一般化できるもの、効率化・合理化、あるいは、
質の向上につながるものを導き出す

6





現状報告 2：高等学校から見た高大連携と大学入試

青森県立弘前中央高等学校
齋藤 郁子 校長

【講師紹介】

竹内正興教授（司会）：

続きまして、現状報告の 2 番目として、「高等学校から見た高大連携と大学入試」というタイトルで、青森県立弘前中央高等学校校長、齋藤郁子先生よりご講演をいただきます。それでは齋藤先生、よろしくお願いいたします。

齋藤郁子校長：

皆様、こんにちは。弘前中央高等学校から参りました齋藤と申します。

弘前というのは、（パワーポイントの）あそこです。青森県のあの辺から来ました。

今日お話しするのは、今の学校の話というよりは、今まで働いてきた学校の中での話をしようと思っています。プロフィールはご覧のとおりなんですけれども、一番下の「未来を紡ぐ教員勉強会」についてだけ少し説明をさせていただきます。

皆様ご存じのように、「高大接続答申」というのが平成 26 年に出されたわけですが、このとき、私は何かまた起こるのかなぐらいの割と緩い感じで押さえていました。ただ、実行プランが出てきて、正直に言うとかかなり慌てました。何をしなければいけないんだろうとちょっと焦ったわけですが、他県のお話を聞いて、どうもこれは県単位で、みんなで勉強しなければいけないんじゃないかというふうに思いまして、青森県の仲間と一緒に勉強をするという会を立ち上げました。

そのときは、本当はこんなに続くとは思っていませんでしたが、平成 27 年の 6 月にリクルートキャリアガイダンス編集長の山下



先生をお呼びして、これから私たちはどう取り組んでいかなければならないかという勉強会をまずやりました。この勉強会の後、本当にこのまま進んでいっていいんだろうかという話を持ち上がり、もう少し批判的な意見を聞きたいということで、東北大の倉元先生をお呼びしました。このときに私の印象に一番残っているのは、「高校の先生方が上から下りてきたものをそのままやるのでは駄目なんだ」「現場の声を届ける努力を高校の先生がすべきだ」ということを倉元先生がおっしゃったんですが、これが私たちのこの勉強会の原動力にもなっていると思っています。

その後、この勉強会はずっとまだ続いておりまして、名前もつきました。「未来を紡ぐ教員勉強会」といいます。今は、私はもう主催ではなくて隅っこのほうにいます。この勉強会で、今年の 2 月に東北大の入試を勉強しようという会を行いました。なぜこんな会をやったかという、AO 入試を経験した生徒がいる学校からは受験するんだけど、受験者の少ない学校では、そういう指導についてよく分からない先生が多いから、なかなかチャレンジする生徒が出てこない。入試に対

する理解が進んでいないのではないかということこの勉強会を行ったわけです。

勉強会の後、倉元先生からこの会（東北大学高等教育フォーラム）でお話しませんかという機会をいただきました。私は、大学のアドミッションセンターで高大連携ということを考えてほしいなという気持ちを持っておりましたし、また、大学にとって必要な人材を獲得する入試を設計してほしいという気持ちを強く持っていましたので、今回お引き受けすることにいたしました。

本日の内容は、高大連携と大学入試、それから総合型選抜の意義についてお話ししたいなと思っています。あくまでも高等学校の一教員である齋藤郁子の考える高大連携と大学入試であるということだけは、ここでちょっと言い訳をさせていただきたいと思います。私の個人的な感覚です。

さて、高大接続改革ということが言われたときに、本当は高等学校教育と大学教育と大学入学者選抜の一体的改革として出てきたのではないかと思うのですが、でも、私たちの関心は大学入学者選抜に集約されてしまったように私は思っています。私自身も大学入試が気になりました。当然ですが、大学入試が高大接続なのかと、私はここにクエスチョンマークをつけていますが、大学入試が高大接続だというふうにおっしゃる先生方も実はたくさんいらっしゃるような気がします。でも、高大の教育ギャップというのは、学問体系が異なるわけですから、入試でつなごう、入試だけでつなごう、これは無理なんじゃないかなというふうに思っていて、一点での接続ではなく、高大が連携して少し乗り入れながら進んでいくことが本当は大事なんじゃないかなと思うわけです。

実際、東北大学のアドミッションセンターでは、東北大アウトリーチプログラムとして、青森県のほうにも講演に来ていただいた経緯があると思います。2015 年、弘前中央高校

を中心として、リスニングの体験と、それから地元ってなんだろうという講演をやっていた。このときに、これで実は東北大の受験者が増えたかということが増えていないと思います。全くそういう増える増えないではなく、そういう利害関係ではなく、東北大学が高等学校の現場まで来てこういう連携をしてくれたということに実は先生方はとても感激し、そして東北大学に生徒たちを向けていこうという気持ちを強くしたということとは言えるのではないかと考えています。

現在も、オープンキャンパスをはじめ、高校生の知的好奇心を刺激するような高大連携はたくさん行われていると思うのですが、私たち高等学校で今やっている総合的な探求の時間、これについてはぜひとも高大連携の中で何かできないかなということを私はいつも思っています。

本校では、地域をフィールドにして探求を行うということを行っているのですが、実はこの地域で課題を見つけるといって、高校生と高校の先生ではすぐに行き詰まってしまう。例えば、最初の頃は短命県返上。青森県は短命なので、短命県を返上しましょう。短命県を返上するのに、カップラーメンの汁を飲まなければいいという、これが毎年出てくる。これでは全然探求にも何もならないわけです。

今現在、本校では地元の弘前大学の教育学部と一部連携をしながら実施をしているのですが、こういう大学の先生の知見が入ると、急に探求が面白くなってくるなというふうに思います。例えば、まちづくりというと、生徒からは空き家を何とかしたい、こういうのがすぐ出てくるんですが、大学の先生から「まちづくりを実際にやっている人を紹介するよ。地元の人だけではなくて、岩手の紫波町に行くけれども一緒に行くかい」、こういう刺激を受けて、生徒たちは自分の学びの足りなさや、それから歴史をきちんと勉強しな

いと環境について話ができないんだということに気づき、生徒たち自身が言い出すようになります。

こういった大学との連携というのは、ぜひとも大学のほうのアドミッションセンターで考えてもらえないかなというのが私の実は考えているところです。知っている先生と一緒にやっていくと、担当教員が異動するとうまういなくなる。何らかの窓口があったらいいのになということをつも思います。もちろん、大学入試というのは高大接続ではないわけではなくて、大学入試から私たちは大学の求める教育をとつて見ていると思います。

「大学入試での」と書きましたけれども、大学入試こそがやっぱり接続の要であることに、異論はありません。でも、高大連携もぜひアドミッションセンターが中心になって考えていただけないかなというふうに考えています。

さて、もう一つ、ではその大学入試の中の総合型選抜の話をしたんですが、私は少し勘違いをしていました。これはベネッセのサイトのデータです。私の中では、学校推薦というのはもうあまりなくなつていてAO入試、総合型に移つてきているというふうに勝手に思つていたんですが、データの的には実は総合型よりも圧倒的に学校推薦が多いんだなということをつ今回調べて分かりました。ですから、私が言つてゐるこの総合型選抜は、実は一般選抜以外の入試ぐらいでお話を聞いていただければと思います。

理想的には、志望が高くて学力を持っている、これが理想なんだと思いますが、現実の中で、志望は高いけれども学力がなくて大学についていけないとか、それから、学力は高いんだけど意欲が低いから辞めちゃうとか、こういう人を取りたくないというのが選抜なんだろうとは思つてゐるんですが、高等学校の立場から申し上げれば、教育は理想を求めることだと思つてゐますので、志望が高くて学力を持っている生徒を育てる。このためには、

私は実はこの総合型選抜の入試というのは非常に重要な意味を持っているというふうに考えています。

なかなか一般選抜だけだと、その大学のアドミッション・ポリシーを見ようというところまで行かない。でも、自分がAOを受けてみる、推薦を受けてみるということになつて、大学のことや研究を理解しようと思うと、非常に生徒の志望は高くなるというふうに思います。もちろんみんな受かるわけではないんですが、ある生徒がAOで落ちました。落ちた生徒が何人かいたんですが、「もう一般入試受けたくないなあ」と言つてゐる生徒に、隣から「(自分たちより)志望の高い人はもうAOで全員受かつたから、今僕たちは一番志望が高いよ。あとは勉強するだけだ」というふうに言つて、その2人とも一般入試を受けていくわけですよ。志望が高まつていくということを自分が実感できる、これもAO入試ではないかなと思います。

「総合型選抜は準備が大変」、「テストの点数下がるんじゃないのか」、これもよく言われます。ある生徒が東北大の医学部を受けたんですが、AOでは駄目でした。一般入試で合格をした後で、「あの子はAOに向かわせなければよかったね」というふうに同僚からは言われました。でも、本人からはこんなふうに言われました。「先生、実は志望理由を書くのすごい大変だったけれども、この志望理由を書いて、実は試験勉強に向かう学習時間が伸びています。だって絶対に合格したいと思つた。もしも、自分がAOで落ちていなかったら、こんなに東北大にこだわらなかったかもしれない。でも、絶対この大学に行きたいという気持ちになつたからこそ一般入試で合格したんです」、こういう入試設計がAOでは求められているんじゃないかなというふうに思つてゐるんです。

決して、学力が不足しているから総合型でしか受からないんだからみたいなことではな

いと思うんですが、現実にはこういうことを言ってしまったら、うちの高校はAOで狙うような学校ではないなんてことを今でも言っている、もしくは、私はすごく「総合型から」というので、私の前では言わないけれども、本当は心の中で思っている、そういう方もまだまだいるんじゃないかなというふうに感じているところです。

それを受けて、子供たちのほうも、総合型選抜のために目立つ活動をするんだと。本当はやりたくない活動なんだけれども、部活をやめたら不利になるからとか、高校生活を歪ませていくような、こんなのは入試として望ましくない設計なのではないかなというふうに思います。

そしてまた、大学の先生からも、なかなかひどい言葉を受けます。ある生徒が某地方国立大学に行きまして、「将来、研究してこういうふうに貢献したいと思っているんです」と言ったら、大学の先生から「AOで受験するような子は研究者にはなれないよ。せいぜいその辺のスーパーに勤めるのが関の山だよ。うちの大学で研究者になれるのは、後期で受けてくる、簡単に言うと、前期でどこか有名大学を受けて落ちてきた生徒のような学力の高い人だから」、そう言われると、子供たちは一気にやる気をなくしてしまいます。

「準備させないでくださいよ」というのは、これは私が言われました。入試関係の方からです。「先生方は準備させないで受験させてくださいよ、そのほうが生の姿が見えるから」、これも私は非常に腹が立って、受験勉強しないで受験するという受験はないんじゃないでしょうか。私はそう思います。準備をする過程で子供たちが成長していく。そういうものを目の当たりにしている私としては、そんな入試設計でいいんだろうかというふうにこれもまた腹を立てたりしています。こんな風に私はいつも腹を立てています。

というわけで、アドミッションセンターに望みたいこととしては、生徒の志望を高め、かつ学力を大切にするような入試を設計してもらいたい。そして、それを先生方や高校生一般だけでなく、大学の内部にもぜひとも広報してほしいというふうに考えています。そもそも大学の求める人材と高校の育てたい人材というのは一致していると私は思います。学習指導要領では、生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性」の涵養ということが言われています。

東北大のAOの選抜要項を写してきたもので、さらっと飛ばしますが、ここに書かれていることを拾っていくと、高等学校の教育が大学のアドミッション・ポリシーですよということが書かれているように私は思います。なので、違う入試ではなく、どの入試でも知識・技能と高い志が評価される、そんな入試がいいなと思っています。

こんなふうに書きましたが、実は逆パターンも私はいいんじゃないかなとも思っています。「総合型を受けたいんだけど」、「じゃあ、何がやりたいのか考えてみて」、これだと付け焼刃と言われることもあるんですけど、実は高校生にとって初めて学問に出会うのはこの入試なのではないかと私は思うのです。

ある生徒が、「化学が好きだから」と、「いや、そうか」と、「何が好きなんだろうね」、大学のオープンキャンパスに見に行くと、目をきらきらさせて帰ってくるわけです。初めて大学の研究に触れて、私もこれがやりたい、この先生のところでやりたい。「やりたいだけじゃどうなんだろうね」と言うと、生徒たちは本を読みます。私が持った生徒も、その先生の本を1冊読んで、読み終わったら、もう蕩々と私に語るわけです。語り始めたら、すごい。高校生なので、初めての出会いです

から、そこに惚れ抜いていいのではないか。
総合型選抜や学校推薦のために始めたかもしれませんが、そこに自分の志が出てくるようなそんな入試設計だったらいいんじゃないかなと私は思います。

志があれば、学力は後からついてくる。もしかしたら、学力の伸びは高校卒業までに間に合わないときもあります。でも、足りない分を大学に入ってから埋めてもいいんじゃないかなというふうに思うんです。中学でかけ離れた学問、例えば、なかなか英語ができない。大学に行ってからもう一回やり直すには時間があります。高校ではなかなか時間がない。入試ではもしかしたら、まだ学力が少し足りないかもしれない。だから、AO、推薦の子は学力が低いのではなく、志がいろんなものを埋めてくれると私は信じています。

今日、こんな話をしました。でも、私が言いたいことは、最後のこれです。全ての入試が高等学校の教育を反映した生徒が成長する機会となる。そして、せっかく入学した生徒が「AO 入試で入学した生徒は、学力がないから駄目だ」などと言われない入試であることを強く望んでいます。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

竹内正興教授（司会）：

齋藤先生、ありがとうございました。ここで休憩を取らせていただきます。再開は、前方のデジタル時計で 3 時 40 分とさせていただきます。

なお、基調講演及び現状報告の 3 名の先生方への質問等の受付は 3 時 25 分で締め切らせていただきます。来場参加の皆様はお手元の QR コードから、オンライン参加の皆様はオンライン参加者用ページより、またはスクリーンの右下に表示されている QR コードから、ウェブ上での入力をお願いいたします。

それでは、休憩に入ります。

現状報告 齋藤郁子(青森県立弘前中央高等学校)

令和5年5月17日

高等学校から見た
高大連携と大学入試



青森県立弘前中央高等学校
校長 齋藤 郁子

プロフィール

昭和61年3月 弘前大学理学部化学科卒業
昭和61年4月 千葉県 教諭 平成2年退職
平成 4年4月 青森県 教諭
五所川原高、弘前南高、黒石高、青森高
平成29年4月 弘前中央高校 教頭
平成31年4月 三沢高校 校長
令和4年4月 弘前中央高校 校長
未来を紡ぐ教員勉強会

平成26年 中教審答申
「高大接続答申」
平成27年1月16日 高大接続改革
実行プラン

ふーん

- ①個別選抜改革
- ②新テスト
- ③高大の改革

何が起きているの？

高大接続改革に向けた工程表

勉強会

青森県の仲間と一緒に勉強しよう
H27年6月 リクルート
キャリアガイダンス編集長 山下真司氏
入試制度改革の狙いと影響
～今からどう取り組んでいけばいいか～
9月 東北大 倉元 直樹先生
流されぬ進路指導のために
～現場から入試制度改革に挑む～
現場の声を届けなければ！

第22回未来を紡ぐ教員勉強会

令和5年2月4日

東北大 倉元 直樹先生
「東北大入試を考える」

AO入試で
大学は何を求めているのか？

国立大学における
「アドミッションセンターとは何なのか？
どうあるべきなのか？」

アドミッションセンターでは

- 1 高大連携について
- 2 「大学にとって必要な人材」を獲得する入試

本日の内容

- 1 高等学校の考える
高大連携と大学入試
- 2 総合型選抜と一般選抜
総合型選抜の意義とは？

1 高等学校の考える
高大連携と大学入試



大学入試＝高大接続？
高大の教育ギャップをつなぐ？
高校 知識を学ぶ
大学 新しい知識を作り出す
異なる学問体系
入試だけでつなぐことは無理
高大接続 ではなく 高大連携

高等学校の教育と大学教育の連続性(大学入試 だけ ではない)
東北大アウトリーチプログラム
2015年 弘前中央高校
「地元って何だろう？」
リスニング体験＋講演

東北大学
科学者の卵養成講座
東京大学
メタバース工学部
高校生の知的好奇心への刺激

総合的な探究の時間

地域をフィールド
学問探究へ

弘前大学 教育学部
先生、学生との連携

大学入試 ≠ 高大接続

大学入試は
大学の求める教育(求める力)

大学入試での接続は大切

国立大学における
「アドミッションセンターとは何なのか？
どうあるべきなのか？」

アドミッションセンター
高大連携を考える場

2 総合型選抜と一般選抜
総合型選抜の意義とは？

学校推薦型選抜

理想
「志望が高く」「学力(知識技能)を持っている」

現実
「志望は高い」が低学力
「学力は高い」が意欲が低い

これらの人を上手に選抜

理想を求めて
「志望が高く」「学力(知識技能)を持っている」
生徒を育てる

アドミッションポリシーの理解
→学習意欲が高まる→学力の向上
→学問への高い関心→高い志望
総合型選抜・学校推薦型選抜と
一般選抜は一体

現実

総合型選抜の準備が大変。

総合型に出願すると学力(テストの点数)が低下するのでは？

学力が不足しているから(得点がとれないので)、総合型選抜でしか合格の可能性がない

現実

高校側

「基礎学力が不足しているから、総合型で狙う」

「総合型選抜のために活動せよ。」

「君は学力(テストの点数)が高いんだから無駄な総合型に出願せず勉強だけしていなさい」

現実

生徒

「総合選抜のために目立つ活動をしなくては！」

「部活動をやめたら不利になる」

「大学を褒めれば良いのかな」

「自分はたいした活動をしていないから一般だけ受けます」

現実

大学側

「総合型の学生が増えて低学力で困る」

準備・練習をしないで受験させて欲しい

国立大学における

「アドミッションセンターとは何なのか？
どうあるべきなのか？」

アドミッションセンター

「生徒の志望を高め」「学力も大切にする」
入試の設計と広報を

大学

アドミッションポリシーAP

大学の求める人材



本来一致

高校の育てたい人材

高等学校で育てる力
学習指導要領

- ・ア「何を理解しているか、何ができるか
(生きて働く「知識・技能」の習得)」,
- ・イ「理解していること・できることをどう使うか
(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力
等」の育成)」,
- ・ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・
人間性等」の涵かん養)」

東北大学のAO入試

- ① 21 世紀の人類社会の課題に対し研究者として真剣
に取り組み優れた貢献をしようとする志と
- ② 豊かな学識とリーダーシップを備える職業人として
社会の発展に優れた貢献をしようとする志を抱き、
これを実現する固い意志と学問に対する強い好奇心
を持つとともに、本学学士課程教育を受けるにふさわ
しい高水準の学力を備えた学生を求めています。

東北大学のAO入試

高水準の学力とは、具体的には、高等学校等で
幅広い教科目を履修して優れた成績を収め、論
理的思考力や問題発見力、分析解決能力、豊か
な創造力、発想力、表現力、コミュニケーション能
力を有することを指します。

東北大学のAO入試

さらに倫理性や、学問の課題に主体的にリーダ
ーシップを発揮しながら他の学生と協働して取り組
むことができる態度を備えていることを求めます。

高等学校の教育＝大学のAP

自らやりたい事を追求

＝学校推薦・総合型選抜

大学でやりたい事を探したい

＝一般選抜

いずれも、知識・技能と高い志が評価される

本日の内容

- 1 高等学校の考える
高大連携と大学入試
- 2 総合型選抜と一般選抜
総合型選抜の意義とは？

学校推薦型選抜

すべての入試が

高等学校の教育を反映した
生徒が成長する機会となる
せっかく入学した生徒が
「〇〇入試は学力がない」と言われない

入試であることを望んでいます



ご清聴ありがとうございました

弘前中央高校
校長 齋藤 郁子

第Ⅲ部 討議

ーパネルディスカッションー

指定討論者紹介

指定討論者

出口 毅（でぐち たけし）氏

1963 年山形県生まれ

〔教員歴〕

山形大学教育学部・地域教育文化学部講師・助教授（14 年 10 ヶ月間）

山形大学地域教育文化学部准教授・教授（2 年間）

山形大学大学院教育実践研究科教授（12 年間）

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（学習における認知機能の個人差について）

〔主な著書，研究業績〕

櫻井茂雄（編）『改訂版 たのしく学べる最新教育心理学：教職に関わるすべての人に』
2017 年，図書文化（第 4 章「学習のメカニズム」分担執筆）

服部環・外山美樹（編）『スタンダード教育心理学 第 2 版』2022 年，サイエンス社（第
4 章「記憶」分担執筆）ほか

〔学会活動等〕

日本教育心理学会理事（3 年間），研究委員，「教育心理学研究」編集委員，「教育心理学
年報」編集委員，城戸奨励賞選考委員，優秀論文賞選考委員

〔その他の特記事項〕

山形大学附属学校運営部長，地域教育文化学部長，副学長（大学改革）

一般財団法人教員養成評価機構評価委員会専門部会長

山形県第 6 次教育振興計画検討委員会委員長など歴任

討議——パネルディスカッション——



竹内正興教授（司会）：

お待たせいたしました。それでは、お時間となりましたので、これより第3部、討議に入ります。

ここからは討議司会の先生方にマイクを渡します。よろしくお願いいたします。

宮本友弘教授（討議司会）：

それでは、これから討議に入らせていただきます。討議の司会をさせていただきます，東北大学の宮本と申します。

西郡大教授（討議司会）：

同じく、討議の司会をさせていただきます，佐賀大学の西郡と申します。よろしくお願いいたします。

宮本友弘教授（討議司会）：

倉元先生，福島先生，齋藤先生，ご発表ありがとうございました。本日は，これから先生方の発表を軸に討議をさせていただきます。

本日は，これまでと少し趣向が違っておりました，指定討論者として山形大学理事・副学長の出口先生をお招きしております。

それでは，まずは出口先生から口火を切っていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

出口毅理事：

ご紹介にあずかりました山形大学の出口でございます。現在，入学試験のほうも担当しております，特に昨年から東北大学のアドミッション関係の先生方が，本学にわざわざおいでいただいて情報交換をさせていただく機会がございました。そういう意味で今回シ

ンポジウムにご案内いただきまして、本来だ
とお断りしたほうがいいのかもしれませんが
けれども、参加をさせていただいたというこ
とでございます。

まずは、今回対面ということもあって、3
人の先生の熱量が非常に伝わるご講演、それ
から現況の報告だったと思っております。私
のほうから、全体のところを通してまずお話、
コメントをさせていただき、さらにお尋ねし
たいところに触れてまいりたいと思います。

本学につきましては、福島先生のご講演に
もございましたように、エンロールメント・
マネジメント、いわゆる EM ということを中
心にして入試の部署を構成しているところで
ございます。ただ本学、分散キャンパスとい
うこともあって、これまでどちらかというと
学部単位の入試を中心にやってきましたので、
センター的な役割の自覚というのは、ともす
るとあんまり持っていないというところがあ
るかもしれませんので、そのあたりについて
は福島先生からもさらにご指摘があるのかも
しれません。

今回のテーマは「国立大学におけるアドミ
ッションセンターの現在と将来——よりよい
大学入試の実現を目指して——」というこ
とで、非常に前向きなテーマでポジティブなん
だろうなと思いましたところ、倉元先生から
発展的解消とか、いろいろそうではない言葉
が飛び交っていて、少し衝撃的なところもご
ざいました。ここまで3人の先生を通して感
じたところのキーワードは「関係性」でした。

1 番目は、まず倉元先生の基調講演のとこ
ろで、センター間、あるいは国立の大学間の
関係というものを非常に整理していただいて、
分けることによって非常に分かりやすくして
いただいたなと思ったところでございます。
本学もそこにご指摘されたところの一大学と
して恐らく入っているだろうということとい
いますと、非常に今後の見通しとしては現状
維持、あるいは実際に触れられたとおり、ひ



ょつとすると入試の部門というものを今後ど
うしていったらいいのかというのを少し考え
る時期に来ているかなと思っております。

このセンターの在り方について、一つ機能
という点で、もう一つ組織という点で二つの
視点から分類をしていただいたわけでありま
すけれども、聞いたところで、一つ目として
理想的なところは、全ての機能を持った一つ
の組織があるのであれば、そしてそれが一大
学にあるのであれば理想的なセンターになっ
ていて、機能別の部門を持った大きなセンタ
ーができるんであろうと思いながら、大学の
組織的な課題とかに応じて特定の機能を特化
させて持っているセンターとか、実際にはい
ろいろな類型があるんだろうなと思い描くこ
とができました。自大学と他大学を比較しな
がら、今後どのように本学がこういったとこ
ろを維持したり強めていったらいいの
かということを考えさせられたのが1点目で
ございます。

2 点目は、福島先生のご講演でも共創とい
う、共に創っていくという言葉が出されてお
りましたが、大学間の関係という点でこのセ
ンターに加盟している大学が今後やっぱりど
ういう姿になっていくのかなというところで、
切磋琢磨しながらそれぞれの特徴を出し、恐
らくよりよい大学入試を目指していくという
点では、共創は疑いもないところだと思いま
す。発展的解消という言葉もありましたが、
共創、共に創っていくということで何ができ

るのか。あるいは協働するところがあるのかという観点から、センターの価値、あるいは意義といったものがどういうところなのかというのを、20周年目に確認しながら進んでいく必要があるんだろうということを2点目、強く感じたところでございます。

それから、3点目は、まあ答えということはないんでしょうけれども、一つ問題提起としてあった発展的解消という言葉が何を意味するかというところは、ぜひ議論の中で考えていく問題でもあろうかなと思ったところで、倉元先生自身のお考えも含めて、いろんな大学からのご意見でさらに議論を深めていくんだろうと思いました。

それから、専任教員のところで、4点目になりますが、これは感想でございます。組織のつくり方ということで非常に参考になって、他大学の例も含めて、専任教員に求められる資質・能力・経験って何なのかなというのは、ちょっと私は気になったところでございます。というのも、ちょっとかなり卑近な例なんですけど、本学のセンターといいますか、今、先ほど言ったエンロールメント・マネジメント部に2人の教員がおりますが、今年度いっぱい定年で、今後こういったセンター機能を担う専任教員、なかなか国立でも人材育成機能はないということを含めて考えると、どういう方を大学としては配置すべきなのかなというところはちょっと気になったところであります。

これは齋藤先生のところのお話もあって、大学の教員の入試に対する向かい方というところはさまざまなわけですし、そのあたり大学でもかなり特徴的なところで。うち一人は研究者の教員で、もう一人は、高校で進路関係を長らく経験された方を、バランスを考えて採ってきたんですが、今後さまざまな機能の中で、うちないものも含めてどのような形でこういったセンター機能のところ組織をつくり、人を配置していったらいいのか

なというのは、私の立場からは気になったところでございます。

それから、関係性ということでは、現状報告の1番にあります福島先生のご報告でいうと、やはり大学間の関係性ということにおいては、国立だけでいいのかということの問題提起があったと思いますので、国公立、ある意味で見えない壁を越えてどのような形で入試の関係性というのを築いていったらいいのかということは、世の中の社会的な変化を踏まえると避けて通れない問題なのかなと思いました。

あと、地方国立大学ですので、非常に人口減少が激しい中で、どこの大学も生き残りをかけながら切磋琢磨していったらいい、共に創っていくということにおいては、地域の課題を克服していくという点では入試においても一致すべきところはあるのかなと。

また、高校生、家庭の観点からどのような関係を築いていったらいいのかなというのは考えさせられたところで、さらに、もし福島先生のお考えがあればお聞きしたいなと思いましたし、私どもも意見を持ちながら、一緒になって議論していくタイミングなのかなと思ったところでございます。

さらに高校の立場から大学入試に対する齋藤先生のお話を聞きました。多分、入試関係で、直接、先生からまくしたてられたら、迫力があって私は負けそうだなと思いながら聞いておりました。齋藤先生のご指摘はもっともだなと思うところがありまして、大学側の意見が、我が大学の教員でなければいいなと思って聞いておりました。正直言うとやっぱりこういう意見があるということも確かかなと思ったところです。

そうすると、やはり高校・大学にとって入試の目的というよりは意義というところをもう一回考えていくこと、お互いがそこを別のものとして考えずに、高大接続ということもありますので、送る側・受け入れる側という

関係ではなくて、このあたりやはりこれからの人材育成という教育も含めて考えると、一緒になってどういうことができるのかなと。やはりその点の高校との関係性ということが、私の立場からはとても気になったところでございます。

例えば先生の勉強会とか、そういったところを含めて大学の先生をお呼びしたり、倉元先生をお呼びしたりしているというところで、具体的にどんなことが話題になって何が変わったのかなんていうことが分かれば、また大学も変わっていけるのかなと思ってお聞きしましたので、そういったところも教えていただければなと思ったところでございます。

10 分ぐらいになりましたので、最初にまず、こんなところを私からの発言とさせていただきます。ありがとうございました。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

関係性ということをキーワードに、それぞれの先生方に質問がありました。まず、倉元先生からお願いできますでしょうか。感想を含めて4点ほどご質問があったと思うんですが、それについてお願いいたします。

倉元直樹教授：

ご質問をきちんと認識できているかどうか、あまり自信がないところですが、まずは、様々な機能を持つ巨大なセンターというものがあればいいんですけども、というようなお話でしたね。これまでは、とにかく、それぞれの大学が自分の「常識」で進めてきたというのが現実です。今回、初めて整理ができたと思っております。

その中で、実際には大学のリソースは本当に限られていますから、こういったところにとのぐらいいのリソースを割けばいい、というご判断はそれぞれ変わってくるだろうなと思います。

ただ、その先に、要は入試というものをどう位置づけるのか、という「哲学」が多分あるので、そういった中では、・・・その先の話とも絡むんですけれども、・・・「発展的解消」という言葉は少し強烈だったのかもしれませんが、「国立大学アドミッションセンター連絡会議」という枠がこのままでいいのかな、ということは思っています。基本的に、事務局を引き受けるときに覚悟したのですが、それは「このままだと自然消滅するよね」という認識でした。それでもいいかなとも思ったのですが、講演のところでも申し上げましたが、我々は公的な機関なんです。文部科学省からわざわざ足を運んでこうやって来ていただけるような。そういう立場の者が無責任なことではできないですよ。とすると、発展的に次の段階に持っていく必要があるだろう、ということで、ここはある意味、情報を提示して、・・・怒られるかもしれませんが、・・・各大学がその情報をもとにこの先を選択していけるような、そういう機会としたかったし、今回、そういうことができたとは思っています。

そういった意味では、これは私に対してだったかちょっとよく分からないんですけども、公立大学、私立大学ですね、国立という枠を超えた中である意味、入試の意義に関して同じように考えておられる大学はもう少し連携を深めていく場があってもいいんじゃないかなというふうには考えています。

これで三つお答えしたつもりですが、最後、専任教員ですね。これは大学が何を求めるかということだったんですけども、おそらく専任教員を今まで採用してこられて、いろんな評価があると思います。要はアドミッションセンターが発展する可能性があるかどうかは、大学の期待に応えられているのかかなので、その大学の期待が何だったのかということにも当然よるわけですが、おそらく、「分析なしの入試広報」だとか、「研究なし

の入試設計」というのは、今後は難しいんだろうなとは思っています。ということで、こういった人材が求められるのかというのは、これからいろんな場で具体的にお話をしていく必要はあると思うのですが、私自身としては、私どものところでも努力をするけれども、これは、ある意味、できれば公的にそういったことを意識していただいて、アドミッション人材の育成機能というようなミッションと、できれば裏づけになるような予算というのがいただけると、大学を超えて考えていけるのかな、と思うところでございます。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

先生がおっしゃるように、今回の分析で初めて整理ができ、それを契機にセンターの価値・意義を考えていく上で、どうしても哲学も考えていかなきゃいけないわけですよ。発展的解消に関することと、どういう人材が必要なのか、組織づくりも含めてのあたりは、本フォーラムのテーマにもございます「将来」ということで、また後半で議論を深めさせていただきたいと思います。

続いて、福島先生、2点ほどご質問があったと思うんですが、よろしく願いいたします。

福島真司教授：

ありがとうございます。

2点というのは何でしたっけ。

宮本友弘教授（討議司会）：

国立だけでよいのかと、地域的な問題と2点。もし私が聞き逃していたら、プラスして、おっしゃっていただければと思います。

福島真司教授：

ありがとうございます。

連携についてなんですけれども、現実には

難しいこともたくさんあると思うんですが、私立大学の場合ちょっとどうしても、何といえよいか、経営というか、そういうところが当然あります。例えば私立大学の数も多いですし、一枚岩では当然ないんですね。大きくは、例えば私大連と私大協と分かれていまして、私大連のほうは名立たる大大学が入っていて、私大協のほうは割合、地方大が多いです。定員管理厳格化のときも利害は分かれたりして、何ていうか、下手なことは言えないということもあったりしてですね。大学団体の入試担当の代表は、国大協の入試委員会じゃないですけども、声明を出すみたいな感じなんですね。なかなかそういう問題もありますし、また、私立は入試研究で、何ていうか、一義的に競合関係にあるので、そんなものをお互いに本当に情報交換しながら切磋琢磨というのはあり得るのかというのが、私立の中でも大きな問題だと思います。

それから、国立大学アドミッションセンターというその中にいきなりこう私立が入ってくるというのも、なかなかすぐにはといますか、私もこの当初のメンバーだったので、国立大学のその中だけでしか相談できないものもろのものをそこで相談するというのがありましたので、ちょっとレイヤーもいくつか必要だと思います。いずれにしても地域課題による連携とちょっと重なる部分ですけども、国も設置形態を超えた合従連衡をちょっとほのめかすといいますか、私が入っています大学設置審の会議でも、リスクシナリオというのを書かせるんですよ。「実際に学生が集まらなかったらどうするんだ」ということで、実際に集まらない大学も多いんですけども、そのときにちょっと最近、守秘義務との関係はありますけれども、だんだん集まらない場合に、近隣のこういう大学と合併するとか、そういうようなことも出てきていたりとか。

それから、思ったより早かった改正私大法

ですね。ゴールデンウィーク明けだなと思っていたら、ゴールデンウィーク前に衆議院を
通って、5月8日公布になってですね。令和
7年からになりますけれども、ガバナンス、
何かちょっと聞くと難しい。何でこんなにガ
バナンス改革をしっかりと行うという風潮の中
には、やはり今後20年、30年で合従連衡が
起こってくると。そのときに企業さんなんか
もそうですけれども、買ったはいいいけれども
粉飾決算で中はボロボロだったと。買った企
業が屋台骨を揺るがされるとか、これはよく
あることですよね。だから、買う側・売る側
のガバナンスをしっかりとしないと合従連
衡には大きなリスクが発生する。

あともう一つは、キャッシュリッチな大学
がキャッシュがあるから買おうかと手を出し
ても、地方の大学経営は東京ほど簡単じゃあ
りませんので、これは東京の人が聞いていた
ら怒られると思いますが、ただ学生募集一つ
とっても地方では構造的な問題がありますから、
頑張れば集まるという状況とは全く違
いますので、地方の大学を買ったはいいいけど
もこれはたまらなと。じゃあ、3年ぐら
いで手放すとか、そんなことになる大変です
から、やっぱり大学のガバナンスをしっかりと
して、覚悟を決めて中長期の経営を考えなが
ら合従連衡を進めていって、日本の大学の全
体としての活力を保つというか、そういうこ
とが必要になると思います。

つまり、いずれにしても、今はもしかする
と国私連携とかいったことは、「は？」とい
う感じかもしれませんが、実際にそのうち
には起こってくることですので、そのとき
になって慌てて、私立はそのときどうすべき
なのかとか、国立はどうなっているのかとい
う話ではなく、今からいろんな情報交換を
してお互いの知見を交換することは大事で、
東京はまだ人が集まっているモデルです
からライバル関係でいいんですけれども、
特に地域の方ではもう協働して一つも潰
さないという協働

の中で地域の大学の魅力を高めていくとい
うことが大事だと思います。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

続いて、齋藤先生、よろしく願い
たいします。

齋藤郁子校長：

私はどこを答えればいいかなと思っ
ていますが、先ほど大学の先生から、AO
の子は駄目だと言われたという話をちょ
っといたしました。これはちょっと補
足をすれば、生徒がオープンキャン
パスから帰ってきて、理系の子なん
ですけれども、理科の先生に先ほ
どのような話をしました。その先生
が私のところにその話を持ってき
まして、私はいつも怒っているの
で、「何だ、話にならん」と、「すぐ
大学に電話する」と言ったら、皆
さんから止められたんですね。止
められたときに、その先生から、「
校長、表向きで聞いたら、そんな
の、うんって言うわけじゃないで
すか。でも、それが本音なんです
よ。それが実情だということを校
長はちゃんと分かるべきだ」と
いうふうに言われてですね。ちょ
っと言い返せなかったんですね。

それが本音だとすれば、これはや
っぱりよくない入試だし、そんな
育ててくれない大学には自分だ
ったら行かせたくないなという
ふうに私は感じたわけです。ここ
にいらしている方たちは多分、
入試とかそういうものがよく分
かっていらっしゃる方なのでそ
んなことおっしゃらないわけ
ですが、でも、もしかしたら私
の隣にいる人もそういうふう
に考えているんだろうかという
ことで、私の中ではちょっと悶
々としていた話だったので、ち
ょっと紹介をさせていただいた
ところでございます。

もう一つ、勉強会の話がちょ
っと出ていたかなと思うんです
けれども、西郡先生にも来

ていただいたり、それから西郡先生には入試とはということで、大学がどういうことで入試を設計しているかということをお話を青森県の先生方で勉強するという形で来ていただいたり、予備校の方に今入試どうなっているんだらうということで来ていただいたり、実は私どもの勉強会はそのときにみんながこれ聞きたいということをお願いをして来ていただいています。

もう完全に私勉強会なので、みんなでお金を出し合って、出せる謝金もあまりないのに何とか来ていただくというような形ですけども、この勉強会の中でよかったことがあるとすれば、進学校以外の先生方も進学の情報を受け取れるという機会が実はあまり多くないような気がするんですが、みんなで共有しながら、そしてみんなが今何を疑問に思っているんだらうとか、どうやって県内のみんなが進んでいけばいいんだらうということを考えられる勉強会かなというふうに思っています。そんなところでよろしいでしょうか。



宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

今の3人の先生方のお答えを聞いて、出口先生、いかがですか。

出口毅理事：

それぞれお答えいただきまして、ありがとうございました。いろいろ考えるところが、

ございました。

まず、大学の先生お二人のお話から考えたことかというと、ここに来てよかったなと思うことが実はあって、本学の工学部の一般選抜前期日程で定員割れという状況が今回、生じまして、予想もしなかったことがございました。これだけ早く割れるのかという思いでございました。特に工学部の有機化学・バイオ系というと、本学の特色を出している部分での定員割れということで、今分析もしているところでございます。

そのとき思ったのは、実は1年前だったらあんまり考えなかったのかもしれないけれども、東北大学のほうでおいでいただいて、いろいろ情報交換しているということで、そのとき本音で言うと、うちと東北大学じゃ違うよなという思いがあったんですが、やはりこの定員割れというのは、考えてみると全国的に工学系のこの分野がひょっとすると弱くなってきているんじゃないかという視点からやはり考えていかないといけないということと、それと、欠員二次募集ではかなり応募いただいて定員は満たされたわけですけども、真にこの分野で人材育成というのが今日本の中でどうなっているのかと、私は門外漢でしたけれどもやはり考えてしまうことと、高校側ってここに対してどう思っているのかというところはやはり気になりました。

そういった意味では東北大学さんにお声がけしていただいて、山形県の中で進学校対象でありますけれども、年2回研究会的なことを行い、三つのポリシーの話から始まって、我々にとっても非常に実り多い内容をご質問いただいたり、ご要望いただいたり、取り組みのよさを実感しています。最初、規模からいうと本学は2番目だけでも東北大学とは全く違うんだと思ってたところはこの一、二年でかなり変わってきて、一緒にできる部分というのはひょっとするとあるんじゃないかという思いが出てきたというのが正直なところ

ろであります。

それに加えて福島先生のお話からもわかるように、地域の中の進学率の問題というのは山形でかなり大きなテーマになっております。本学は地方国立でありながら自県からの、山形県からの入学者というのは23%ぐらいで、この2年、宮城県からの入学者が山形を超えている状況でございます。山形においでいただくと分かるのですが、朝の時間は大学近くのバス停、10分〜20分おきに仙台からのバスが来て、かなり多くの学生が通学する様子が見られるわけです。

そういったところを考えていくと、やはり地域の中でもどのような形で連携していくのかというのは、もうこれは目の前の課題でもありますし、長期的にやっぱり考えていかなければならない問題だろうということで、今日お話しいただいたところをもう一度思い出して、しっかりと考えたいと思っております。そこにはどうしても高校側がどのような考え方をお持ちなのか、それから高校の状況、山形でいえばもう入試というのは機能をせずに定員割れの状況がひょっとすると続いていくというのが公立高校の特徴になっていって、そういったところとどう我々はこれからお付き合いしていったらいいのかなど、考えることが多い中でこういう機会をいただいて、これまでのお話を聞きながら少しアイデアをいただけたかなと思っております。ありがとうございます。

西郡大教授（討議司会）：

ありがとうございました。

ここからは指定討論での応答から少し離れてみて、司会のほうから指定討論者の出口先生も含めて問いを投げかけてみたいと思います。

私は地方国立大学、佐賀大学に所属しているのですが、地方国立大学のアドミッションセンターと、この東北大学のような旧

帝大を中心とする大学のアドミッションセンターでは、やはり目標といいたうしょうか、方向性とかは結構違っていると思いますし、国立・公立・私立でもその違いというのはかなり大きいものだと思います。

ここでは少し焦点を絞って、地方国立大学という部分に注目して福島先生と出口先生にお伺いしたいことがあるのですが、まず福島先生に。地方国立大学の鳥取大学のアドミッションセンターから山形大学のアドミッションセンターではなくてエンロールメント・マネジメントとかIRを主とする部署に異動された経歴があります。また、今、私立大学で勤務されている経験を踏まえて、地方国立大学のアドミッションセンターの組織の在り方などに何かフィードバックできそうなものがありましたら、少しご意見をいただきたいと思いたう。

またもう一つ、スライド6にありましたケースの多様さというところから、同質でない場合はケースの多様さが重要になるというお話がありました。特にボリュームゾーンとかマージナル層などを対象とした研究を今後増やしていくことは、ケースの多様さというものにつながっていくと思うのですが、私立大学の入試研究は少ないというお話でした。そこで私立大学における入試研究が少ない理由、例えば、外部に出にくいとか、人材配置の難しさとか、そういった背景などがあれば教えていただきたいという点を、まず福島先生にお聞きしたいと思いたう。

出口先生は、地方国立大学の教育担当の理事・副学長として入試業務に関わっておられます。そうしたときにアドミッションセンターなどの専門的な組織にどのようなことを責任者として期待するのかという点や、現在抱えている課題などがあれば、先生の率直なご意見をいただければと思いたう。まず、福島先生、お願いいたします。

福島真司教授：

ありがとうございます。

ちょっとそうですね、山形を離れて一定程度年数がたっていることと、何というか、東京のマーケットというのはまた全然違う理屈で動いていますので、もうそんなフェーズは終わっていると言われたら困るんですけども、今日の中心的なテーマというか、いろんな皆様の講演にも出てきた高大連携とか高大接続という形ですね。ちょっとアドミッションセンター自体が、これはいろんなご意見はあると思うんですが、教育の機能を持つというか、そういう展開が次じゃないかなと思います。

例えば、本当は模擬授業とかは、学部先生、しかもちょっと研究で有名な先生なんか呼びたいということはあるかもしれませんが、なかなかマッチしないこともあると思うんですね。アドミッションセンター自体に、その委員会方式か兼務かはちょっと分かりませんが、そういう高校に対応することを一つの仕事として持っている先生を置いておいて、総探の授業をどうしようとか、そういう相談にですね、こういうことがあって、うちだったらこういう協力ができますよとか、あの大学はこういう先生がいるからこういうことをやってくれるんじゃないとか、相談にも乗れるし、模擬授業ぐらい一つ、どこの学部も、今回ちょっと今入試前だから無理ですとかになったときには、アドミッションセンターもそのときは入試で忙しいかもしれませんが、そういう高大接続の教育をできるような、そういう機能が人なのか、それとも組織的にやるシステムなのか分かりませんが、そんな展開が地方には必要だと思っていました。

選抜議論だけだと、いずれ、先ほど出口先生がおっしゃった、1.0 を切ると、どんな入試をするとか、入試でどんな工夫をするかということは意味を失うこともありますので、

それよりも、これはもう私が山形にいた時代だから、マッチングですね。マッチングをしっかりとすると。最後、もう本当に、何というか、理想的には1倍入試でいいんじゃないかと。倍率が高い入試のほうがいいんだみたいな、10万人志願者を集めたとか、そんな話、まことしやかに出ますけれども、それはもう必要ないですね。定員が1であれば、そこにマッチした1が来ればいいわけですから、そういう丁寧なマッチングができるような、コストもかかるとは思いますけれども、そういうことを地方はやっていかないと、コストがかかるからもうやめるってやっていると、きらびやかなところにどんどん、どんどん人が取られていくんじゃないかと。

東京にふわっと行って帰ってこないというのが一番怖いんです。東京でやるんだという人は東京に行けばいいんですけれども、何となくふわっと行って帰ってこないという方は東京にたくさんいます。いやあ、地元に戻りたいけれども、仕事もないしどうしようという感じですね。でも、それでそのまま死ぬまでいるという人も意外と大勢いる。帰りたいけれども帰れないですね。今さら帰っても誰も知らないとか、そういう人も大勢いて、実は帰りたい人って結構いるんですね。ふわっと来てそのまま東京にいてというのはまずいと思います。地方だからこそ、そこにコストをかけてマッチングをしっかりとやる。

それから、私立の主体的な研究については、そうですね、これは難しいですね。ただ、たくさん高大接続事業などは私大でもやっていますし、桜美林大学に至っては、高大接続自体を学部にするような感じもやっていますし、そういう事例はたくさん実はあって、桜美林なんかはまだ選抜性は高いほうですが、選抜性が低い大学でもいろんなチャレンジをしてたくさんのケースがあるんですね。でも、一般的には、本当に有名大がやれば、みんな注目して「すばらしい」と雑誌にも載るんです

けれども、「いやいや」と、知っている側からすると、そんな大学がやっていることよりも、定員割れして喘いでいるこの短大がやっていることの方が、本当にいいことをやっていますよということもあるんですが、そこは注目されないじゃないですか、全く。

でも、こういう研究会とか学会でケースとして出てくれば、「そんなことまでやっているんですか」とか、「そこでどういうことが起こっていますか」という質問も出たり。

私大では、職員の方が入試実施を行っている場合もあって、アドミッションセンターにも研究者がいないところは結構あって、研究をしないんですが、職員の方に、「あれをまとめてませんか」とか、「この取り組みすごくいいから手伝うんでまとめてませんか」とか。事例として出てくるとすごくいいことをやっているという評価にも繋がることになると思うので、それをどうやって引き出すかというのは難しいのですが、ケースはたくさんありますし、本当に困っている大学ほど本当に必死でやっています。先生方も、入った学生をどう満足させて、就職まで持って行って自己実現してもらうかということを必死でやっていますので、そういうものがもっと出てくるのがいろんな大学にとってすごくいい刺激になると思います。評判がいい大学がやっていることがいいんじゃないかって、いいことをやっている大学がいいんだというようなことがちゃんと客観的に見られるようになったらいいなという気がしております。ちょっと回答がずれたかもしれませんが。すみません。

西郡大教授（討議司会）：

ありがとうございました。

今のお話を聞いて、教育機能が非常に重要だということにそのケースの多様さというものがある参考になれば、我々としても有効に使えるのではないかと思います。

では、出口先生、お願いいたします。

出口毅理事：

地方国立大学で私、理事をして4年目なんですけれども、1年目というのはまさにコロナ禍に入っていた時期で、この時期までは本学、キャンパスが4つあるもんですから、自律分散型キャンパスということでキャンパスといたしますか、学部はかなり権限を委譲してきて、入試もどちらかというと学部単位で企画から実施までやってきたところで、何か入試について言うと、教授会で決めたことに何で口を出すんだという感じだったかと思います。

しかしながら、コロナの影響がだんだん入試に向けて強くなっていくにつれて雰囲気がちよっと変わってきました、いわゆる本部のほうで決めてほしいということが大分多くなってきたかなと。それからの3年、そういう傾向が見られたと思います。

そして、その後、本学もキャンパスが分散しているとはいえ、本部でマネジメントしていく部分というのをかなり強めていかないといけないだろうということで改革を進めてきて、機構化という形で教育推進機構などをつくっていったわけです。ただ、入試をどうするかということにおいて、実は教育推進機構に入試は入らなかったんですね。

私が今、課題に思っているのは、そういう中で入試のいわゆる戦略的なところをどう策定していくのかというときに、私の立場からすると非常に悩ましい問題でもあります。改革をどう進めていくかというときに、これまではどちらかというと学部任せで済んでいたわけなんですけれども、全学的な方向を立てるといふときにどうしていったらいいのかというところが、今悩ましい課題になっています。

ですので、この間、理事特別補佐という制度がありますので、入試に補佐の先生に就いていただいて、いろいろご相談できるというのは、センター的なところと重なる部分があるかなと思っています。ややもすると学部は、

急激に 18 歳人口が減少していくという中で、目の前の学生獲得だけに目がいてしまうのも地方国立大学の宿命かなと思っておりまして、ただそれも大事ではありますけれど、やはり入試戦略を長期的に見て、しっかり持つことが重要であります。先ほど倉元先生から哲学というのが出てきましたけれど、どのように人材育成をこれからしていくのかという視点も交えながら入試を考えていかなければならないわけで、そのためにセンターが持っている先ほどの機能で注目するものがいくつか出てくるのかなと思っています。

ですから、EM 部ということで、うちは事務組織のところは教員がついておりますけれども、事務職員は実施の部分については非常に長けておりますけれども、そういった戦略とか哲学ということになってくると、研究者も含めた大学の教員の活躍する場が必要になってくると思うので、そこを地方国立大学はどのように人材を抜擢していくのか。いなければ、どのように採用して配置していくのかというのは、今日のセンターの話題とも重なる部分かなと思っています。

やはり我々としては意思決定に関わることは、これまで本学は学部長中心、研究科長中心で決めてきたところですけど、そこに対して、何といいましょうか、知恵を、知識を持った教員がいることによってまた変わってくるのかなと考えているところでございます。ですので、先ほど、どういう人員を配置していったらいいのかなという、質問をさせていただいた背景がそこにあります。長くなりました。

西郡大教授（討議司会）：

ありがとうございました。

宮本友弘教授（討議司会）：

私からは倉元先生と齋藤先生に先ほどの出口先生の指定討論でも触れられましたが、高

校と大学との関係性をお聞きしたいと思います。一緒に入試の意義を考えていくことの重要性の指摘があったと思います。齋藤先生のスライドでも何度か倉元先生のお名前が出てきて、高校に行っているいろいろ勉強会に参加されたりしています。実際の東北大学の入試を考える上で、倉元先生のスタンスとして高校の声を聞くということをされていますが、そのあたりの重要性、特にアドミッションセンターの機能として、高校の声をどう拾い上げるかということについて一つお話をいただければと思います。

大学入試の三原則の一つでもあるのですが、入試が高校教育に悪影響を及ぼしてはいけないという観点も昔から言われています。齋藤先生からは、東北大学の姿勢とかやり方を踏まえて、何かご意見があれば伺いたいと思います。では、倉元先生、お願いします。

倉元直樹教授：

今回整理した中でも、「入試広報」「高大連携」「学生募集」・・・これは同じことを言っているようでいながら、実はちょっとスタンスが違うとは思っていますが、・・・これが大事なミッションであるということが示されました。実際、東北大学では、「アドミッションセンター」という名称で組織ができて、それから今の「入試センター」という形に改組されたのですが、最初は AO 入試の部署でした。今は学部入試全般を扱うということです。ずっと一貫して、東北大学に良い学生を獲得するためには、やはり高校が快く送り出してくれるような環境を作らなければならない、ということでやってきました。

ただ、これはやはり「東北大学のために」という目的が、当然、一番にあるわけです。先ほど齋藤先生から「アウトリーチプログラム」の話が出ましたが、懐かしいです。毎年、結局、青森では 6 回実施をしましたかね。大学入試センターからリスニングの器械を借り



て、西郡先生には、多分、3 回ぐらい登壇していただいたと思うんですけども、大学の教員の講演のうち、リスニングに絡めたものは私が担当して、それを含めて 3 本の講演を高校生にお聞きいただくといった内容でした。これは、例えば「それは良い企画だから東京でやってください」と言われても、やらないと思うんです。なぜか。それは、東北大学は東北にあるから東北大学なんです。東北地方の教育全体を底上げすることが自分たちの大学の利益にもなる。

だから、当時、大学の理解があったこともあり、東北大学の入試とは関係なく、それぞれ地域に根差したテーマを選んで講演会を設定していました。「地元って何だろう？」というタイトルも、弘前の高校の先生方と話し合って決めました。弘前という地域は独立している、そこで一生を終えるんだと思っている親子は多いんだけど、この先、人口減少で弘前は消滅可能性都市に入っているよね。外に目を向けさせたい……。じゃあ、逆に「地元って何だろう？」と投げかけて考えてもらおう、という流れでした。そんな感じで一緒にやってきたという感覚があります。

その結果かどうかは分からないんですが、実は、さっき出口先生からもあったのですが、東北大学も東北地方出身者の占める割合がどんどん減っていつている。今年は前期日程で宮城県出身者よりも東京の出身者のほうが多かったということで、かなり地元では話題に

なりました。ただ、本当に深刻なのは宮城県よりも周辺の他県なんです。関係者が来られているので適当にしておきますけれども、秋田県や岩手県ではちょっと今まで見たことがないような状況に陥っている。その中で、なぜか青森はずっと合格者数を保っているんですね。かつて、青森は多分東北 6 県の中で下から数えた方が早いという時期が長かったと思うんですけども、今は東北大学の合格者が宮城県に次いで東北地方で 2 番目です。それを狙っていたわけじゃないんだけど「アウトリーチプログラム」がもしも今の状況にある程度つながっているんだとすれば、結果的に最終的な学生獲得にも結びついている。ただ、これはやっぱり長くやらなければいけないし、ただやみくもに「学生ください」と言っているだけじゃ駄目なんですよね。短期的な利益を追求しても無理だし。そういうところで、やはりそこがもし「哲学」だとすれば、それが我々の哲学としてやってきたところかな、というふうには思います。あんまり宣伝になってしまってもいけないので、このぐらいにしておきますけれども。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございました。

では、斎藤先生、お願いいたします。

齋藤郁子校長：

多分、今、倉元先生がおっしゃったことが全てかなというふうに思いますが、私たちこの間、勉強会をやったときも、何とか東北大学を受験していくということを一緒に考えましょうというもっと先には、やっぱり東北大学への信頼感というのはあるのだというふうに私は思っています。そして、今、東北大学の入試設計の中で、総合型から出願をしていくということが学力にもつながっているという、そういうことはやっぱり実感として、私は持っていて、AO か一般かではなくて、こ

の受験で学力が伸びていくんだという受験設計についてはさすがだなというふうには思っているところです。

そして、先ほどの講演でも少し言いましたが、地方の国立大学ではなく東北大学がわざわざ青森県の各地で講演を主催してくださったということについては、やはり先生方の中に長い時間をかけて信頼が培われてきているのではないかなというふうに、それはじわっと思います。さっきも言ったように、アウトリーチをやったから受験生が増えるということは多分なかったと思うんですけども、教育への信頼感というのはそういうものかなというふうには感じているところです。私見ですけども、以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

対面で話し合うことの重要性がきっとあるんだなと思います。

西郡大教授（討議司会）：

ここからは会場の方、そしてウェブで参加されている方からの質問について、先生方にお答えいただこうと思います。時間の関係で、まずは1人1問ずつ聞きたいと思っております。

まず、報告の逆の順でお聞きしたいと思いますけれども、今度は齋藤先生からお聞きしたいと思います。こういった質問が来ています。「高大連携、特に探究活動の窓口をアドミッションセンターでというご提案がありましたが、例えば弘前大学ではアドミッションセンターではなく、業務課で高大連携関連事業として、出張講義や大学見学等の受付が既になされているようです。問合せは学部ごとのようですが。勤務先の大学でもほぼ同じような状況にあるのですが、どのような形が高校にとって望ましいのか、ご教示いただけますと幸いです」ということです。

齋藤郁子校長：

実は、ちょっと私はこのことを発表する前に、先ほどの倉元先生のお話を聞いて、大学のアドミッションセンターってそんなに人がいないんだというふうに思って、こんな提案をしてはいけなかったなというふうに正直に言うと思っています。なぜアドミッションセンターというふうにお話ししたかという、実は総合大学とかの場合に、バラバラと特定の先生に「先生、こういう研究していच्छるので、ぜひ教えてください」というふうに生徒から直接行って大丈夫だろうかとかです。何かこう窓口になってくださるような、さばいてくださるというかな、そういうところがあれば一番いいのではないかなというふうに思っていて、それは多分生徒とか私たちが問合せをするところって多分教務とか学務ではないような気がして、こういう提案を一つ出してみました。

ただ、実際問題として専任の方が1人もいないというのを聞いて、これは無理なことを言ってしまったというのが正直なところでございます。本音を言えば、そういうところがあつて、そういうことだったら農学部はこの先生がいいですよみたいなことができれば、高等学校としては非常にいいかなと。それから大学のほうも、特定の先生にバラバラと電話が来るようなことはないんじゃないかなというくらいで考えておりました。以上です。

西郡大教授（討議司会）：

ありがとうございます。

実は佐賀大学、アドミッションセンターで窓口を一元化していますけれども、かなり大変な処理になっているということはあります。まだ佐賀は高校が少ないのでいいんですけども。ありがとうございました。

では、福島先生にお伺いします。「東京でもかつての名門女子大学が閉鎖されるなど、少子化の波は想像以上に深刻な流れとなって

います。学問の質を維持しながら多様な受験生を受け入れ、大学としての教育を充実させていくために、地方の高校の教育の在り方も問われると感じました。ただ地方も少子化で、高校入試のレベルも入学者の質も低下している中、維持自体が苦しい学校もあります。この状況について先生のお考えをお願いいたします」ということです。



福島真司教授：

ありがとうございます。

その状況、そうですね。大変深刻な状況です。何というか、例えばお考えが課題解決みたいなものだったら、もう簡単ではないと言うしかないんですけれども。そうですね、例えば最近の話題になった名門女子大の廃止の件ですけれども、あれについてはこれをオンラインで聞かれていたら困りますけれども（笑）、できることはまだまだあったはずですよ、本当に。高校がめちゃめちゃ一流なので、もう高校のブランドに傷がつかない前に閉じたということですから、あれは財務状況を見てもそれほど悲惨ではなかったんですよ。その段階でやめちゃおうということで、でも、それでいいのかなというのは思いましたよね。

学校には卒業生もいますし、社会にそういう卒業生を輩出して貢献してきたわけですね。あとは、教育のナレッジとか、学生同士のつながりとか、先輩後輩のつながりとか、

そういうのがありますので、高校のブランドを守ることだけで判断すべきではない話だと思います。ただ、どうしようもないときはもうどうしようもないんですけれども、あの大学に関して言えば、びっくり仰天というか、もう切っちゃうんだって感じだったですね。

もう1点申し上げたいことは、これは大きな話で、ちょっとどこかに飛んでいっている話だと思われる気もしますが、地域を結局どうしたいのかというところを考えます。このまま学力が下がって、やる気も失って、これは複合的な要因だとは思いますが、日本にはそうじゃない時代もあったわけですよ。

私のお話は、経験ばかりで恐縮ですが、山大時代にモンゴルとご縁があってモンゴルに行きました。モンゴルは、今、坂の上の雲をやっているような学校もあり、たまたま山大のOBが向こうの大名士で、空港のセキュリティゲートが好きに出入りできるような大物で、その方が理事長をやっている学校法人がありまして、その15周年記念パーティーに呼ばれましたんですが、もう卒業生はみんな海外のアメリカやヨーロッパの大学に行って、ノーベル賞候補だとか、あるいは、正課で社交ダンスとかもやっており、もう世界のトップに行くんだという気概で多種多様な学びを深めており、パーティーになるとどんどん会話に誘われて世界を議論し、ダンスタイムになると「踊ってください」とかどんどん誘いに来て、私は「すみません、社交ダンスできません」と、恥ずかしい思いをしました。

国力とかいろんなものって、まだまだ日本のほうが圧倒的です。でも、そういうモンゴルの中でしっかり教育を受けた人たちの中で、世界を見据えて、世界の中でモンゴルをどうするかを考える若者たちがいます。「これは学生を連れてくればよかったな」と思っですごく後悔しましたがけれども、私は、日本はこれでいいんだろうかということを痛切に

感じました。日本も過去にはそういう時代があったはずです。日本もそういう時代があり、それはまたバブルはいつか来る、きっと来るとかそこではなくて、日本は日本で黎明期にさまざまな経験をして、いろんな知見を積んでここまでできたわけですね。だから、今さら明治の立身出世のリバイバルではなく、これまでの経験を積んだ上で、今後の世界で日本がどうあるべきかということを考えたときに、何かもうちょっと目線を上げないと、このまま学生はやる気ないから教えられない、それでいいんだ、で済むんでしょうかというところを、もう本当に本気になって私たちは学生に語りかけないといけないと思います。

長くなってすみません。東日本大震災以降復興支援に関わっています。震災復興は、私は全く専門ではなかったんですけども、2011 年から学生と一緒にというか、学生に教えられて継続していますが、彼らは奇跡のモチベーションを発揮しました。彼らは、「うちのゼミは公務員合格率高いんだ」とか、「上場企業に毎年何人入っているんだ」というモチベーションではなかったんですね。それが響かないから、「若者は草食動物になっている」とか、「野望がない」、「野心がない」なんて年配者は言うんですが、でも震災復興のときに学生が見せたモチベーションって、本当に奇跡のモチベーションですよ。彼らのモチベーションは違ったんですね。「こうすれば、大企業に入って小金持ちになれるぞ」とかじゃなかったんですね。

そういう若い人たちも日本にはいるわけですから、震災の経験から学んだ若い人たちですよ。こういうものが日本の文化というか。学生たちに、本質は何かとちゃんと本気で語りかけて、では私たちはどうあるべきかというふうに教員自身も本気にならないと、私も今、私自身にも言っていますが、ちょっと私も歳を取ってきたので、本当にもう一回巻き直して、本気で地域をどうする、私たちの教

え子をどうするということを考えて、その人たちは、私たちよりもよっぽど長く生きるわけですよ。そういう人たちの人生を私たちは預かっているわけだから、本気で怒ったり、本気で向き合ったり、一緒に喜んだりしないといけないなと思います。それしかもうないんじゃないかなと。状況だけを考えると、もう何ていうか、どんどんみんなやる気なくなっているよね、みたいな話ですけども、そうじゃなくて、教員側が学生のモチベーションに火をつけ切れていないんだと思います。それさえできれば、まだまだできると思います。

偏差値の輪切りの悪影響とか、そんないろいろな問題はもう今さら古いです。もう日本はその時代を越えていますので、もっとこう本気でいろいろな協働をする中で、それぞれの得意なものをより出せるような教育を行っていくということが大切だと思ったり、すみません、何か明確な答えがない状態ですが、そんなふうに思っています。以上です。

西郡大教授（討議司会）：

ありがとうございました。

最後に倉元先生に。先ほどの出口先生からのコメントとも少し関係するんですけども、「国立大学のアドミッションセンターの現状等を概観することができました。日本の大学の入試は学部主体という言及がありましたが、ご指摘のとおりだと思います。現場で学部との協働、すみ分けの在り方に日々苦勞しています。本連絡会議の今後の在り方の一つの方向性として、実際に入試実施等を担う学部教員にとって有意義なものにしていく、もしくは、連絡会議に加盟する各アドミッションセンターが学部とのつながりをさらに密にしていくということもあり得るのではないかと考えました。このことについてご意見いただけますと幸いです」ということです。

倉元直樹教授：

多分、私どもの大学は、学内の意思決定に関しては「起案・提案」をできる立場というふうにお答えしたと思います。実質的にこうなるには正直、時間がかかっています。私、25年目なんですけれども、学部信用を得ていく過程がものすごく大事なんです。絶対にいきなり上から物を言うてはいけません。最初に赴任した頃は、「おまえら、やれることがあるならちょっと見せてみるよ」みたいな雰囲気もありました。その中で、実際、最初にAOに取り組んでいた工学部や歯学部の先生方と一緒に、具体的な問題を一つひとつ考えて解決していきながら、少しずつ信用していただけるようになってきたかな、というそういうプロセスがありました。

その上で一番大きかったのは、高大接続改革の際のかじ取りでした。学部適切な情報を流しながら、かなり独自の路線を・・・と一時期映ったこともあったようなのですが、・・・個別大学として本学を受験しようと考えている志願者の方々に一番迷惑をかける方式を取ったことに関しては、結果的に認めてもらえたのかな、という、そういうようなプロセスがあります。その上でのことだと思っているので。今、一気に、「今、こうなんだけれどもこれを解決する方法があるか」と言われたら、「これはちょっとやっぱり時間かけなきゃいけないんじゃないですか？」とお答えするしかないです。

ただ、出口先生には多分ご理解いただいたと思うんですが、学部がそれぞれ自分たちの考え方でやっていると、高校側から見た、受験生側から見た大学のポリシー、イメージってできないんですよ。これは結果的に大学を毀損することになる。本学でも、正直言うと、なかなか全ての教員にご理解いただけないところもあります。それはそれとして、何とかうまくパッケージとしてまとめながら進めていくという工夫をしています、粘り強く時

間をかけて学部の先生方にご理解いただくための努力を繰り返すことしかないのかな、と思っています。

これは、私にいただいた質問ではないのですが、福島先生が地方のことに関しておっしゃっていたのとは、ちょっと違うアプローチ、私たちは違うアプローチを始めています。東北地方からの志願者・合格者が下がっているという話は、去年のこの会でもしたのですが、もうこれは現場の先生方だけに働きかけても無理だということで、昨年度から、管理職、できれば教育委員会まで巻き込んで、県としてこの状況をどうやって立て直すか、一緒に考えませんか、というアプローチをしています。特に、山形は出口先生のおかげがあるんですけれども、山形大学も一緒になって、山形県の高校教育、進路指導をどうしましょうか、ということで動き始めています。

東北大学というのは、最終的には世界に伍していくミッションを課せられた大学で、いろんな側面で国際的な指標を考えながらやらなければいけないんですけれども、それでもやはり地元には支えられています。河北新報という地元の新聞がこのセリフを拾ってくれて、私は非常にうれしかったんですけれども、「甲子園に出た地元の高校を応援するように、私たちの大学を応援してくれるのは東北地方の皆さん」ですから。東北地方が弱ってくることは東北大学にとっては非常に浮沈に関することだ、という意識の中で、他大学とも連携し、地域の教育をどういうふうに支えていくのか、というアプローチを始めたところ、手をつけたところです。ただ、これは東北大という立場、役目ということがありますので、全ての大学に通用するという話ではないと思います。

西郡大教授（討議司会）：

ありがとうございました。

たくさんのご質問、そしてご意見をいただ

いたんですけれども、3件しか取り上げられませんでした。申し訳ありませんでした。この他のものに関しましては先生方としっかりと共有をさせていただきます。

では、最後に討議のまとめのほうに移っていききたいと思います。



宮本友弘教授（討議司会）：

冒頭の指定討論で、倉元先生への質問に関して、二つほど後半に持っていきますと申し上げました。発展的解消と、担う人材のお話です。倉元先生の発表を見ますと、調査結果を踏まえまして、今後、アドミッションセンターがどうあるべきかと考えたときに、大学にとって必要な組織であるにはどうしたらいいかというような問いが寄せられていたと思います。そのときに求められる機能としては、従来からの調査分析と広報活動、高大連携があったのですが、加えて、いかなる組織形態であっても制度設計が非常に求められているということがあったと思います。

そうした中で、調査分析の土台には入試研究が必要ではないかと。多分この入試研究の在り方も、いろんな形があると思いますし、またこれを担う人も大きな問題だと思います。以上を踏まえて今日のフォーラムのタイトルにあります、アドミッションセンターの将来についてこれから皆さんにご議論いただければと思います。ちょっと取っつきづらいところもあるかもしれませんが、まずは福

島先生、今後どうあるべきかについて、ご意見ありますでしょうか。

福島真司教授：

ちょっと私も出たところ勝負の人間ですので、やってみないと分からないところがありますし、「本気」とか、そういう抽象的な言葉ばかりを使って恐縮ですが、アドミッションセンターにはやはり国立大学だけの連絡会も必要ですし、そこで活性化されるものもあると思います。アドミッションセンター連絡会議が音頭を取るのか、大学入試センターなのか。入研協みたいなのも連絡会ですから、その盛り上がりなのかは分かりませんが、やっぱり国公私を横断したつながりをちゃんと今から構築するために、私自身言いつ放しなんですが、何か具体的に行動する必要があると思います。

国立大のアドミッションセンターというのは、私もそこで鍛えられましたが、何ていうんでしょうか。あんまりありがちな言葉で言うとなんなんですが、「パブリック・リレーションズ」という言葉がありますよね。日本で「PR」というと、単純に宣伝みたいな感じで受け取られますが、あれはパブリックとのリレーション、関係性という意味であり、アドミッションセンターというのは大学で一番外部と接触しているわけです。パブリック・リレーションズで重要なのは、双方向性と、それから情報の非対称性じゃない双方向性というか、いいことも悪いこともお互いにちゃんと情報共有しながら、私たちはこうしたい、それに協力してほしいと。市場というか、高校側も、大学に対して大学にはこうあってほしいというがあるので、大学も覚悟を持ってそういう声も取り入れますということが、本当のパブリック・リレーションズなんですが、アドミッションセンターは現在の大学では外部との一番の関係性の窓口ではないかと思っています。

日本の広報というのは「言及」になっていなくて、自分が伝えたいことをただどんどん言うだけです。ちゃんとニーズを捉えてコミュニケーションを取って、大学への期待を、まずは高校からではありますけれど、多分世の中の期待もあると思いますので、そこを吸い上げて、アドミッションセンターの仕事の枠を超えていくかもしれません。今一番アドミッションセンターがそういうことができている、あるいはできていなければやるべきだと思いますし、大学の未来にとってポイントになると思います。そういう、何ていうか、展開ですね。先ほどの高大接続もそうですけれども、やっぱり連携のハブになっていく、その覚悟を持って進んでいくことが大事じゃないかと思います。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

1 点だけ確認したいんですが、福島先生のご発表の中で、ご自身の経験ではオン・ザ・ジョブでいろんなことを身につけたとあります。そのあたりについてどうお考えでしょうか。

福島真司教授：

これはアドミッションセンターの人材育成についてのご質問でしょうか。

宮本友弘教授（討議司会）：

育成ということで考えた場合に、短大時代の経験が全てだということをおっしゃっていたと思います。そのような鍛えられ方もあると思うんですが、今後の持続可能性を考えた場合、どうあるべきだと思いますか。

福島真司教授：

私が何かやった経験があるわけじゃなくて、私がいた短大は今も何とか頑張っています。そこで困難な教育とか、学生募集を日々続けている教職員がいたり、先ほど申し上げたよ

うに、いろんなケースは実はもう日本中にあるって、それが何か研究で有名な方とか、大学自体が有名だったりするところの知見しかクローズアップされないの、日本中にある知見をもっと掘り出すことが大切だと思います。それから、最近某大学から、ここは国立の大手ですけれども、ドクターから今度大学教員になる学生たちがちょっと大学の仕事をよく分かっていないかなと思うので、大学の仕事って本当はどういうことなのか、彼らに私の経験を教えてほしいということで、私の経験をペーパーにしたことがあります。そういう知見は日本中には本当にたくさんありますが注目されていません。そういう知見を流通させて、理解するべきだと思います。OJTが一番いいのかもしれませんが、他者の経験を聞きながら、ロジカルに分かった上でなるほどと考えることもできると思います。いろいろな知見は、既に日本中にあると思うんですね。それを集めて生かすということがやっぱり大事だと思います。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

出口先生にお聞きしたいんですが、何度も先生のお話の中で出ていたと思うんですが、改めて入試をご担当されている理事のお立場から、今後の地方国立大学におけるアドミッションセンターに求められる機能と人材について、特にこれを重視していきたいという方針があれば、お示しいただければと思います。

出口毅理事：

それは各大学それぞれでいいとは思っております。発展的解消ということはその加盟されている大学で結論を出していくことなので、そこにあえて反応することはないと思うんですが、先ほどのご発表とか含めて言うと、これからのところで求められていく地方国立大

学の中で必要なもの、これはもう地方国立大学だけではないと思いますが、各大学から聞いたところでやっぱり制度設計というところについては、私の立場からいうとかなり重要な要素になってくるだろうと。

それは何かというと、やっぱり大学が抱えて直面している問題解決、短期的・中期的・長期的なところに資する基礎として、そういったベースになるセンターで、福島先生が出されたように入試研究をベースにして考えていかなければならないだろうというところは感じます。

今後、将来ということなのであれば、ここまでの20年のところで、やはりどういう形であれ、何を蓄積、継続して広がってきたのか、あるいは衰えてきたのかということをしつかりと踏まえつつ、やはり新しい側面のところで、冒頭に出した関係でいうとやっぱり信頼に足る関係というものをつくっていかなければならないので、そのベースになるようなものをしつかりとセンターのところではつくっていただきたいと思います。

私が思うところは大学ですので、研究というところは欠かせない一つの要素なんだろうと。やはり学術的研究、これは各大学では、機能的なところ全部のリソースを持てませんので、リソースは限られておりますので、その研究成果を共有できるということが小さい大学にとってもありがたいことだし、そこを第一に考えてほしい。いわゆる学術的意義、そういった価値をやっぱり高めていくことが一番重要かと考えます。

それから、高校とか地域とかを含めて、社会的な意義に対して我々がどう役立っていくのかということをやっぱり考えていかなければいけないということと、その上で各大学の特徴を生かして、各大学が発展していくための意義というところを、やっぱり研究をベースにして大学なので考えていただきたいと思いますというのが私の今日聞いたところでの一つの結論で

ございます。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

倉元先生、先生がご発表の中でたくさん課題を提起していただいたと思います。今のような議論も踏まえまして、それらについての現段階での一つの考えというのをお示しいただければと思うのですが、どうでしょうか。

倉元直樹教授：

まず、国立大学アドミッションセンター連絡会議の組織については、こういった公の場で話すべき話ではまだないと思っていますので、「将来構想ワーキング」の中で詰めていきたいと思います。

アドミッション人材の育成という点ですけれども、実は一つ、私にとっての最大の成功例がこちらに座っています。西郡さん、私の学生として入ってきたときは、「『研究』』ということの意味が分かってないな、こいつは」というところから始まりました。実は、青森で6回やったのはそれぞれ地区を変えてやったんですけれども、その前に岩手で実施した最初の会で、大学院の学生という立場で話をしてもらいました。その後、佐賀大学に採用していただいて、佐賀大学の教員の立場で経験を積んで話をする中で、私にいかにしてひどく鍛えられたか、というような話もしてもらっているんです。最初の職は任期付きだったですよ。ちょっとポジションははっきり覚えていないんですけれども。その中で大学に認められて、正直、国立大学協会だとか公的機関からも呼ばれて、中心的な役割を取って活躍をしています。

要は、入試をばかにしないでやってきたのです。きちんと正面で向き合って、現場の目線で、しかもアカデミックなスキルを持ちながら、自分自身を鍛えていつてくれた成果が今ここにあると思っています。やはり、アカ

デミックに入試に関わる人材というのを育てたいな、と思っています。こういう人材を供給できるような仕組みにしていけることが、逆に言うと、この 20 年間、時間をもしかしたら無駄にしてしまったのかもしれない。これからでもやらない限りは、この先ないだろうなと思っているところです。

私自身、この先そう長くもないので、正直に言わせてもらおうと、やっぱり入試に関わる研究者の中で、大学入試というのは単に自分の研究分野の一つの応用領域でしかすぎなくて、そこで実験をやっているような感覚の人たちが結構いるような感じがしています。私が一番身体を張って対峙しなきゃいけないのは、行政でもなければ、他大学、ライバル大学でもないと思っています。アドミッションに関わる人たちが、きちんとしたスキルを身に着けて、ちゃんと大学入試というテーマに向き合うという文化をつくっていききたいなと思っています。そこに協力してくださる方々がいらっしゃれば、それはもう国公私立問わないというところでございます。以上です。

宮本友弘教授（討議司会）：

ありがとうございます。

研究の重要性ということが改めて伝わったかと思います。

それでは、もうそろそろお時間も迫ってきましたので、最後にそれぞれ先生方に一言述べていただいて終わりにしたいと思います。席の遠い順に出口先生からお願いいたします。

出口毅理事：

まずは、本日、こういう席に参加させていただきまして、ありがとうございました。学ぶことが非常に多かったと思っています。

入試のところにきちんと向き合っていくという倉元先生のメッセージを受けて、これからも、私は先生とは違う立場ですけども向かっていきたいと思いましたし、立場が違う

ので協力できることもたくさんあると思います。そういった意味で入試のところにきちんと向き合っていくということをお誓いして、最後のコメントにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

齋藤郁子校長：

本日はどうもありがとうございました。

私からお願いしたいことは、自分の話の最後に述べたことに尽きると思います。全ての入試が高校の教育を反映した、生徒が成長する機会になる。そして、せっかく入学した生徒が、この入試は使えないなんて言われたくない、そういう入試を多くの大学で設計していただけるような、そういうアドミッションセンターであってほしいなと思っています。今日はどうもありがとうございました。

福島真司教授：

今日は本当に貴重な機会にお声がけいただき、ありがとうございました。心から感謝しております。

今、先生方もおっしゃったように、一人の人間をどう育てていくか。その対象が大勢いるわけですが、そういう感覚だと思います。ちょっと古い言い回しかもしれないですが、入試を境に高校と大学とか、高校と中学が対峙して、どうやって入るか、どうやってうまくふるいにかけるかみたいな時代は日本の場合にはもう過ぎていきますので、そこからどういうふう to 次のステップに進むかというところで、アドミッションセンターというのはそのハブとしての役割をずっと研究してきたところですから、次の時代もいち早く見えているはずではないかと思っています。研究というのは手堅くしっかりと地に足がついたものですが、そういう人たちだからこそ見えている未来があるんじゃないかなと思います。

自分はもう定年している後かもしれませんが、30 年後の高大接続とか中高接続はどう

なっているんだろうかということ、そのときあるべき姿を考えてそのために、自分はもう大学にはいませんが、今できることを協力しつつ若い人にどんどんつないでいくということが大事なと思います。それが組織の学習でもあるし、そういう学習ができるからこそ、学生、生徒の前でも、自分もそうやって学習して成長しているから、一緒に成長しようじゃないかと言えるんだと思います。今、自分にも言っていますけれども。今日はいい機会をいただいて、また、今までさぼっていましたが今日から頑張ろうと、あっ、（懇親会もありますので）明日から頑張ろうと思っています。

以上です。このたびはありがとうございました。

倉元直樹教授：

できるだけ短くいきたいと思います。「入試を設計する」という発想、ないしは「入試設計」ということばが飛び交っていますけれども、非常に嬉しいです。入試と設計と組み合わせ初めて「入試設計」と言ったのは私だと思います。それが、今、常識のように語られているということは、「それぞれの大学が自分たちで入試を設計しなければいけないんだ」という「哲学」が浸透してきたのかなと思います。これが、多分、次の10年に向けての一つの成果でもあり、課題でもあるのかな、というふうに思います。今日はどうもありがとうございました。

宮本友弘教授（討議司会）：

4人の先生方、どうもありがとうございました。

これで討議を終了したいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

閉 会 の 辞

東北大学理事
滝澤 博胤

竹内正興教授（司会）：

それでは、最後に主催者を代表しまして東北大学理事、滝澤博胤より閉会のご挨拶を申し上げます。滝澤先生、よろしくお願いいたします。

滝澤博胤理事：

皆さん、今日は午後1時から4時間を超える非常に白熱したいいフォーラムだったと思います。会場にお集まりの皆さん、またオンラインでも非常にたくさんの方にご参加いただいたということで盛会だったと思っております。

この高等教育フォーラム、本学としては、入試というものをこの春のフォーラムでは大きな次第としまして、毎年テーマを設定して、高等学校の皆さん、先生方、そして大学人、さらには行政の方を交えた形での討論、研究の場として位置づけてきたわけです。

これまでは主に、主体性とは何だろうかとか、あるいは入試制度が変わるときどんなことが起こるか、というような入試そのものの、あるいは入試制度、入試改革、そういうものをテーマにフォーラムを開催してきましたけれども、今回はこの国立大学アドミッションセンター連絡会議 20 周年記念と、その企画の意味もございまして、アドミッションセンターの機能、あるいはアドミッションセンターの使命、そしてこれからあるべき姿はどうなのか、そういうことをターゲットに結構盛り上がったなというふうに思っております。

ご講演、また話題提供いただきました先生



方、さらには指定討論、様々な議論を展開していただきました先生方、そしてたくさんの質問、あるいはコメントを頂戴いたしましたご参加の皆様方に感謝申し上げる次第でございます。

最後、恒例でポスター出していただくんですけども、毎年このフォーラムのポスター、非常に含蓄のあるポスター作っていただいて、それをどう解釈するかというところが私の使命なんですけれども、今回この蝶、私も知らなくて、この間教わって聞いたんですけれども、アサギマダラという蝶だそうです。渡り鳥ならぬ渡り蝶という非常に珍しい蝶で、暑くなれば北上し、寒くなれば南下し、時には海を越える、自分の居心地のいい、あるいは自分のすみかを求めて北へ南へ東へ西へ、そういう渡り蝶だそうです。

これが高校生だとすると、いかにこの地域、この土地に蝶を呼び込んで、その役割を果たすのはこの花なんですけれども、これがきっとアドミッションセンターの位置づけかなと思っていました。実はこの花ですね。これ、フジバカマという花らしいんです。これがア

サギマダラをおびき寄せる。ところが、この花がどうも絶滅危惧らしいと。最近の地球温暖化、あるいは都市化の中で、もちろん蝶が減ってきているという危機感もあるんですけども、花自体が絶滅危惧だというのは非常に気にしていました。

むしろこのフジバカマの花、この花が風が吹こうと気候が変わろうと大地にしっかり根差していれば、必ず季節ごとに蝶がやってくる。そういうような期待を込めて、時に海を越えて蝶はやってくるわけですから、そういう意味でアドミッションセンター、これからますます重要な役割があるんだと。アドミッションセンターがしっかりと大学に根差して、そして、その魅力を発信し、蝶を引き寄せる、そういう環境が持続可能に続いていくということが大変重要だと認識した次第です。

来年、またどういうテーマでこのフォーラムを開くか、また考えていきたいと思いますが、今後も引き続き東北大学高等教育フォーラム、ご興味を持ってご参加いただければと思う次第でございます。

大変遅くまでご参加いただきまして、ありがとうございました。今後も引き続き、本活動にご理解、ご支援いただければと思っております。本日、どうもありがとうございました。

(拍手)

竹内正興教授（司会）：

滝澤先生、ありがとうございました。

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。お忙しい中、最後までご参加いただき、ありがとうございました。

講評

講評 1：第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

青森県立弘前中央高等学校

教諭 寺山 明哲

1. はじめに

第38回東北大学高等教育フォーラムにご招待いただき感謝いたします。青森県立高校の進路指導主事を弘前高校で5年、弘前中央高校で3年務めさせていただいております。よりよい大学入試の実現を目指して、国公立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来を勉強する機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

2. 基調講演について

東北大学の倉元直樹氏の講演により、アドミッションセンターの歴史や役割などを知ることができた。

国立大学アドミッションセンター連絡会議の審議内容やアンケート調査の内容から、アドミッションセンターの役割はAO入試や高大接続における大学入試の設計、入試問題の作成、入試結果の分析などの業務である。ただ、大学ごとにアドミッションセンターの組織や役割が異なっており、大学入試に関わっていないアドミッションセンターや学生指導にほとんど関わっていないアドミッションセンターもあるので、今後どのように変化や進化していくのかは注意していきたい。

高校生が受験を乗り越えて、第一志望の大学へ進学して欲しいと、毎日の授業や進路指導に取り組んでいる私としては、国公立大学のアドミッションセンター同士が協力して、総合型・学校推薦型選抜や一般選抜の入試を、意義ある入試にして欲しいと思う。一つの大学のアドミッションセンターでは、専任の職員の人数は多くなく、大学入試の作題を各学部の教員と調整しながら実行するのも大変である。研究費用も潤沢に使えるわけでもない

であろう。大学間で協力できる部分と協力できない部分があると思うが、人数・物資・資金が必要なのに十分ではないという現状を考えると、大学入試をアドミッションセンターがリードしていくためには、大学間の協力が必要不可欠だと感じた。

3. 現状報告1について

大正大学の福島真司氏より私立大学の教員として、国立大学勤務の経験を活かし、国公私を横断する入試研究への期待を込めた報告がなされた。

高校訪問から得た知見として、地方と都市では大学の情報を見る角度が違ふことがあげられた。地方地域では少数の進路先に関して深い知識があり、都市地域では多数の進路先に関する幅広い知識がある。高校訪問をするだけでなく、入試研究においても地方の教育に向き合って、高校と協力している大学は、生徒や教員などが向いてくれたという実感があるそうだ。

大学入試研究のトレンドは制度変化に合わせて現れてくる。2018年ごろは「AO入試・推薦入試や多面的総合的評価」であったが、2022年になると「入試方式・選抜方法・CBT」と変化していることは興味深い。

大学の偏差値による分布を見ると、国公立大学はSS50台が一番多くなっているが、私立大学はSS50台以下が多く、特にSS30台やBFの大学が多い。第一志望を達成できずSS50以下の第二志望に落としてくる生徒に対し、手厚い大学教育をしないといけなのではないかと感じた。

国公立大学にとって私立大学はライバルではなく、地域の子どもも伸ばす仲間ではないか。

そのエリアの大学がつぶれると、その地区の高校が怪しいと思われるように、日本の大学が怪しいと思われると、日本の教育が危ないと世界から思われてしまうのではないかと懸念されている。

SS50以下の大学生も大切な人材である。その大学その大学生に必要な大学教育も、地域と連携した研究分野も大切なものだと思う。SS50以下の大学入試も、アドミッションセンターの入試研究により良い入試になるのであれば、研究の意義があるだろうと思う。

4. 現状報告2について

青森県立弘前中央高等学校の齋藤郁子氏より、高等学校現場からの視点で大学入試に対しての報告をいただいた。

はじめに国公立大学における総合型選抜と学校推薦型選抜の割合を調べると、学校推薦型の方が多いという報告があった。私は総合型の方が多いと思っていたので、意外だと感じた。総合型・学校推薦型を合わせた定員数が3割に達したということで、総合型・学校推薦型をまとめて扱って報告をされていた。

未来を紡ぐ教員勉強会という有志による進路勉強会を行っている。令和5年2月には「東北大入試を考える」というテーマで、総合型選抜（AOⅡやAOⅢ）に関して青森県高校教員を中心に学び合った。東北大AO入試について教員がわかっていないと生徒を育てられないという思いに共感した。

高校と大学は異なる学問体系なので、高大接続を大学入試だけではなく、高大連携で高校と大学が相互に入っていく、探究を高大連携の中で行うことが必要ではないか。例えば、青森県は男女とも平均寿命が短く、短命県返上というスローガンのもと様々な取組が行われている。短命県返上の取組を調べるだけであれば研究にならないが、大学の先生の知見が入ると、研究や探究となる。

高大連携をアドミッションセンター中心に行うことに利点があるのではないかと。大学教

員と高校教員の個人的なつながりだと、転勤した後につなげられないので途切れてしまう。アドミッションセンター専任の職員が適切につなげてくればミスマッチが少なくなるのではないかと。生徒が大学の研究内容を知って研究室に入りたい意欲が高まることにつながる。

総合型選抜の現実として、高校側が「学力が高いから総合型ではなく一般で受験しなさい」、生徒側が「総合型のために目立つ活動をするべきではないか」、大学側が「総合型の学生が増えて低学力で困る」などという意見がある。総合型にチャレンジして、ダメであれば一般選抜を受験する。合格して学びたい大学学部学科を貫くのが理想だと思う。望みたいことは、生徒の志望や学力を高める入試設計を大学側がして欲しいという思いを聞くことができた。

私はすべての国公立大学の総合型・学校推薦型の入試に共通テストを課すと最後まで受験勉強に取り組むので、学力が担保されるのではないだろうかと思っている。

5. 討議について

（司会）東北大学 教授 宮本友弘 氏

佐賀大学 教授 西郡 大 氏

（討論）東北大学 教授 倉元直樹 氏

大正大学 教授 福島真司 氏

弘前中央高校 校長 齋藤郁子 氏

山形大学理事・副学長 出口毅 氏

- ・アドミッションセンターの機能として、全ての機能を持つ大きなセンターであれば良いのだが、大学ごとに必要な部分や、特化された機能がある。大学間や大学内でより良いアドミッションセンターを共に作っていくには、センターの価値や意義を確認しながら進めていく必要がある。
- ・アドミッションセンター専任教員に求められる資質能力は何であろうか。人材不足に悩まされているが、どういう方を配置すべきか議論が必要である。各大学には地域の

課題から克服していく必要があるのです、そこにアプローチできる人材が良いのではないかな。

- ・私立大学に人が集まらないので、近くの国公立大学と合併するなど、再編の話が出ている。
- ・高校側としては、生徒や高校に対し本音で対話し、本気で育てない大学には行かせたくないと感じている。
- ・各大学のアドミッションセンターで求めるものは違うと思う。地方国立大学にしばって考えると、どのような点が地方国立大学には必要なのか、背景をふまえて研究を増やしていく必要があるのではないかな。
- ・模擬授業が高校側の求めているものと合わないことがある。高校に対応することができる専任教員がコーディネートし、就職なども地域にマッチングできるようにすると良いのではないかな。
- ・青森県は東北大学合格者が東北6県で2番手である。各県とも短期的ではなく長期的に指導計画を立てて行くと良いのではないかな。
- ・東北大学の総合型（AOⅡ）から出願して一般まで貫いて受験することが、学力が伸びることにつながっている。そのような受験の設計を求めたい。
- ・高校の探究活動などで、アドミッションセンターに何人もの生徒がバラバラに問い合わせをして良いのであろうか。専任教員がいれば対応可能かと思うが、専任教員の人数も多くないようなので工夫が必要だ。
- ・それぞれの大学が大学の思いや地域の実情を取り入れた入試を設計することが、成果につながると思われる。また、そこが課題でもある。

6. 終わりに

高校教員の我々が生徒の将来を考えて、人間的にも学力的にも成長するように、毎日の授業や学校行事に本気で取り組み、本気で取

り組ませています。同じように国公立大学や私立大学も生徒や学生の成長を考えて、大学入試をどのように変えていくべきか、アドミッションセンターのあり方から本気で考えていることに、大きな刺激を受けました。ありがとうございました。

私は教育に特効薬はないと考えています。たとえ目に見える効果が小さくとも、長期的な視点で改革を続けていきましょう。生徒の成長が結果として現れるのは、大学入試結果もそうですが、もっとずっと先の社会人になってどのように日本や世界を支えているか、その時なのかもしれません。

フォーラムを開催するにあたり、ご尽力された事務局の方々をはじめ、貴重な講演や報告をしていただいた皆様に深く感謝申し上げます。多くの教育関係者が学ぶ機会として、今後もこのフォーラムが末長く継続することをお祈り申し上げます。今回は御招待いただき、誠にありがとうございました。

講評 2：第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

岩手県立花巻北高等学校

教諭 八尾 晃一

1. はじめに

在籍校の進路指導主事として 4 年目になり、大学入学共通テストとともに卒業生を毎年送ってきた。進路指導の経験が少ない私が、本教育フォーラムに参加させていただいた率直な所感と、副題である「よりよい大学入試の実現を目指して」について述べさせていただく。

2. 基調講演について

「国立大学アドミッションセンター連絡会議 20 年の歩みと今後の展望」と題した倉元氏による講演であった。大学入試の最前線に立っている方によるアドミッションセンターの「違和感と危機感」を直接聴くことができた非常に有意義な講演であり、高等学校の進路指導を担当する教員のみならず、大学入試に携わるすべての高校教員は、生徒の進路達成のため必須で聴いてほしい内容であり、知り得ておくべき調査結果を講演いただくとともに、今後の大学入試の方向性を示唆していただけるものであった。

この講演で述べられた「違和感」は、アドミッションセンターが総合型選抜の実施組織として明確に機能しているのか。「危機感」は、アドミッションセンターが本来の役割を果たせず継続できなくなるのではないかと、ということと私なりに捉えた。

AO 入試が始まって以来、生徒たちがこの選抜方式を選択した際、私は必ず選抜方式の本質や大学側の意図を理解することが大切だと伝えてきた。しかし、共通テスト以降、本質の理解という点において、学校推薦型選抜との差がなくなり、選抜方式の違いがあいまいになってきていることを、進路指導で感じる

ことが少なくない。総合型選抜・学校推薦型選抜における周囲の指導状況をみても選抜方式の違いを生徒に対して明確に示し、進路指導している教員が少なくなっていると感じている。各大学が主体となって求める人材を示し、大学での人材育成や教育に活用すべき入試が、形骸化していく危機感を強く感じると同時に、大学入試にむかう生徒を進路指導する側の、理念や姿勢の重要性を改めて考える講演であった。

3. 現状報告について

現状報告は、私立大学と高校現場の立場から、二人の先生方に貴重なお話をいただいた。

「私立大学における入試研究の課題」の福島先生からの報告では、まず「高校訪問から得た知見」の両地域（地方と都市）の相違点と類似点が興味深かった。相違点は言わずもがな教育環境の違いによる「数」に関するものであったが、類似点の「面倒見よく育ててくれているのか」が、現場の教員によるという意見については考えさせられた。「丁寧」「面倒見よく」「関係性による」は、確かに類似するところであろうが、学習環境・生活環境の違いによる心理的、学力的な側面を踏まえないといけない。都市圏と地方の環境の違いは、情報化が進んでいく今も大きいと感じることが、特に大学入試では強い。送り出す高等学校、受け取る大学、そして受験する生徒とその家庭・家族の視点や環境を忘れてはいけない。特にも社会環境が大きく変わろうとしている昨今、その影響力は教育現場では、どうしても後追い、受動的になってしまう。その点を注視しながら進路指導を進め

ていかなければならないと改めて考えさせられた。そしてもう一つ「大学入試研究の大きすぎる隙間」にも興味を惹かれた。私立大学で50～BFまでの上昇線が今後国公立大学でも起こり得る可能性に対して、これからの進路指導の在り方を再考させられた。そしてBFという語は、大学、教員、生徒のなかで、あってはならないと、強く感じた。

「高等学校から見た高大連携と大学入試」の齋藤先生の報告は、高校現場で毎日過ごしている私にとって、さらに印象に深いものであった。中教審答申に対する「ふーん」や、個別選抜、高大の改革に対する「何が起きているの？」は、現状を捉えたつぶやきとして印象的かつ的を射ていた。加えて高校での教員の立場、生徒の考え、大学の実情を総括した報告であり、高校教員全体が入試の現状と将来像を理解し考え、進路指導を行っていくべきだと感じさせられた。加えて報告の最後にあった「すべての入試において、入学した生徒が『〇〇入試は学力がない』と言われない」のスライドから発せられた、入試に対するメッセージを受け取るとともに、本県においても「未来を紡ぐ教員勉強会」のような大学入試への学力向上を指導する教員同士による「学習の場」の必要性を強く感じた。

4. 討議について

今回のフォーラムを総括する討議は、基調講演・報告を踏まえた高校現場、特に進路指導の最前線に立っている教員に対して、確かな方向性を示唆していただける意見が多く含まれていた。根本的な入試の意義（目的なのか、手段なのか）、アドミッションセンターの現実、大学の哲学、公的な場を意識したミッション、設置形態の違い、大学への信頼など、今回のフォーラムのテーマである「日本のよりよい入試の実現」に対する考え方を、教育現場に、伝達していただいた。もちろん受動的に伝達されたと捉えるのではなく、能動的に教育現場、生徒、保護者に伝達し、情

報共有することの重要性を強く感じさせられた。

また、討議の中での大学側の「高校の声を聴く」をいう言葉に、感謝を改めて感じるとともに、進路指導の責任を強く考えさせられた。責任を果たすため、志望する大学のアドミッションの重要性を教員、生徒に伝え、高校としての受け止め方を考えていかなければならない。何のための大学なのか、大学で何をすべきなのかを生徒自身に問いかけ、ともに考える場を提供していきたい。

討議のまとめにおいて、「大学入試は信頼関係や人材育成」という言葉が印象に残った。

5. おわりに

本校では進路指導に対して、「大学入試の合格は、人生のパスポートを得ることではない」と再三言ってきたことを今回、再考することができた。進路指導課（3学年）に所属し、変わらず毎年高校3年生をむかえ大学入試へと方向性をつくり、卒業へと導いてきた。そのなかで忘れてはいけない視点や理念を本フォーラムで得られることができた。

ポスターに掲載されているアサギマダラ（*Parantica sita*）は、1,000km以上旅をする「渡りを行う蝶」であることを閉会の辞で知り得た。変態し成長する「渡りを行う蝶」を生徒に例えるならば、現状の学習、生活環境を維持して守ることだけに専念するのではなく、世界に羽ばたく人材へと育てる視点やその力を育成しなければならないことを、ポスターを手元に置き見返すことで思い返したい。今回は、答えのないことに答えを出していかなければならない生徒たちを主語にして、進路指導を行っていく、このことを決して忘れてはいけないと感じた機会となった。

講評 3：第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県仙台南高等学校
主幹教諭 北村 孝之

1. はじめに

今回のテーマは、「国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来——よりよい大学入試の実現を目指して——」であった。このテーマは、「国立大学アドミッションセンター連絡会議20周年記念企画シンポジウム」と銘打たれているように、国立大学のアドミッションセンター連絡会議が発足し、以来20年にわたるその取り組みと足跡を振り返る節目として設定されたものであろう。高大接続の柱であるアドミッションセンターと、その要たる大学入試について、検証の眼差しを持ち、よりよい在り方を模索し続けようとする東北大学の姿勢には、頭の下がる思いである。

さて、本フォーラムに参加するにあたり、まずもって自分自身が「アドミッションセンター」というものに対してどの程度理解しているのか改めて振り返ってみたところ、実に曖昧かつ不確実であることに気づかされた。私自身の教員経験としては、国公立大学への進学を希望する生徒の多い学校での勤務が今年で17年目になろうとしている。この間、「アドミッションセンター」や「アドミッションズオフィス」といった言葉は何度も耳にしてきたところではある。しかし、実際にこれらの機関がどのような機能や権限を持つのか、大学の組織内においてどのように位置づけられているのか、構成員はどのようにして決められ、人数規模はどの程度のものなのか、国立大学も私立大学も同じように設置されているのか、こうした詳しい実情については、かなり漠然とした理解しか持ち合わせていなかったわけである。

従って、私は今回のフォーラムに参加するにあたり、次の三点に留意した。第一に、大

学のアドミッションセンターについて、どのような機関であるのかよく知ること、第二に、「よりよい大学入試の実現」について、大学がどのようなビジョンを持っているのか理解を深めること、第三に、これらのことを踏まえ、自分の勤務校や高校教育の場面で生かせることは何かを模索すること、である。

2. 基調講演について

「国立大学アドミッションセンター連絡会議20年の歩みと今後の展望」

東北大学教授 倉元直樹 氏

国立大学アドミッションセンターの実情について、倉元先生より詳細な調査結果に基づく報告がなされた。講演タイトルから、連絡会議20年を経ての成果、あるいは、今後さらなる発展を遂げていくための提案や意気込み等が報告されるものと想像したが、倉元先生の報告内容はそれとは大いに様相を異にするものであり、たいへん衝撃を受けた。今回の倉元先生のご報告は、国立大学アドミッションセンター連絡会議20周年を迎えるにあたっての「違和感と危機感」に端を発するものであり、「30周年は迎えられないのではないか」との危惧からなされたものである。「発展的解消」という言葉が何度か聞かれたことも印象に残った。なお、この「発展的解消」という部分については、倉元先生が報告の総括の場面でも言及されたように、国立大学が公的機関であることに基づき、「本連絡会議の存廃を含めた議論」を行うための「将来構想ワーキンググループの設置」を総会にて提案するという形で締めくくられている。

講演では、国立大学アドミッションセンターの構成や組織系統、専任教員の有無、所属

教員数、人事権の有無、機能、各選抜への関与、人材育成機能等、実に多岐にわたる詳細な分析結果が報告され、国立大学のアドミッションセンターについて大いに理解を深めることができた。このような形で国立大学アドミッションセンターに関する調査、整理、類型化、報告がなされたことは、今回が初めての試みであるとのことである。国立82大学を対象にこれだけの膨大な調査を行い、緻密な分析と詳細な報告を行った倉元先生の、同連絡会議事務局長としての覚悟と使命感、そして揺るぎない信念には改めて敬意を表したい。

さて、同じ国立大学でありながらアドミッションセンターの現状にこれほど差異があることは、決して望ましいことではあるまい。入学者選抜の制度設計にも様々な形で差が生じてしまい兼ねないし、高大連携において重要な位置づけとなる入試研究にも影響が生じてしまうことが予想されるからである。自律的な運用ができるか否かということも大事な観点であるし、所属職員数の違いも業務の遂行に影響をもたらすに違いない（所属職員が0～3名のところと、東北大学のように17名もいるところでは、できることが大幅に違ってくるはずである）。そう考えると、まずはこうした現状について、大学同士が十分に情報交換することが大事なのではないかと思った。あるいは、各大学のアドミッションセンターを統括・管理する、より大きな組織母体が必要となるのかもしれない。さらに、私たち高校教員が、大学のアドミッションセンターに対して拡充や改善の提言をし続けることも大切であろう。各大学が各大学の「常識」に基づいてアドミッションセンターを運用するという従来の在り方は、今まさに見直されるべき時を迎えているように思う。すべての大学が足並みをそろえてみな同じように機能することは難しいにしても、何らかの形で実態を把握したり、提言をしたり、調整を図ったりするような機会、組織はあってもよいのではないだろうか。

3. 現状報告1について

「私立大学における入試研究の課題——国公立を横断する入試研究への期待——」

大正大学教授 福島真司 氏

福島先生からは、私立大学におけるアドミッションセンターの在り方や入試研究の課題等についてお話をいただいた。ご自身の短期大学や国立大学での勤務経験も踏まえてのたいへん示唆に富む報告であった。福島先生によれば、アドミッションセンターを持つ国立大学の社会的使命は大きいとしながらも、高等教育機関の教育の質の向上や信頼性の向上、あるいは、そのために必要な知見の共有、切磋琢磨、人材育成に必要な知の集積については、国立大学だけにとどまらず、私立大学もこれに追随しなければならないという。大学の生き残りをかけたサバイバルや戦いという次元を脱却し、日本の将来や世界の平和というより高次の視点に立ったうえで、大学同士が国立・私立の枠組みを超えて連携していく必要があるという提言には、私も大いに共感を覚えた。

しかし、福島先生は一方で、目の前に学生がいなければ何も始まらない、とも述べていらっしゃった。どれだけ高尚な理念を持っても、どれだけ優れた入試選抜を行っていても、学生が集まらなければ、大学は経営が成り立たない。その意味では、学生募集の在り方が重要になってくるが、どの高校に対しても成功するような高校訪問の知見は存在しない。安定的な学生募集の在り方や大学経営の難しさについて、ご自身の30年にわたるご経験を踏まえながら切実に訴える福島先生の言葉がとても心に突き刺さった。大学経営の場面では、公立高校の教員の私などには決して想像もつかないような困難がいくつもあるのだろうと推察する。理想だけでは立ちゆかない厳しい現実を前に、様々な部分で折り合いをつけながら、それでもなお前に進むことだけを考えなければならないことも多々あるに違いない。大学には、高等教育の場として

の在り方と経営母体としての在り方の両側面があるのだということを、よりリアルな形で認識することができた。

また、福島先生は、ある地域の大学の運営が立ちゆかなくなると、その地域自体が崩壊してしまうことになるため、地域ぐるみで人材を育てる視点をもつべきだとも述べておられた。このことは、当然、高等学校、ひいては小中学校にも当てはまることだと考える。2020年からの新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されている。その理念の実現に向けては、組織的・継続的に地域と学校が連携・協働していくことが求められており、「コミュニティスクール」や「地域学校協働活動」の一体的推進が重要であるとされている。小中学校、高等学校、大学、それぞれの教育機関が校種や設立の枠組みを超え、協働的に地域を支え、新たな価値を創り上げていくことの必要性は、今後ますます高まっていくに違いない。地域創生は、高大接続の大切な観点の一つであるが、その理由や背景について、改めて自らの認識を確認する機会をいただいたことに感謝したい。

4. 現状報告2について

「高等学校から見た高大連携と大学入試」

青森県立弘前中央高等学校校長 齋藤郁子 氏

齋藤先生からは、高等学校の考える高大接続と大学入試、総合型選抜の意義をテーマに現状報告をいただいた。高等学校校長として日々校務ご多忙の中、このフォーラムのために時間をかけて準備をしてくださり、高等学校側の思いや現状を声に出して届けていただいたことは、同じ高校教員としてまさに深謝に堪えない。また、「未来を紡ぐ教員勉強会」といった私設の勉強会を企画し、これまで長きにわたって研鑽を積んで来られたことも、一教員としてたいへん心を動かされたところである。齋藤先生の高校教員としての使命感、責任感、意欲、熱意といったものをひしひしと感じ、たいへん勇気づけられる思いがした。

さて、齋藤先生のお話をうかがう中で、「高大接続」を「大学入試」のことだと短絡的に捉えてしまうことの危険性を改めて自覚した。本来の高大接続改革とは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な改革として出されたものである。確かに、大学入試は高等学校と大学をつなぐ高大接続の要にあたる部分に位置づけられてはいるが、高大接続改革のすべてがそこに集約されているわけではない。大学入試というものを部分的に捉えるのではなく、俯瞰的に、より広い視野に立って捉えることが大切であると改めて感じた。

また、生徒の言葉として「基礎学力が不足しているから総合型で狙う」「総合型選抜のために目立つ活動をしなくては」「部活動をやめたら（総合型選抜の場面で）不利になる」といったものが示されていたが、こうした捉え方は、齋藤先生のおっしゃるように、高校生活そのものをゆがませていく発想であると私も強くそう思う。このような高校生が増えていくとしたら、日本の高校教育は危機的な状況だと言わざるを得ない。私たち教員は、このような考えを生徒に抱かせてしまっはいけない。大学入試もまた然りである。やはり、齋藤先生が最後に述べていたように、「高等学校の教育を反映した、生徒が成長する機会となる」入試を望みたいものである。こうした入試が一つでも多く実現されれば、高大接続も真に理想的な形になるはずである。大学入試が、高校生活の集大成を示す場として機能するようになれば、高大接続もさらに大きく飛躍するのではないだろうか。

5. 討議について

指定討論 山形大学理事・副学長 出口毅 氏

出口先生からキーワードとして提示された「関係性」という言葉が非常に心に残った。アドミッションセンター同士の関係、大学同士の関係、高等学校と大学の関係、こうした「関係性」を、国公私を越えて構築していく

ことの必要性や重要性が説かれていたように思う。いみじくも昨年度の本フォーラムでは、「教育行政と教育現場の『対話』」の大切さが話題として取り上げられていたが、そのことを思い出した。よりよい在り方を互いに模索するためには、やはり対話を続けていくことが不可欠であり、課題を解決する糸口はその先にしかないのだろうと思う。協働的な問題解決は、どの教育現場においても求められるものである。そのことの重要性を再認識させていただいた言葉であった。

また、倉元先生のおっしゃっていた、「アドミッションセンターの先に、入試をどう位置づけるかという『哲学』がある」という言葉もたいへん強く印象に残った。アドミッションセンターや大学入試の在り方を見直し、改善していくことはもちろん大切であるが、そのこと自体が目的なのではない。その先に何を見、何を求めるのか、どのような価値や意義を見出すのか、その視点があってこそその高大接続改革、大学入試改革である。大学同士が「入試の意義」について共通理解をもち、連携を深めながら、高等教育のよりよい在り方を模索していく必要性を説く倉元先生言葉に、先生の強い思いが見て取れたような気がして、身の引き締まる思いであった。

6. 終わりに

本フォーラムに参加し、これまで漠然としか理解していなかった国立大学のアドミッションセンターについて詳しく知ることができたことは本当にありがたい限りである。これは、倉元先生の詳細な調査結果報告によるところが大きい。倉元先生のご尽力には改めて敬意を表したい。また、私立大学のもつ様々な側面について認識を新たにしてくれた福島先生にも感謝申し上げたい。そして、齋藤先生からは、高校現場の現状を声に出して発信することの大切さと勇気を学んだ。今回のフォーラムを受け、アドミッションセンターの役割や使命について理解が深まったこと、

また、高校現場における様々な実情について、共感も含めながら理解を深めることができたことで、自分の勤務校での進路指導や生徒指導、教材研究、授業づくりに生かすことのできる視点も数多く身につけることができた。総合的な探究の時間における取り組みに生かすことのできるヒントもたくさんいただいた。今年も例年に変わらず実り多きフォーラムとなったことを心よりありがたく感じている。

そういえば、平成20年に行われた第8回東北大学高等教育フォーラムのことを思い出す。このとき資料として提示された新聞記事（2008年4月10日読売新聞）の中で、倉元先生は「大学入試は教育の一環であり、入試問題は高校教育の貴重な教材である」と述べている。そして、「勉強せずにすむ制度」を「悪しき入試」としたうえで、「大学過剰時代、良問を通じて受験生を育てる大学か、学力度外視で志願者集めをする大学か。大学の信用と評判を定める鍵となる入試を通じて、大学が試されている。」と締めくくっていた。大学入試の在り方を考えたとき、倉元先生のこの提言はいまでもよく当てはまるように思える。自学の掲げる理念をしっかりと共有し、その実現を目指す入試制度を確実に設計していくために置かれた機関こそがアドミッションセンターなのではないだろうか。東北大学入試センターは、まさにその典型的なモデルだと言えよう。ちなみに、受験生に対し、一貫して良問を提供し続けてきた東北大学の入試問題は、このほど文部科学省から「令和4年度大学入学者選抜における好事例集」に選定されたとのことである。東北大学入試センターが「哲学」を持ち、永年にわたり一枚岩となって前進し続けてきたことの成果と言ってよいだろう。こうしたアドミッションセンターが増えれば、日本の高等教育も変わっていくに違いない。

最後に、ご講演、ご報告された先生方、事務局や関係者の皆様に心より御礼を申し上げますとともに、本フォーラムの益々の盛会を祈

念し，むすびとさせていただきたい。

講評4：より良い高大接続及び高等教育実現に向けての 「目線合わせ」

秋田県立秋田高等学校

教諭 兼 教育専門監 土門 高士

1. はじめに

校内外の対面開催への制限が緩和されたこともあり、久しぶりに東北大を訪れ、発表を目の前で拝聴し、発表者それぞれの課題意識が強い熱を伴って感じられたこと、非常に嬉しく思う。「少子化だからこそ優秀な学生を育てなければならない」と言った東北大総長大野先生の言葉は、高校・大学と立場は違えども目指すゴール・そこへのベクトルは全く同じであることを感じさせるものであり、大学入試とその指導に携わる者として、将来の日本・東北を担う生徒を指導するという自らの使命を強く再認識させてもらう機会をいただけたと思っている。

2. 基調講演 「国立大学アドミッションセンター連絡会議20年の歩みとその展望」

倉元直樹氏（東北大学教授）

高校の側にいるとなかなかその実像・実態が見えてこない各大学のアドミッションセンターの組織形態・機能の多様な在り方や期待されるものについて分類・系統付けした斬新な講演で、現在の各大学のアドミッションセンター及びアドミッションセンター連絡会議の価値・意味と今後の方向性を問う非常にアグレッシブな内容であった。

内容もさることながら、今回の講演を通して強く考えたことは、「不断に組織の在り方・存在意義を問い直し、形骸化を防ぐ姿勢」についてであった。発足当時は確たる理念や課題意識に基づき実施・運営され、その機能・効果にも十分なものが見受けられるが、時の経過とともにその理念は薄れ、実施・運営自体が目的化していくケースはいかなる組織

・事業にも往々にして多く見受けられる。確たる目的意識が共有・継承されていれば、自然とその事業はニーズに適合した熱を持ったものになるが、そうでなければ形骸化し、悪くすれば実施運営する側の多忙感・疲弊感・徒労感を導くだけのものに堕する可能性を有する。むしろ学校現場で散見される現象であり、そういったことを未然に防ぎ、組織・事業の本来の理念や期待される役割を不断に再確認・再共有したマネジメントにスポットライトを照て、より効果的なものにしていくとする意志が明確に感じられた発表であった。

講演者は各大学のアドミッションセンター及び国立アドミッションセンター会議を通時的・共時的に分析しつつ、求められる入試制度設計や研究・人材育成にまで詳細に提案・言及していたが、一方で高大を問わず全てに敷衍できる問題意識、そして現状に対する危機感を投げかけていたように思う。高大接続を考えつつも自らの足下の再確認を促され、襟を正す契機ともなる基調講演であった。

3. 現状報告1 「私立大学における入試研究の課題——国公私を横断する入試研究への期待——」

福島真司氏（大正大学教授）

氏の発表は、体験及びデータに基づいて、現在の入試研究の実践が国公立大学に偏っていることや、研究対象である受験生のボリュームゾーンが軽視されていることなど、現在の入試研究自体が抱える課題を、地方の目線、私立大学の目線、受験生の目線からと複眼的に焙り出し、現在の人口減少下に於いては、各大学あるいは高校といった狭い枠組みでは

なく、高等教育の質の向上や信頼性の向上のために「全体」で知見・予見を共有し切磋琢磨する協働・共創する仲間となって入試研究に立ち向かう必要があること、そしてそういった入試研究をリードする各大学のアドミッションセンター及び国立大学アドミッションセンター連絡会議の使命の大きさを訴える、メッセージ性の強いものであった。

印象に強く残るのは、「そのエリアやその国の高校・大学のいくつかがダメになることは、残った高校・大学の生き残りを示すものではなく、そのエリア・その国の教育に対する不信となって、その後様々な面で負の影響をそのエリア・その国にもたらす」といった話だった。福島氏の話は、だからこそ国ぐるみで研究する必要があるという結論に向かったわけだが、その話を聞いた段階で、やはり即座に脳裏に浮かんできたのは、地元の秋田県であり、東北地方の今後である。急激に加速する少子高齢化、その最前線にいる秋田で、他校に勝った負けたなどといった狭い視野で物事を語っていても秋田県教育力の向上と秋田県生徒の可能性の拡大には繋がらず、ひいては県全体の衰退も免れ得ないことを考えさせられた。それは東北地方という目線になっても同じであろう。まして、東北大合格者数が東北地区以外に大きく奪われたデータが顕著に出た年だからこそそれはなおさら感じるものがある。だからこそ、大学・高校が一堂に集まり「信頼」を共有する仲間として目線あわせをしていく「東北大学高等教育フォーラム」の意義は大きいし、高校のレベルでも他校や他協議会と連携を図り、切磋琢磨していくことの必要性・重要性を認識させられた。

4. 現状報告2 「高等学校から見た高大連携と大学入試」

齋藤郁子氏(青森県立弘前中央高等学校校長)

氏の発表は、高校の側からアドミッションセンターに求めるもの(高大接続としての大学入試、探究などの学問としての高大連携接

続)について、結論に至るまでのプロセスに、これまでの豊富な指導経験に基づき、実際に指導した生徒や、ともに悩み学んだ教員の現実や本音を交えて明快に述べた発表であった。同じ高校現場にいる者として、また、以前から発表者に指導について多々教わることであった身としても非常に共感できるものであった。意見の根底には、高大接続も大学入試も全て教育活動で、生徒の成長が第一義的に求められることが常に横たわる。学びや成長の契機となる入試設計を大学に強く求めるとともに、高校現場の教員も大学の意図や求める力を不断に学び続ける必要があること、教員が不勉強で生徒の可能性を摘み取ったり歪ませたりするような事態はあってはならないことなど、高校現場への警鐘を内に秘めているようにも感じた。

特に強く共感した点は、「高校が育てたい人材像と大学が求める学生像は基本的に同じである」ということと、「学校推薦型選抜・総合型選抜を契機に、生徒が大学に、そして学問に触れ、学びの原動力となるならそれは入試設計としては有効である」という考え方である。とかく高校の教育現場では、一般選抜と学校推薦型選抜・総合型選抜を方式も求めるものも異なると別物のように分けて考えたり、昨今の多忙化防止のやり玉に、指導負担の大きい学校推薦型・総合型選抜を挙げたりする風潮がある。いずれも生徒の成長と可能性の拡大を第一義的なものにしていない点で違和感を常に抱いてきたが、今回の発表ではその違和感を明確に言語化してもらえたように思う。ただし発表者は、我々の指導現場に漂う違和感を指摘するだけではなく、高校現場からとして、全ての入試が、「高校の教育を反映した生徒が成長する機会となる入試」であり、「せっかく入学した生徒が『〇〇入試合格者は学力がない』なんて言われることのない入試」であるよう、大学側に有効な入試設計を強く求める発信も行っている。「生徒のために大学入試はこうあって欲しい」と

自らも発信することでよりよい高大連携に寄与しようとする姿が見受けられる。高等教育フォーラムという場の有効性にも気づかせられる発表であった。

5. 討議 指定討論

出口毅氏(山形大学理事・副学長)

大学のアドミッションセンターのあり方・求められるものについて、非常に多岐にわたる視点から討議が行われた。あまりにも多岐にわたるため、討論をまとめていくことが非常に困難なのではないかというこちらの勝手な危惧も杞憂に終わり、司会進行の尽力ですっきりとまとめられ、理解が多分に促進された感がある討議であった。

今回の討議を通し、アドミッションセンターに求められるものを大掴みにとらえると、

- ① 入試設計を通して、高校と大学そして社会をつなぐ機能
- ② 国・公・私立大が知見を共有し、地域課題の解決にアプローチする要となる機能
- ③ 学びの連携接続として高校と大学をつなぐ機能
- ④ 入試研究を学問として確立しつつ、入試設計を行う人材を育成する機能

ということになるのではないかと思います。

多岐にわたる使命を、大学の限られたリソースの中で実践していかなければならないことは非常に困難なことであろうが、より良い高大接続・高等教育を実現していくためにはいずれも欠かすことのできない視座であり、それを大学に一任するのではなく高校としても意見・情報交換を行うことなどを通して資することができればと感じた。

昨年のフォーラムのテーマが「対話」であったこととも強く関連してくるが、こういった多岐にわたる使命を成し遂げていくためには、多方面との長い時間をかけた関係性・信頼性の構築と、根本理念を互いに理解した連携・協働が必要になる。そういった意味で東北大学が昨年から東北6県各地で、高校と

「大学入試に係る意見情報交換会」を開いていること等は非常によい実践例ではないかと思う。秋田県としても県の教育行政や県内大学なども巻き込んで、せっかくの機会を有効に機能させるようまず足下からしっかりと固めていきたい。

6. おわりに

滝澤東北大理事が閉会の辞で話した、渡り蝶であるアサギマダラとその拠所となるフジバカマの話は非常に印象深い。学生が少子化で減少するのは厳然たる事実であり、その学生が選ぶ中等・高等教育機関もその存在性を揺らがせていくのであるならば、両者の先は暗澹たるものである。今ならば、高校・大学・地域がそれぞれの立場ごとに、自らの使命を不断に問い直し、考えを表現・発信することで目線合わせをし、連携・協働していくことができるし、その意味は大きい。これからの未来を支える学生にも、教育に携わる者にも、そして社会にも、明るい兆しが少しでも見えてくるよう日々模索しながら、校内、県内、東北地区内で常に先生方や保護者と目線を合わせ、生徒の指導に当たっていく決意を新たにさせてもらった。

このような機会をいただけたこと、そして関係の方々に深く御礼申し上げます。

講評 5：入試研究を通して考える高大連携・高大接続の未来

山形県立山形東高等学校

教諭 棚村 好彦

1. はじめに

まずは第38回東北大学高等教育フォーラムへの招待参加の機会をいただいたことに対する感謝と、本フォーラム盛会への祝意を申し上げます。

私が本フォーラムに聴講者として参加するのは今回が3回目（いずれも対面）である。はじめは第28回（平成30年5月開催）の「『主体性』とは何だろうか——大学入試における評価とその限界への挑戦——」であった。まさに本フォーラムの春開催の部（基本的に偶数回）が「高大連携」や「高大接続」を掲げているだけあって、大学側と高校側が同じ議論のテーブルにつくという、私にとっても大変興味深く勉強させていただいた会であったことを今でも強く覚えている。

私ごとに及ぶが、この東北大学で学部生時代から博士（理学）の学位を得るまで9年間学び、他大学でのポスドク（1年半）と法人化直前の国立大学の助手職（2年半）を経験した。その後、出身の山形県に戻り、常勤講師から現在の教諭職に至るまで高等学校の勤務が18年目となる。わずかながらの大学教員時代ではあったが、これをきっかけに高等学校の教育現場においては、理科教育や進路指導などの点において様々な高大連携企画を実施してきた。そのような背景を持つため、本フォーラムの意義は大いに共感できる。

第28回フォーラムの話に戻るが、私は当時、現勤務校での勤務が6年目の年度にあたり、学級担任を外れ、1年限定の「山形県探究型学習推進 中核教員」という立場で、先進校視察や本フォーラムを含む様々な研修に参加させていただく機会を得た。おりしも現行の学習指導要領の告示の年であり、山形県では全

県で「探究型学習」を推進する施策の一つとして、現勤務校を含めたそれぞれ3校の高等学校に「探究科」（2年次以降は「理数探究科」と「国際探究科」に分かれる）や「普通科探究コース」（2年次以降は文型・理型に分かれる）が1年次から設置された最初の年度であった。そのため、育成すべき資質・能力の一つである「主体性」を掲げた第28回フォーラムへの参加は印象深いものがあった。

2回目の参加は、第36回（令和4年5月開催）の「大学入試政策を問う——教育行政と教育現場の『対話』——」であった。この回は、大学側と高校側だけではなく、国立教育政策研究所長も基調講演されるということで、私にとっては「高大連携」や「高大接続」には様々なステークホルダーが存在することをあらためて思い知らされた。このときの私の現勤務校での立場は、3年間の年次主任を終えた直後の進路指導主事であった。現勤務校のほとんどの生徒は東京大学や京都大学、東北大学、地元の山形大学に至るまで大学進学を希望している。生徒の主体的な進路選択をサポートし、大学等の進学先や社会に出ても努力を続けることができる「自立した学習者」を育成するため、同僚はもちろん、地域などとも協働しながら、本校としての不易流行を見定めて適時適切な進路指導を推進する責任を感じている。そのため、現行の大学入学共通テストや情報教育なども含めたこれからの大学入試、高大接続に関する情報を得るためにも、第36回フォーラムへの参加もまた有用であった。

そして今回の第38回フォーラム「国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来——よりよい大学入試の実現を目指して——

一」である。何においても「定義」は大切である。私が本テーマから生じた疑問は、「国立大学におけるアドミッションセンター」とは結局何なのか、また、「よりよい大学入試」とはどのような観点で、どのように実施し、どのように「よりよい」と評価すべきものなのか、ということであった。前述の通りほんのわずかの期間、国立大学の教育職に身を置き、大学入試業務にも関わった経験があるが、試験監督や採点業務（当然、国家公務員の守秘義務があるためこれ以上言えない）にとどまり、大学の理念や方針を実現する入試の設計などには恥ずかしながら思い至らなかった。そのような反省も含め、第38回フォーラムへ聴講参加させていただいての、講評にもならない感想等を私なりに自由に述べようと思う。

2. 基調講演より

「国立大学アドミッションセンター連絡会議20年の歩みと今後の展望」と題した基調講演が、東北大学の倉元直樹教授より行われた。

「国立大学アドミッションセンター連絡会議」（以下、「国立大学AC会議」）は2003年に発足し、今年度で20周年を迎えるということである。まず、私自身驚いたのはこの会議が任意団体ということである。講演では、発足当時は13大学から始まり、2022年度までに41大学が加盟とのことであったが、この拙文を書きながら、「国立大学AC会議」のホームページの沿革を閲覧すると、令和5年5月17日付けで熊本大学が加盟して42大学となったようである。先に述べた私の「驚き」は、国立大学82大学が全て加盟するものでもないのか、またそれがなぜ現在半数近くしかないのかという率直な疑問に基づくものである。

講演の中で「入研協」（大学入学者選抜研究連絡協議会）のワードが出てきた。これは大学入試センターが主催している会で、国公私立大学の入試研究者等が参加対象である。国公私立大学を含まない点では「国立大学AC会議」と「入研協」との違いはあるが、その他

の共通点や相違点は何かというところまでは正直わかりにくかった。

講演の中で、大学ACの組織廃止による「国立大学AC会議」からの退会が1例のみある、とのことだった。先ほどの沿革によると岩手大学（平成29年5月）とのこと。また、組織廃止に至らぬまでも縮小傾向の大学もあるという。結局、大学AC組織が元々存在しない国立大学もあるようで、やはり高校側からみると、大学AC組織の定義が非常にわかりにくい現状を認識できた。多くの高校関係者は、各大学の入試の広報や実施を統括する部署が大学ACであると考えているのではないだろうか。しかしながら現実には多種多様であり、各学部委ねているところもあるとの調査結果。

「国立大学AC会議」の存廃はさておき、各大学の入試に関する組織のあり方や役割、責任の所在をよりわかりやすく整理し、広報していただけるとありがたい。

大学AC所属の教職員数の調査において、東北大学が他大学に飛び抜けて「17名」との結果が紹介された。この第38回フォーラムからちょうど2週間後のタイミング、令和5年5月31日に文部科学省高等教育局が「令和4年度 大学入学者選抜における好事例集」を公表した。この中の区分「思考力・判断力・表現力の評価・育成」の好事例の1つに、東北大学の一般選抜およびAO入試（Ⅱ・Ⅲ）が選定されていた。選定のポイントとして「特任教授（高校教員経験者）及び特定教授（名誉教授）が作題・採点業務支援を実施」、「高等学校学習指導要領を熟知した高校教員経験者による質の高い作題支援」が挙げられていた。つまりこれは大学AC組織作りが評価されたのだと腑落ちする、私にとっては非常にタイムリーなニュースであった。

3. 現状報告1より

「私立大学における入試研究の課題——国公私を横断する入試研究への期待——」と題した現状報告1が、大正大学の福島真司教授

より行われた。福島教授は本校も大変お世話になっている山形大学エンロールマネジメント（EM）部の教授や山形県立高等学校施策への委員をお勤めになっていたこともあり、親近感を持って講演を拝聴した。また、講師ご自身の様々な校種での勤務経験に基づいた具体的な話題とテンポの良さにあつという間に講演が終わってしまった感がある。特に、高校卒業年次が全入することを前提としてではあるだろうが、大学数を減らすことはないというご持論は衝撃的であった。

さて講演の前半「高校訪問から得た知見 ～学生募集・選抜と格闘した30年の経験から～」では、地方と都市の高等学校における進路指導事情について相違点はあるものの、一人ひとりの生徒にはいずれも丁寧な進路指導が行われているとの報告がなされた。また学生募集をビジネスの視点からとらえるお話も新鮮であった。大学入学者選抜は公平・公正・厳格に行われる一般的には無機質的なものであるが、最終的には人同士の関わり合いの視点を高大共に忘れてはいけないと感じた。

後半の「大学入試研究のトレンド」の中で、特に印象に残った問題提起は、私立大の大学入試研究の少なさ、そして「ボリュームゾーン」、「マージナル層」に焦点を当てた入試研究の必要性である。我々高校側でもつい「滑り止め大学」という失礼な言葉を口にしてしまうことがある。結果的に第一志望大学への入学が叶わず、家庭事情等により浪人もできない、となった場合の第二志望以降の大学への受験生のサポートは未だ課題ではある。結果的に、入学後短期間での不本意退学等を避ける点でも、この分野の研究活性化に期待したい。地方創生を目指して行った大学入学定員厳格化が実は地方の高校生にはプラスになっていないのではないかと研究成果も示唆に富む内容であった。

4. 現状報告 2 より

「高等学校から見た高大連携と大学入試」

と題した現状報告 2 が、青森県立弘前中央高等学校の齋藤郁子校長より行われた。

まず齋藤先生自身の行動力の素晴らしさ。平成26年12月の中教審による「高大接続答申」を受けた平成27年1月文部科学大臣決定の「高大接続改革プラン」に端を発した、青森県内での「未来を紡ぐ教員勉強会」を平成27年6月に発足させた。この現場教員の指導力を共有・向上を目的にした会は主催を引き継いで現在も続いているとのこと。例えば、東北大学のAO入試指導を経験する教員に限られているから生徒達もチャレンジしない。だから学校の枠を飛び越えて教員も勉強しよう、といったことである。

本講演では特に大学入試の観点においては、「高大接続」よりも「高大連携」の必要性を訴えておられたのが印象的であった。確かに私自身も「高大接続」よりは冒頭に述べた「高大連携」企画の方に重きをおいてきた。生徒達に様々な大学の研究分野を見せたり触れさせたりしながら、いかに選択肢を増やし、そして適切に選び取らせるか（大学入学後は新しい知識や考え方にさらに触れて、変化しうるものなのであまり分野を狭く絞らせないことが肝要）を大切にする点で、齋藤先生の今回の講演内容に大いに共感する。

もう1つの話題である、総合型選抜・学校推薦型入試について。第一志望大学へ向けてこれらの入試からチャレンジし、最終的には一般入試での合格を目指す生徒の成長ストーリーは、本校でも実際に多く見られている。「生徒が初めて学問と出会うのは実は総合型選や学校推薦型入試ではないか」、「志がいろいろな不足を埋めてくれる」旨の齋藤先生の言葉は、高校側の我々にとって大変勇気づけられるものであった。

5. 討議より

今回は山形大学理事・副学長の出口毅教授を指定討論者として迎え、山形大学の事情も垣間見える形の討議であった。当然ながら基

調講演や現状報告を踏まえた討議が中心ではあったが、東北地区やその中の県をいわゆる「地方」としてフォーカスした内容が特に印象深い。国立大学といえども地域に根ざして存立しているのであり、地域を無視して大学だけが突っ走ることはありえない。企業や自治体、受験生・保護者・教員の高等学校側、そして国、様々なステークホルダーとの「関係性」の中で「納得解」を探り続けていくことが重要である。討議の中でも紹介されていたが、本県山形県では近年、東北大学や山形大学と高等学校側が直接意見交換できる枠組みが関係各所の協力により実現した。私も昨年度より事務局の役割を担いながら参加させていただいている。ともすれば高等学校側の関心は、どうやったら第一志望の生徒をできるだけ多く入学させられるか、というテクニックを含めた「入口」の話に焦点化されがちになる。しかし、大学入学後も広く深く学び、社会に貢献し続ける「出口」人材作りを考えれば、高等学校と大学、そして社会が同じ方向を向いて議論を重ねることは続けていかなければならない。

6. 終わりに

冒頭に私が立てた問い、「国立大学におけるアドミッションセンター」とは結局何なのか、これに対しては、大学によって実に多種多様であることが調査結果から明らかになったとともに、少なくとも高等学校側にはその多種多様性がわかりにくいという側面も浮かび上がらせたように思う。「よりよい大学入試」とはどのような観点で、どのように実施し、どのように「よりよい」と評価すべきものなのか、これに対しては、あまりに壮大な問いであった。これはひとえに、「入試研究」の世界を私が知らなすぎるからなのではあるが、受験生はもちろん、彼らの今後の将来に関わる様々なステークホルダーの「納得感」が重要という点が、この第38回フォーラムを聴講して得た私の「納得」である。

地方は都市部に比べて確実に「少子化」の影響を受け始める。大学入試のあり方もまた変わりゆくだろう。今後も広く情報収集しながら私自身の現在の高等学校の教員の立場であれば何ができるかを考え、実践を続けていきたい。

この第38回フォーラムへの参加が、自身の大きな学びの機会につながっていることにあらためて感謝を申し上げたい。

講評 6：第 38 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

福島県立橋高等学校
教諭 佐久間 裕之

1. はじめに

第38回東北大学高等教育フォーラムにご招待いただき感謝申し上げます。また、国立大学アドミッションセンター（以下、アドミッションセンターと称する）連絡会議（以下、連絡会議と称する）が発足して20年目を迎えましたこと、誠におめでとうございます。このような記念すべき年に開催された今フォーラムでは、国立大学のアドミッションセンターのこれまでの歩みを理解するとともに、指摘された課題や今後の在り方などを高大接続の観点から勉強させていただきました。

2. 基調講演について

ここでは、東北大学高度教養教育・学生支援機構、国立大学アドミッションセンター連絡会議事務局長の倉元直樹教授から「国立大学アドミッションセンター連絡会議20年の歩みと今後の展望」というテーマで講演いただいた。

倉元氏は、連絡会議の20周年記念事業としてアドミッションセンターの実態を調査し、結果を公表した。組織間でアドミッションセンターの実態が不明瞭であるという問題意識から行った倉元氏の調査および分析は、アドミッションセンターの類型化を試みたものだった。

恥ずかしながら、私は「アドミッションセンター」と聞いて、「AO入試に関わる組織」というイメージであり、連絡会議は国立大学同士が自校のAO入試の方針や制度について、相互に情報交換を図り、AO入試の充実を図ることを目的とした組織であろうと考えていた。

このような認識しかない私にとって、倉元氏による調査結果および類型化はアドミッションセンターの実態を理解するにあたって、非常に分かりやすいものだった。改めて倉元氏のご尽力に感謝申し上げたい。

調査結果を聞いて、意外だと思ったのが、アドミッションセンターが選抜実施に必ずしも関与していないということであり、また、組織を通じた人材育成機能がないということであった。なぜなら、アドミッションセンターは、独立行政法人化など、国立大学の環境が大きく変化していた中、各大学が独自に求める学生像を追究した入試制度の実施や、そのための研究が必要であるという経緯で当初設立されたものであり¹、実際の入試にも主導していたと考えていたからだ。これにはアドミッションセンターにおける各大学の位置づけ、各学部の理念などさまざまな事情があるが、当初の理念のもとに設立されたアドミッションセンターの機能の変質したとすれば、倉元氏が指摘しているように、その経緯や原因を今後注視する必要があるであろう。

3. 現状報告1について

ここでは、大正大学のエンロールメント・マネジメント研究所の福島真司教授から「私立大学における入試研究の課題——国公私を横断する入試研究への期待——」というテーマで講演いただいた。

福島氏の講演で印象的だった点が、二つあった。まずは地方の高校と首都圏の高校の相違点と類似点についてである。福島氏の指摘の通り、私も、地方の高校は地元の大学に関

¹ 国立大学アドミッションセンター連絡会議「国立大学アドミッションセンター連絡会議ニュース 創刊号」2003年

する情報は深いと考えている。地方の中堅進学校の高校生の多くは、まず地元の国公立大学への進学を志向する傾向があり、それらの大学に関する受験結果等は各校の貴重な蓄積であり、各校の指導の強みとなっているということを感じた。

次に、国立大学と私立大学の入試研究についての論文数の違いについてである。福島氏は直近5年間にわたる入試研究のトレンドや、国立大学と私立大学を含めた入試研究の論文の著者数の違いについて報告した。報告によれば、入試研究をテーマにした論文数は国立大学がほとんどであり、私立大学からの論文数は少ないということであった。この報告から私立大学では、入試研究という研究分野が国立大学に比べて浸透していないことが実感できた。

確かに地方の私立大学に進学する多くは地元の高校生が多いように思う。しかし、だからといって、地元の高校生が多く進学してくれるから地方の私立大学や短期大学は今後も一定の入学者が保障されるから安心かというところでもないように思う。なぜなら、今後一層地方では首都圏に比べて少子化が進むからだ。そのため特に地方の大学は一層の自校の魅力を高めつつ、このことを地方の高校を中心に発信していく必要があるだろう。そのためにも、自校にどのような学生を入学させたいか、どのような入試制度ならば、それが可能なかなどの入試研究という研究テーマの活発化が求められているのではないだろうか。

地方創生という観点から考えれば、国立、私立を問わず地方の大学は、それぞれの地方に大学がある意味が問われているように思う。その地方だからこそ、盛んな研究テーマがあり、教育環境がある。そのためにも各大学では、例えば、既に実施されているような履修制度をはじめとした横断的な学びができる連携がより必要である。そして、自校の魅力を

発信する入り口として、求める学生像や、そのような学生を受け入れるための入試制度があるという視点が広まってもよいのではないか。また、地方の高校側も、地方の大学の取り組みに今後一層目を向けることが求められており、高大の益々の連携が「共創」の実現のためには必要であろう。

4. 現状報告2について

ここでは、青森県立弘前中央高等学校の齋藤郁子校長先生から、「高等学校からみた高大連携と大学入試」というテーマで講演いただいた。高校教員である私にとって、齋藤氏の講演内容には共感できることが多く、今後の進路指導にあたって、良い刺激をいただいた。

齋藤氏の講演内容で改めて考えたのは「高大連携」についてである。従来からも高大連携の一環として、大学の教授が高校を訪問し、出前講義を行い、高校生が「学問」に触れることで、進学意識の涵養につながるような取り組みは行われてきた。こうした中、新学習指導要領の施行により、高校では「総合的な探究の時間」が始まった。この学習で求められる「探究的な見方や考え方」とは、大学進学後に各自が進める研究の手法と通じるものがあり、この学習の充実が、生徒の知的好奇心を刺激し、社会の課題解決に寄与する人材育成だけでなく、大学への進学意欲向上にもつながると思われる。しかし、現場の教員にとっては指導が難しいと実感している。そのため、大学の教授から探究の手法などの助言をいただくことができると現場としても幸いである。実際福島県では、高校の改革の一環として県内の普通科に、医学・教育・福祉などの分野を志す生徒の職業観や基礎的な素養を養い、目的意識を持って、将来本県で活躍できる人材の育成を目的としたコース制を導入した²。そして、コース制導入が指定された

² 福島県教育長通知「県立高等学校普通科における特色あるコース制の導入について」2020年

各校では、総合的な探究の時間と関連させて、地元の大学から教授を講師として招き、各分野における探究の手法などを講演いただいているようである。

このような総合的な探究の時間の充実の先に、各大学が求める学生像とつながる総合型選抜という入試制度があるように思う。この接続が上手く機能していることは高大接続の望ましいあり方ではないだろうか。

5. 討議について

この討議を聞いて、印象的だったのは、指定討論者の山形大学の出口毅教授が指摘された「関係性」と、アドミッションセンターの人材育成機能についてである。

アドミッションセンターと連絡会議の関係性、国公立間の関係性、高校と大学との関係性など今回の講演を聞いて、入試制度の設計をする関係機関の情報共有をはじめとしたつながりの必要性を感じた。各大学で入試制度を設計するうえでアドミッションセンターが音頭をとるのか、学部が音頭をとるのかという問題であったり、大学が所属している組織であったりこの討議を聞くまでは私の知るところではなかった話が多く、大学が入試制度を設計する上でのプロセスや難しさなどを感じた。

次にアドミッションセンターの人材育成機能についてである。倉元氏は基調講演で、アドミッションセンターの人員の実態について明らかにして、このことについて高校側から登壇された齋藤氏も人員の少なさについて驚かれていたが、私も同じような思いだった。今日の講演を通してアドミッションセンターがもつ機能として入試制度の設計に加えて、多様な機能があることが分かった。しかし、それらの機能を果たせるだけの人員が、アドミッションセンターにいないということを聞き、予算の都合、適正な人材の有無などさまざまな課題があるのだろうと思った。入試制度を設計するうえで、組織がもつ理念と、そ

れを築き上げるための研究スキルが求められているようだが、そのためにも、入試制度というテーマを研究対象にしている人材を、時間をかけて増やしていくことが大切だと感じた。この意味でもこのフォーラムの存在の重要性は高いと感じている。

6. 結びに

この講演を会場で、そして配信された動画を繰り返して拝聴しているが、このテーマについて、いかに自分が知識不足であったかということを感じている。

大学へと送り出す高校側の私が、送り出そうとしている大学側に、入試という高大接続において極めて大事な分野で、どのような課題を抱えているのかということに関心を寄せることが少なかった。進路指導をするうえで、大学入試という仕組み事態が、社会の要請を受けながら、どのような歴史を歩んできたかをある程度理解した上で、指導にあたるのが本来のあり方であるところだが、そこが十分でなかったのは私の至らぬ点であるということを感じたい。

基調講演の話に立ち戻ると、アドミッションセンターという組織は2000年代初頭にAO入試の導入を契機に発足、2014年頃に高大接続という流れをうけて、組織数が増加した。このように社会の要請とともに、アドミッションセンターの数そのものは増加したように思う。そして2023年現在の社会の要請はどうかというと、高校側から見れば新学習指導要領の施行に伴う、新教科・科目の実施であると考えている。先述したように高校側では総合的な探究の時間が始まっている。

このような時期にアドミッションセンターの設立と連絡会議が発足して20年を迎えたというのは偶然ではないような気がする。総合的な探究の時間をはじめ高校と大学がお互いのニーズを把握しながら、大学入試という制度を再考する良い機会なのではないだろうか。そしてその取り組みを行うにあたって、これ

まで高大連携にあたって、大事な機能を果たしていたアドミッションセンター、また各大学のアドミッションセンターをつなぐ連絡会議の存在意義は大きいように思う。同様に、高校と大学をつなぐこのフォーラムの意味もまた非常に大きいと感じている。

アンケート・参加者統計

第38回東北大学高等教育フォーラムアンケート

(回収数 57, 回収率 13.1%)¹

1. 御所属

(1) 高校 : 19 名 (33.9%) (2) 大学 : 32 名 (57.1%) (3) その他 : 5 名 (8.9%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。

(1) よかった : 51 名 (89.5%) (2) どちらとも言えない : 6 名 (10.5%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

(1) よかった : 47 名 (82.5%) (2) どちらとも言えない : 10 名 (17.5%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

(1) よかった : 46 名 (82.1%) (2) どちらとも言えない : 9 名 (16.1%)
(3) 改善すべき : 1 名 (1.8%)

5. ディスカッションは如何でしたか。

(1) よかった : 46 名 (83.6%) (2) どちらとも言えない : 9 名 (16.4%)
(3) 改善すべき : 0 名 (0.0%)

6. 時間は如何でしたか。

(1)短すぎた : 0 名 (0.0%) (2) ちょうど良い : 48 名 (84.2%)
(3)長すぎた : 9 名 (15.8%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

(後述)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

(後述)

ご協力ありがとうございました。

¹ 多重回答、無回答は個別の集計から除く。

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。¹

- (国立大学の連絡会議 20 周年であることはわかるものの) テーマは「国立大学における」というのではなく、公立・私立も含めたアドミッションセンターの今後のあり方(連携可能性)を議論するようにしたほうがよかったかもしれません。(大学, よかった)
- AC の 20 年間の成果と課題, 今後の展望を考える契機となったから。(その他, よかった)
- アドミッションセンターが何をしているのか, わかった(高校, よかった)
- アドミッションセンターが抱える問題は入試が抱える今日の問題を反映していると思います。(大学, よかった)
- アドミッションセンターに着任し日が浅いため, 広い視点をもったテーマは全体像を把握するのに参考になる。(大学, よかった)
- アドミッションセンターの教員の立場の複雑さをみなさんに知ってもらうためには良かったと思います。(大学, よかった)
- これからの大学教育がどうあらねばならないかを考えさせられた。(大学, よかった)
- さまざまな視点から話を伺えたこと。(大学, よかった)
- それぞれの立場に基づいたアドミッションセンターの現状について理解することができた。(大学, よかった)
- テーマとしては大学側に偏りがあるように感じた一方, 現状報告 1, 2 の内容を聞くと, アドミッションセンター連絡会議が, 高大接続に関して成せることは多々あると感じたため, どちらとも言えないという選択としました。(大学, どちらとも言えない)
- 永遠の課題かもしれないが, よいと思う。(高校, よかった)
- 我が国の大学入学者選抜は複雑化する一方, 急速な少子化によって選抜度は低下しており, AP に即した「将来の可能性のある」学生の確保は各大学にとって急務である。より良い入試設計の実現は重要な議題であると感じる。(大学, よかった)
- 改めて現状, 背景の把握ができ, また, 入学者選抜の本質に戻って考えることができる時間となった。(大学, よかった)
- 概ね内容と合致していた。(高校, よかった)
- 高校生の学力を伸ばすための入試を目指しつつ, そこを越えて大学またそれ以降社会での成長につながる入試設計になるよう大学, 高校の管理職, 教育委員会が協働する必要があると改めて感じました。ありがとうございます。(その他, よかった)
- 高大接続改革について考えるきっかけをいただいたと思っています。(高校, よかった)
- 国立大学 AC の役割の重さを改めて認識できました。(その他, よかった)
- 国立大学における AC とは何かを鋭く読み解き, 類型化の試みについては初めてのことで大変興味を抱いた。(高校, よかった)

¹ 末尾の括弧内は所属, 選択された御意見。

- 国立大学におけるアドミッションセンターの機能，使命や変遷含め，情報を共有する機会が今までなかった。今回，改めて「どうあるべきか」を真剣に考える契機となった。（大学，よかった）
- 今後もアドミッションセンターの役割は大きいと考えるので。（高校，よかった）
- 参加当初は，大学だけのものとして拝聴していましたが，討議，閉会の辞を受け，人材育成，教育を考えることができる機会となりました。ありがとうございました。（高校，よかった）
- 大学（アドミッションセンター）と高校の大学入試に関する現在地を知ることができた。（高校，よかった）
- 大学と高校がどう連携していくかを本気で考える契機となった。（高校，よかった）
- 大学のACの現状と課題を知ることができたから。（高校，よかった）
- 大学のアドミッションセンター（以下AC）に対する考えを知ることができたが，これは私の不勉強なところもあり，貴重な話で，高大接続（連携）という知見を深めることができた。（高校，よかった）
- 大学のアドミッションセンターの実情，現状について理解を深めることができた。特に倉元先生の調査結果が詳細で，かつ，類型化されておりとても勉強になった。テーマはアドミッションセンターという，どちらかと言えば大学寄りの問題とも思える話題であったが，高校，ひいては義務教育との接続を担う位置づけとしてのアドミッションセンターのリアルな現実，課題，あるいは，思い，願い，を知ることができた点は大変意義深いと感じている。（高校，よかった）
- 大学の入試設計，高大連携についてのご意見を聴くことができた（大学，よかった）
- 大学入試のあり方に関心があり，とても勉強になりました。（大学，よかった）
- 地球・世界・日本・地域などを持続可能にして行ける人材育成のための一つと考えられる入試設計の重要性を担っているACの方向性を知ることができた。（よかった）
- 地方大学が抱える課題，今後の入試設計に対する課題がよく理解できた。（大学，よかった）
- 当案件については，入手できる他大学の情報が少ないこともあり，大変参考になった為。（大学，よかった）
- 内容的に問題ある発言が多かった（大学，どちらとも言えない）
- 入試制度設計をするアドミッションセンターが現在置かれている位置，私立大学との関係，高校側との認識の違いを提示していただき，多様な観点を理解することができたから。（高校，よかった）
- 本学のアドミッションセンターの今後のあり方を考える上での参考としたい。（大学，よかった）
- 明確でわかりやすかったのではないのでしょうか。（大学，よかった）

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

- ACの機能について，大学によって大きな差があること，現状がよくわかる内容だった。（高校，よかった）
- ACの現状と課題，理想像を知ることができた。（よかった）

- アドミッションセンターで研究するに当たり、課題と方向性が明確になった。(大学, よかった)
- アドミッションセンターという組織体について、横断的に分析されていたのが新しいと感じました。(大学, よかった)
- アドミッションセンターとは、具体的に整理されてわかりやすかった。(高校, よかった)
- アドミッションセンターに関する体系的な説明を知ることができた為。(大学, よかった)
- アドミッションセンターのミッションとなる「入試制度設計」「調査・分析」「高大連携・入試広報」業務を遂行する上で「どのような組織であり、どのような人材が必要とされるのか」人材育成機能の不足をあげられていたこともあり、もう少しお聞きしたかった。(大学, よかった)
- アドミッションセンターの機能性については、各大学で大きな差があることが理解できた。私立大学ではさらに大きな機能差があることが想定される。私立大学まで含めると膨大な調査となると想定されるが、ぜひご検討いただきたい。(大学, よかった)
- アドミッションセンターの現状について理解することができた。(大学, よかった)
- アドミッションセンターの抱えている問題を認識することができ、そこから予想される大学入試などに関する問題点を想像することができたから。(高校, よかった)
- アドミッションセンターの役割について、詳しい状況がわかり、大変勉強になりました。(その他, よかった)
- アドミッションセンターの役割について考えるきっかけをいただきました。高校の現場からは見えにくい部分ですので興味深く聞くことができました。(高校, よかった)
- アドミッションセンターの歴史がよくわかりました。(大学, よかった)
- これまでのご苦労が分かった (大学, どちらとも言えない)
- すみません。アドミッションセンターのことをよく知らず、センターそのものには興味を持っておりませんでした。ご講演を拝聴して勉強になりました。(大学, どちらとも言えない)
- データ(数字)を見ながら考えることができた。(高校, よかった)
- データに基づく客観的評価による課題の抽出がなされているから。(高校, よかった)
- 一口に国立大学といっても入試組織の考え方が大学ごとにこれほど多様であることに驚きました。同時に、高校の側からすると、このことが特に総合型・学校推薦型選抜で求める学生像をイメージしにくくなっている一因であり、各大学の入試についての考え方(アドミッションポリシーなども含めて)を個別に丁寧に読み解くことがますます重要になっていると感じました。(高校, よかった)
- 各 AC の実態から整理されたことで、AC の抱える問題を知ることができた。地元の大学はどうなのかと関心をもった。(高校, よかった)
- 議論を進めるためにも、AC の状況についての網羅的なデータは必要です。地味な調査ですが重要な調査結果を得られたと思います。(その他, よかった)
- 現状に対するそのような危機感があることを初めて知りました。(高校, よかった)

- 高校現場ではあまり考えていなかったことで、大学の事情によって様々なことと認識した。この期にそれぞれが一つの方向性に向かうべき転換期に来たのだらうと考えさせられた。(高校, よかった)
- 時間がたっぷりあったので、誤解無く話が伝わったと思われる。(大学, よかった)
- 初めてみるデータで現在の状況を把握することができました。(大学, よかった)
- 所属大学には直接関係ありませんが、日本の大学入試の基本的なことがよくわかりました(大学, よかった)
- 将来の方向性が少し見えてきた。(高校, よかった)
- 先述の通りです(高校, よかった)
- 設置されている大学のアドミッションセンターの現状を知り得る機会となったので。(高校, よかった)
- 全てが勉強になりましたが「発展的解消」の話が今後組織のある種の「示唆」を感じて気になりました。(大学, よかった)
- 大学により組織の状況がまったく異なることを理解できた。(高校, よかった)
- 大学のアドミッションセンターのことへの理解が進みました(その他, よかった)
- 大学入試に係る内容が少なかった感がある。(高校, どちらとも言えない)
- 大変失礼ながら1時間もなくてもいいと思いました。むしろ第2部のような現場の声を聴ける時間を長くしたほうが良かったのではないのでしょうか。(大学, どちらとも言えない)
- 調査結果からみた好事例・具体例などの紹介も期待していた。(大学, どちらとも言えない)
- 調査結果は大変興味深かったです。(大学, よかった)
- 調査研究の成果を整理して提示していただいたから。この間のお取組は説得力があります。(その他, よかった)
- 立ち位置に戻って、入試をデザインするという意識をもつ時間となった。(大学, よかった)
- 連絡会議の20年の歴史を理解することができた。(大学, よかった)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- アドミッションセンターに着任して日が浅いため、各大学の現状が分かりとても参考になった。(大学, よかった)
- お二人共、お話がリアルで本当に勉強になりました。(その他, よかった)
- それぞれのご経験に基づいたお話から新たな知見を得るとともに自分自身の実感とも重なるところがあり、勇気づけられました(大学, よかった)
- それぞれの立場・経験をふまえた異なる視点からの意見がうかがえた。(大学, よかった)
- それぞれの立場によるものだから、多角的ではある。なるほどとか、へーと思うことがあった。(高校, どちらとも言えない)
- それぞれの立場に基づいたアドミッションセンターの現状について理解することができた。(大学, よかった)

- ボリュームゾーンに存在する私立大学の学生に関する入試制度設計の重要性，高校側が抱えている入試に対する諸々の問題点などを公にしたなかで議論のきっかけを作ってくれたから。(高校，よかった)
- もう少し幅広い観点からのお話が聞きたいです。(大学)
- やはり現場ということで，弘前中央高校の校長の話は共感できる点が多かった。(高校，よかった)
- 各発表 20 分の設定は短いと感じた。二つとも結局何を伝えたいのかわからないところが多かった。(高校，どちらとも言えない)
- 具体的でよかった(高校，よかった)
- 現状の多様性をよく理解できた。(大学，よかった)
- 現状を知ることができた。(よかった)
- 高校，大学双方からの意見に共感できたこと(その他，よかった)
- 高校からの意見を真摯に受け入れることができた。(大学，よかった)
- 高校現場の意見を確認できた。(高校，よかった)
- 高校所属もあり，現場が大学入試に求めていることには共感できるとともに，生徒への AO／推薦の声掛けの認識を改めようと感じた。(高校，よかった)
- 国立大，私立大・短大と多様な御経験のある方ならではの話をうかがうことができたから。(その他，よかった)
- 国立大学と言え，それぞれ，大学の特性によって異なる事情と課題があることを理解することができた為。(大学，よかった)
- 齋藤校長のお話も良かったです，西郡先生の仰せの通り，高大連携は良い面と困った面があります。とりわけ事業の 2 年目以降は高校側が「丸投げ」することもあり，大学の負担増になるケースも散見されます。それを解消するには「単年度限り」の事業としてかかることも必要ではと感じています(本来は継続が望ましいですが)。(大学，よかった)
- 齋藤先生のお話に共感できることがたくさんありました。大学入試を通じて，高校と大学がうまくつながってくれるとよいと思います。(高校，よかった)
- 私立大学からの視点，高校の生の声が聞けて良かったです。(大学，よかった)
- 私立大学や高等学校からアドミッションセンターの視点が伺えてよかった。(大学，よかった)
- 自分が気づいていない問題点を多く指摘していただいたので，参考になりました。(大学，よかった)
- 大変申し訳ございません。業務の都合上で拝聴できませんでした。(大学，どちらとも言えない)
- 短大での話がとても参考になった。(大学，よかった)
- 特に現状報告 2 に拝聴したことにより，大学入試における高大接続という考え方について，はじめて自分の中ですっと理解出来た気がしました。(大学，よかった)
- 特に高等学校から見た高大連携と大学入試について，今まで考えていたことが確信となった。(高校，よかった)

- 特に福島教授の発表では、地域・校種の違いを踏まえた現状の話を聞けたから。(高校, よかった)
- 福島先生ご自身の経歴を元にした視点がとても参考になった。ただ、短大や国立大など複数の校種を経験していない私学の教職員はどういう捉え方なのか、知りたいとおもった。齋藤先生は高校現場の現状をお話いただき、共感できる部分が多かった。すべてがその通り、というわけでは必ずしもないが、選抜の種類によって、生徒の良し悪しを判断する大学がもしあるとすれば、よくないと感じる。(高校, よかった)
- 閉学する学校への配慮の無い発言に憤りを感じた(大学, 改善すべき)
- 報告の内容そのものは良かったと思います。イントロダクションの部分に割いた時間を減らして、テーマに関する部分についてもっとご紹介いただけたら有難かったです。(大学, どちらとも言えない)
- 齋藤先生, 高校側の本音があって良い。(高校, よかった)
- 齋藤先生が大学入試に対して現場からの率直な思いを伝えられたのは大変良かったと感じました。今後どんどん18歳人口が減少し、社会全体が縮小していく中、アドミッションセンターは、高校生・大学生の学びや成長を軸に大学入試を捉え直し、高大接続を強化していくことが今後の課題ではないかと感じました。(大学, よかった)
- 齋藤先生の現状(高校現場の)に沿った報告を大学側にも聴いて貰えたので。(高校, よかった)

5. ディスカッションは如何でしたか。

- (都合により途中退場しました)(高校, どちらとも言えない)
- 1名の話す時間が長く感じた。もう少し短くテンポ良く進行した方が良いのではないか。(高校, どちらとも言えない)
- アドミッションセンターが何を求められているのか、その内容を考える上で大変参考になりました。(大学, よかった)
- アドミッションセンターの要不要に終始しすぎと思った。論点があまり定まっていなかったように感じた。(高校, どちらとも言えない)
- このような形で、立場の違う方が意見交換をする場は継続して設けるべきであると感じた。(大学, よかった)
- これまでの講演で整理できていなかった点について、理解を深めることができた。(高校, よかった)
- さまざまな発表内容を深めることができ、大学側の先生方の率直な御意見を伺えたので、大変勉強になりました。(その他, よかった)
- それぞれの問題意識を捉えることが出来た点がよかった。(大学, よかった)
- それぞれの立場からの意見が聞けたのでよかった。(高校, よかった)
- それぞれの立場で入試に対応していく中で現在の問題点を共有し、そこから将来へとつなげていく視点が焦点化されたから。また、その議論から我々高校側は何を想像して、生徒の育成につなげていけばいいかを考える機会になったから(高校, よかった)
- それぞれの立場に基づいたアドミッションセンターの現状について理解することができた。(大学, よかった)

- 一部上手く噛み合って無かったように思えた（大学、どちらとも言えない）
- 各発表者の方々のお考えが理解できた為。（大学、よかった）
- 講演だけでは捉えきれない内容がよくわかった。（高校、よかった）
- 国立大学だけではなく私立大学を交えての討論がよかった。（高校、よかった）
- 司会進行が非常に手際が良かった。（大学、よかった）
- 自分の関心に合う質問とそうとは言えないものがあつたため、全てを集中して聞くことができませんでした。（大学、どちらとも言えない）
- 進行がスムーズでよいディスカッションだったように思います。それぞれの先生方のお考えを聞くことができとても参考になりました。（高校、よかった）
- 先生方の経験に基づいた現状の課題と今後の展望について説明は説得力があり、今後の入試研究のとてもよい参考になった。（大学、よかった）
- 前述の通り、人口減少社会において大学入試が機能しなくなる危険性がある中、アドミッションセンターや大学全体が、地域社会や学校教育とどう向き合っていくのかを考える機会となりました。（大学、よかった）
- 倉元先生が人材育成に関連して、西郡先生のことについてお話になったことが印象的です。また、倉元先生の入試研究に対する情熱に感銘を受けました。最初に入研協で倉元先生のご発表を拝聴した時から、これまでの研究者とは異なり、極めて実務に貢献する研究をされていると思っています。私もかつて入試実務に携わっていましたので、倉元先生の研究は本当に勉強になります。そのため、後に西郡先生の指導教授が倉元先生だと知った時には、なるほどと合点がいました。西郡先生は倉元先生以上に（失礼！）、入試実務の面でも数々のイノベーションを創出しています。実務への貢献という意味では、他の高等教育研究者の誰よりも有り難く、まさに至宝です。倉元先生がまいた種は確実に実を結ぶと信じています。有難うございました。（その他、よかった）
- 倉元先生の意見、ポリシーに学ぶものが多くありました。（高校、よかった）
- 多様な考えを知ることができた。（よかった）
- 大変申し訳ございません。業務の都合上で拝聴できませんでした。（大学、どちらとも言えない）
- 地方国立大学のアドミッションセンターのこれからを考えさせられた。（大学、よかった）
- 討議司会の方がポイントを明確に進行していただいて、具体例を引き出していただいたり、まとめていただいたりしたから。（その他、よかった）
- 内容が幅広く、まとまるのは難しいが、たくさんの問題提起をうけた気がする。（高校、よかった）
- 発表や基調講演の内容を掘り下げていただいたこと（その他、よかった）
- 表に出てこないような話がたくさんあって充実したフォーラム（高校、よかった）
- 様々な新しい情報を得ることができ、ためになった。倉元先生の「選抜に哲学を」とのお話には大変心を動かされた。東北大への信頼感がなお高まった。（高校、よかった）
- 立場の異なる方々のお話を一度に聴ける機会はなかなかありませんので、大変良かったと思います（大学、よかった）

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか。

- オンラインで参加できる形式を今後も継続していただきたいです。(大学)
- オンライン併用が有り難いです。(その他)
- このような形式でよろしいかと思います。(大学)
- ディスカッションを中心に。(大学)
- どのようなテーマでも参考になります。(その他)
- ハイブリッドを続けて頂けると嬉しい。(大学)
- ハイフレックス形式の継続を望みます。(大学)
- もう少しコンパクトであると参加しやすいと感じましたが、今回のような充実感を得るには、4時間は必要かもしれないと思いました。(大学)
- もう少し質問にもお答えいただけるシンポジウム形式が良いように思います。(大学)
- やはり対面で集まることは重要ではないでしょうか。また入学後の追跡調査等について、どのような視点で行われているのか、高校からは追跡調査をどのようにみているのか、について関心があります。(大学)
- より多い方の声をお聞きしたいです。地域に拘らず、色々な地域の大学または高校の先生たちの考えをお聞きしたいです。(大学)
- 何が入学者選抜をデザインしていくことを妨げているのかを共有していきたい。(大学)
- 各大学のアドミッションポリシーが何を根拠に策定されているのか？などのテーマが興味深い。(高校)
- 高校の先生にももう少し知ってもらいたい、考えてもらいたいことがあります。たとえば高校に呼ばれて大学説明をしますが、そもそも高校の先生が先に話をしておいてもらいたいことがたくさんあります。また大学見学に来られる場合も、引率する先生は休憩に来るわけではないのです。高大接続の施策を、自分たちの勉強不足をいいことに、他人任せにするための行事と勘違いされては困ります。逆に、高校側からも大学に対して知っておいてほしいことなどないでしょうか。ざっくばらんな意見交換ができる場がほしいです。(大学)
- 高大連携を進めていく中でどのように世界、地域に貢献できる人材の育成を図っていくか、そのために、それぞれの立場で何に力を入れて取り組んでいくか。(高校)
- 高大連携教育について／R7入試について／大学再編と方向性。(高校)
- 今回と同じ形式で問題ないと思う。(大学)
- 今回と同様の形式。(大学)
- 今回のように対面とオンラインのハイブリット形式で開催していただけるとありがたいです。(大学)
- 今後も、高校と大学を接続するようなテーマであればよいと思います。(高校)
- 今後も期待したい。(高校)
- 作題について（作問の精査、作題者確保、外部委託の成果と課題など）。(大学)
- 少子化と大学（国公私）の存続について（近い将来）。(高校)
- 新課程の問題点など。(大学)

- 真の高大連携。(高校)
- 世界などで活躍できる日本人の育成と入試の関係と役割。
- 対面とオンラインの併用を続けていただきたい。(大学)
- 大学といえば四大に目が行きがちだが、短期大学の課題につきフォーカスを与えるとしたらどのようなフォーラムとなるか期待したい。(大学)
- 大学教育の変化と進化を知り、高校現場でできることを考える。(高校)
- 探究のあり方、ゆくえ、についてぜひ聞きたい。(高校)
- 特になし。(大学)
- 日本のキャリア教育についてが望ましいです。(大学)
- 日本の研究力の低下は急速に顕在化して来ています。私はこの事と現在の教育（小・中・高・大、又は入試制度も含め）は無関係とは考えていません。この観点でのフォーラムは考えられないのでしょうか？(高校)
- 令和7年度新課程入試，大学の入試設計，世界的に評価される大学の研究と教育の質の向上など。(その他)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

- アドミッションセンターの位置づけや担う役割等を改めて検討する良い機会となりました。(大学)
- アドミッションセンターの教員に必要な資質（スキル、メンタル、知識などなど）の標準化をイメージしているように思いました。しかし、国立大学は90弱、それも総合大学から単科大学、文理、その他様々な大学があり、そこで必要な能力は千差万別です。標準的な能力の開発を考えるのではなく、自主的に学習、能力開発をできる人材に必要な処遇をすべきと思います。今のアドミSSIONの立場の教員の処遇はポスドクに近いものがあります。自分が能力があるかどうかはわかりませんが、必要な仕事を自ら考え、実践していけば学内からの信頼も得られます。(大学)
- ありがとうございました。(その他)
- ありがとうございました。(大学)
- いろいろ勉強になった、ありがとうございました。(大学)
- おつかれさまでした。(大学)
- オンラインでの参加でしたが、対面で参加していた時を同じ発表、討論に参加された先生方の熱い思い、熱量を感じることができましたし、人材育成に向けての意欲のさらなる喚起につながりました。ありがとうございました。(高校)
- テーマに対して理解が浅薄なため、消化しきれいていませんが、大学へ送り出した（す）あとの生徒のことを気にかけて、可能性を信じて進学方法を考えていきたいと思いました。そして、大学でその学生が育っていき、有為な人材になっているかを気にしていきたいと思います。本日はありがとうございました。(高校)
- ポスターの絵解き、含蓄のある結びのお言葉に品位品格を感じました。有意義な4時間15分を過ごさせていただきました。ありがとうございました。今後ともよろしく願い申し上げます。(その他)
- 運営の皆様、いろいろとご準備ありがとうございました。(高校)

- 企画準備から運営までありがとうございました。(高校)
- 貴学の高大連携・大学入試に係る研究は、我が国の最先端に行くものであり、入試担当職員としても、大学院で大学政策を学ぶ身としても、今後も引き続き参考にしていきたいと思います。私立大学まで拡張することは中々難しいかと思いますが、横断的に取り上げていただければなお有難く存じます。(大学)
- 貴重なお話を拝聴できました。ありがとうございました。(大学)
- 高大接続というが、高校と大学が意見をすり合わせる機会はそう多くはない。そういった意味でこのような機会は尊重されるべきであり、大学が抱える危機感や高校の目指すものを共有・再確認できる良い機会であった。(高校)
- 高大連携については、とても共感しました。また、東京にいるために、地域によるさまざまな問題への認識が浅かったことを深く反省しました。(大学)
- 今後のアドミッションセンターの在り方について現況や展望含め、理解できました。倉元先生、福島先生、齋藤先生、ありがとうございました。(大学)
- 準備・実施等大変であったかと思いますが、今後もこのような場を継続して設けていただきたいと思います。(大学)
- 初めて参加いたしました。これまでの流れをふまえて大学入試に関して改めて考える機会になりました。ありがとうございます。(大学)
- 初めて参加させていただきました。高校で進路指導に携わってきましたが、大学入試のあり方について、大学の現場からの報告や提言などを聞く機会がこれまでなかったため、とても興味深く聞かせていただきました。(高校)
- 少し話が早口になられる場面がございましたので、時間配分を事前に調整されては？と感じました。内容はとても良かったです。(大学)
- 色々とお世話になり、有難うございました。(大学)
- 大学入試について多方面から考える貴重な会だと思います。今後も継続を望みます。
(その他)
- 地方教育機関がもつ課題を知ることができた。教育に携わる者として深く考えていく必要を痛感した。(高校)
- 登壇者の選考は是非慎重にお願いします。(大学)
- 東北大学は日本・世界だけでなく地域に根ざした取組を、長い年月をかけて取り組んできたことが高い評価を得ていると実感した。また、高校現場の声を拾う姿勢は他大学においても是非とも見習うことだと考える。(高校)
- 特になし。(大学)
- 日本の大学入試の方向性を改革・更新していく上で、極めて重要なフォーラムです。
- 入研協という集まりが、その理事会や主要メンバーの世代交代に失敗していることもあり、期待できない分、国立大学アドミッションセンター連絡会議のような組織が重要になってくる可能性を感じている。(大学)
- 本日(5/17)は全国高等学校校長会総会と重複(日程が)の為に、参加者数が少なくなったと考えられます。開催日の決定は難しいと思いますが、参考にして戴ければ幸いです。(高校)

- 本日は、貴重なお話を聞く機会をつくっていただき、ありがとうございました。特に大学側の視点で、さまざまなお話を伺えたので、大変勉強になりました。大学のアドミッションセンターの役割を理解しつつ、高大連携について、私としても取り組んで参りたいと思います。(その他)
- 毎回、学ぶところが多く、入学者選抜に携わる関係者への貢献は多大です。できるだけ継続してください。(その他)
- 毎回、好企画のフォーラムを開催していただきありがとうございます。(大学)
- 毎年有意義なフォーラムを開催していただき、感謝申し上げます。私は高校教員なので、大学側から高校での教育がどう見えているのか、どう物足りなさを感じているのかを知る機会があれば、とてもありがたいです。今後ともよろしくお願いいたします。
(高校)
- 様々な視点からのお話が聞けて勉強になりました。ありがとうございました。(高校)
- 話すスピードが早い。(高校)

参加者統計

1 参加者総数: 477 名

(講演者・招待参加者: 17 名, 大学: 266 名, 高校: 112 名, スタッフ等: 24 名, その他: 58 名)

1.1 来場参加者総数: 111 名

(講演者・招待参加者: 15 名, 大学: 33 名, 高校: 32 名, スタッフ等: 22 名, その他: 9 名)

1.2 オンライン参加者総数: 366 名 (参加申込者数)

(講演者・招待参加者: 2 名, 大学: 233 名, 高校: 80 名, スタッフ等: 2 名, その他: 49 名)

2 参加者地域別

宮城県内: 96 名

宮城県以外の東北地方: 85 名

(青森県: 16 名, 岩手県: 19 名, 秋田県: 14 名, 山形県: 23 名, 福島県: 13 名)

東北地方以外 294 名

(北海道: 19 名, 茨城県: 8 名, 栃木県: 6 名, 群馬県: 5 名, 埼玉県: 6 名, 千葉県: 10 名, 東京都: 68 名, 神奈川県: 11 名, 新潟県: 3 名, 富山県: 2 名, 石川県: 4 名, 福井県: 1 名, 山梨県: 9 名, 長野県: 1 名, 静岡県: 6 名, 愛知県: 13 名, 三重県: 2 名, 滋賀県: 2 名, 京都府: 10 名, 大阪府: 16 名, 兵庫県: 8 名, 奈良県: 1 名, 和歌山県: 2 名, 鳥取県: 3 名, 島根県: 4 名, 岡山県: 4 名, 広島県: 12 名, 山口県: 8 名, 徳島県: 5 名, 香川県: 3 名, 愛媛県: 2 名, 高知県: 4 名, 福岡県: 15 名, 佐賀県: 2 名, 長崎県: 3 名, 熊本県: 6 名, 大分県: 1 名, 宮崎県: 1 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 7 名)

不明 2 名

2.1 来場参加者地域別

宮城県内: 50 名

宮城県以外の東北地方: 27 名

(青森県: 6 名, 岩手県: 7 名, 秋田県: 2 名, 山形県: 8 名, 福島県: 4 名)

東北地方以外 33 名

(北海道: 1 名, 茨城県: 1 名, 栃木県: 3 名, 東京都: 9 名, 福井県: 1 名, 山梨県: 3 名, 長野県: 1 名, 静岡県: 1 名, 愛知県: 1 名, 大阪府: 2 名, 兵庫県: 1 名, 奈良県: 1 名, 広島県: 1 名, 香川県: 1 名, 愛媛県: 2 名, 佐賀県: 1 名, 熊本県: 3 名)

不明 1 名

2.2 オンライン参加者地域別

宮城県内: 46 名

宮城県以外の東北地方: 58 名

(青森県: 10 名, 岩手県: 12 名, 秋田県: 12 名, 山形県: 15 名, 福島県: 9 名)

東北地方以外: 261 名

(北海道: 18 名, 茨城県: 7 名, 栃木県: 3 名, 群馬県: 5 名, 埼玉県: 6 名, 千葉県: 10 名, 東京都: 59 名, 神奈川県: 11 名, 新潟県: 3 名, 富山県: 2 名, 石川県: 4 名, 山梨県: 6 名, 静岡県: 5 名, 愛知県: 12 名, 三重県: 2 名, 滋賀県: 2 名, 京都府: 10 名, 大阪府: 14 名, 兵庫県: 7 名, 和歌山県: 2 名, 鳥取県: 3 名, 島根県: 4 名, 岡山県: 4 名, 広島県: 11 名, 山口県: 8 名, 徳島県: 5 名,

香川県: 2 名, 高知県: 4 名, 福岡県: 14 名, 佐賀県: 2 名, 長崎県 3 名, 熊本県: 3 名, 大分県 1 名,
宮崎県 1 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 7 名)
不明 1 名

多くの方々に御参加いただき, ありがとうございました。

第 38 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	倉元直樹		
企画責任者	倉元直樹	宮本友弘	
事務局	久保沙織	林 如玉	加藤徳善

当日スタッフ

竹内正興（香川大学）		西郡 大（佐賀大学）
石井裕基	秦野進一	駒形一路
秦 孝子	三戸 望	末永 仁
阿部和久	田中秀樹	鎌田裕子
竹浪綾子	千葉礼子	

共催：国立大学アドミッションセンター連絡会議

本企画の一部は、JSPS 科研費 21H04409 の助成を受けた

IEHE Report 87*

第 38 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [20]

国立大学におけるアドミッションセンターの現在と将来
——よりよい大学入試の実現を目指して——

発 行：2023 年 11 月

編 集：久保 沙織

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@grp.tohoku.ac.jp

印刷所： 有限会社 明倫社

*No.55 以前は、CAHE TOHOKU Report として刊行

